

河合内藏助
右は川村新六儀日光表御修復御用罷越河野藤九郎儀は當巳十月迄服中に付御清御道具筋吟味筋差支之儀も有之候間當分添奉行の助可相勤旨伊豆守殿被仰渡候
四七月

尤定式も相兼候由與頭衆被申聞候
八月 大

- 備中 加藤惣兵衛
- 對馬 關川 庄右衛門
- 攝津 中島 宇右衛門
- 周防 杉原 四郎兵衛
- 肥前 蜂屋十郎右衛門
- 肥後 堀内 小膳
- 肥前 鈴木 傳右衛門
- 飛彈 小野藤九郎
- 横田十郎兵衛
- 坂久間左京
- 朔日 寄合番
- 三日 推名坊右衛門 塚越藤助 松田伊左衛門

向後
一伊豆守殿御壹人御勝手方御取扱之旨專阿彌を以被仰聞候
四 日

一城州小枝橋掛直書付五通三册左之通書付御勝手方へ引渡す
御勝手方へ 關川庄右衛門

城州紀伊郡小枝橋掛直し之儀堀田大藏大輔殿被差出候書面之趣に而は請負年限相立候に付公議御入用を以御修復可被仰付候間掛直御入用小堀縫殿へ爲可申進旨先達而被仰下候由に有之候處近年神寶方掛に而右小枝橋之儀御斷下等取扱候義無之且小堀縫殿差出候書付にも寶曆之夏掛直候義有之候處是又神寶方掛に而取扱候書留相見不申候事
巳八月

四日 何方中
一今日矢橋松次郎評定所留役被仰付候池田要人跡也
御勘定出役 同
十一日
一今日日本多鐵藏三島所左衛門御取箇方出役被仰渡候
今日茶半斤出す 菜番なり

十五日

一今日萩野伴右衛門悴 筆算御吟味有之明日奉行衆吟味役衆貳階吟味方詰所にて御寄合有之
十六日 鍵番 大田直次郎 安岡剛三郎

一御徒目付兩人見廻りに來る
一今朝三州大樹寺御道具御見分有之中川飛彈守殿 三橋藤右衛門殿御勝手掛田口五郎左衛門市野茂左衛門來
一今日松田伊左衛門米田吉太夫山田益彌御勝手助へ入岡本勇太郎御勝手方當分助

十七日 御勘定評定所留役 安井平十郎 伊庭惣兵衛跡
請取申銀子之事 但丁銀也

銀三拾枚 此貫目壹貫貳百九拾目
右は境内に有之候宇賀神堂類焼に付再建爲御手當被下置候間書面之通り請取申候處仍如件
寛政九巳年八月 相州藤澤 清淨光寺

上野善右衛門殿 鈴木傳右衛門殿

寛政御用留

倉地政之助殿

巳八月廿日飛彈守殿御渡壹通

中川飛彈殿え

板倉周防守

相州藤澤清淨光寺先達而御寄附之儀御願候爲御手當等被下候例も無之に付願之趣は不被及御沙汰候乍然宇賀神堂類焼に付再建難及自力由に候間格別之譯を以爲御手當銀三拾枚被下候以來容易には難相成事に候間其段も可申渡尤各方え御談可申上旨對馬守殿以御書付被仰聞候に付及御掛合候否被御申聞候様いたし度存候

八月

下札

御書面御掛合之趣候承知いたし
則御銀請取手形案取調進達いたし候本紙并寫御添差出可申旨御申渡有之様存候
八月 中川飛彈守

一増上寺 台徳院様 桂昌院様 御靈前御道具御修復御入用之儀申上候

月光院様 書付御廻し出す 鐵太郎請取

廿五日

中川飛彈殿へ 板倉周防守

相州藤澤清浄光寺御手當銀請取手形本紙并寫壹通
差進申候依之御差越候手形案返却いたし候且右案
文には清浄光寺と有之候得共役僧興徳院出府いた
し相願候に付右名前に相認差出申候清浄光寺宛名
前に無之而は不相濟候は、猶又被御申聞候様いた
し度存候

廿七日

御作事奉行

石川左近將監

久世丹後守跡

御勘定奉行被仰付候

御勝手方

引けより御祝儀に參候

一今日清浄光寺手形取調裏書いたし今朝吟味役小笠
原三九郎殿押切長印共取候處今日左近將監殿御役
被仰付候一同如何可致哉と庄右衛門殿へ承合候處
已八月の下へ廿七日と日附を書入候得は宜候由申

開奉行衆御判相濟同卅日土井大炊頭板倉周防守殿
へ被遣候由庄右衛門申聞

九月

對馬 松山惣右衛門
出雲 村田鐵太郎
右京 中島宇右衛門
内記 鎮目牧太
土佐 永田松次郎
肥前 小倉孫左衛門
飛彈 倉地政之助
河合内藏助

蜂屋源八郎

渡邊久藏

一右は節句に付十日渡りし手形八日渡りに成候由
一美濃紙半分堅紙の明細書出候様西澤與左衛門申候
に付認め出候

十一日

一石川左近將監殿へ御登城に付參上^{麻上} 御逢有之
^{川人} 大野市之進佐藤市之進杉江勘兵衛

一昨十日未刻間宮筑前守殿御死去御届出候由
十三日

一叡山山門惣而御修復御用掛り被仰渡 田口五郎左衛門 市野茂左衛門

杉江勘兵衛 吟味方 大瀬新次郎
江戸掛 勝興八郎 保田定市

一羽州大清水大行院勸化願御廻し出す

十六日

一右同斷御廻し濟

十七日

一紅葉山御成に付

十八日

一羽州大清水勸化願下札いたし伊豆守殿へ青木忠左
衛門よりたのみ田中吉藏を以て上る

十月

四日

五日

一玄猪之御祝儀有之

十二日

一御誕生之御祝儀有之

廿三日

一菅沼下野守殿御勘定奉行被仰付候直に御祝儀に參
る

廿三日

一芝與一右衛門日光表より歸着

廿三日

廿五日

一上野御統々様御道具帳貳冊飛彈守殿御渡

卅日

増上寺

一天英院様 御靈屋御道具并
崇徳院様

一肥前守殿下野守殿下御勘定所御廻り

見分濟

吟味方 笹本清次郎
組 頭 關川庄右衛門

一肥前守殿下野守殿下御勘定所御廻り

十一月 大

采女 松山 惣右衛門
兵部 村田 鐵太郎
淡路 安井 平十郎
因幡 杉原 四郎兵衛
土佐 蜂屋 十郎右衛門
飛彈 堀内 小膳
下野 倉地 政之助
介 河合 内藏助

新見長門守

佐久間左京

七日 一谷中感應寺富興行願御廻し出す 掛り庄右衛門

八日 一 小石川傳通院

瑞巖院殿御常用御道具御入用伺御廻し出す
瑞巖院殿御靈前御常用新規御道具御入用之儀御
伺候書付

中川 飛騨守
石川左近將監
大久保 内膳
肥田十郎兵衛
小笠原三九郎
御勘定方

去月十三日御渡被成候土井大炊頭差上候
瑞巖院殿御靈前御常用新規御道具御入用吟味仕候
趣左に申上候

一銀五貫五百八拾九分八厘餘
金に九拾三兩餘 御道具類

外壹口 參拾貳口 新規出來
添奉行方傳通院
對談之上奉申候
右御道具類之儀添奉行へ申渡見分之上傳通院

可成丈省略仕實々無之候而は難相成分計出來之積
り内御戸張地御膳本二三皆具は大奥より相廻り有
之候間添奉行より對談之上御常用積にいたし御入
用本途直段并前々出來直段に見合吟味仕候處相違
無御座候間右御入用仕を以新規出來之積り取掛り
之儀添奉行へ申渡候様可仕候哉此段奉伺候以上
巳十一月

一紅葉山御道具并
御宮
増上寺

清揚院様 御靈屋御道具

崇源院様
天英院様 御靈屋御道具御入用御内貸手形三通
今朝小笠原三九郎殿御切長印とも取之御取箇方詰
番和田爲右衛門を頼御判取添方中村小平太へ渡し
遣す 鐵太郎殿押
切取置候

十四日 谷中感應寺富興行願奉行衆吟味役衆御廻し濟内膳
殿附札有之候間別紙書付庄右衛門へ出し置く
一玉藥組國役帳内を被頼國役掛河合徳左衛門へ帳面
遣し御代官請取手形も遣し申候御代官請取手形へ

押切印
左之通り張紙いたし返す

國役金納證文改之上御勘定所
へ入置御代官請取手形壹通致
返却候
巳十一月 御勘定所

十五日

一瑞巖院殿御常用御入用伺
御廻し濟 ○私寫置候書物庄右衛門を以奉行衆
内覽に入候

一 一代々記貳冊 石川左近將監殿

十八日

一瑞巖院殿御常用御入用伺伊豆守殿え鍋三郎を以
上る承り付候様同人を以御下げ承付いたし候

十九日

一今日中川飛騨守殿御退出掛ヶ下御勘定所へ御立よ
り被成被仰渡候事有之序に御逢被成度旨庄右衛門
を以被仰下
於内座懸御目候處常に書留等出精いたし候御譽被

寛政御用留

成候此段同志之者申合候彌書留いたし候様尤一兩
人も名前庄右衛門方へ申候様仰聞候

廿二日

一今日惣勘定之所に晝前神田佐久間町出火に付御延
引同廿六日に有之候

廿九日

一谷中感應寺富興行願下札いたし長谷川彌左衛門を
頼尾嶋鍋三郎へ遣し返上

巳十二月 大

備中 加藤惣兵衛
攝津 關川庄右衛門
大炊 中嶋守右衛門
内記 杉嶋彦五郎
肥後 鎮目牧太
主膳 富安九八郎
肥前 鈴木傳右衛門
蜂屋源八郎
川村新六

波邊久藏
五日

一定扶持手形二十七通御殿へ持參御判取
手形番 大田直次郎
石井量助

三百七十七

六日 今日岩堀藤次郎當分神寶方介出役
一河合内藏助被爲召添奉行助相勤候に付爲御褒美白
銀三枚被下置候旨松平伊豆守殿被仰渡

十日

一駿州薩陀村靈仙寺願御廻し出す

十一日

今朝主膳正殿御登城かけ參上御逢有之

一瑞巖院殿御寶塔御供養御道具御見分主膳正殿三九

郎殿吟味方立合岩田本五郎 組頭庄右衛門

一今日帳面方にて筆代 七ヶ月分銀五匁八分三厘受取
此銀六百七十七文

十三日 廻狀來

自分共儀前々より壹人宛下御勘定所へ立寄來候趣
之處御用多に付暫中絶に及候に付猶又申合以來登
城掛壹人つゝ立寄出勤之面々者人體等爲見知にも
候之間折々は着到帳引合途面會且此方都合次第諸
掛御勘定方詰所へも相廻り勤向之様子をも可及見
其外差掛候御用向は承之御老中方御揃之頃 御殿
え罷出候積りに候間各方にも引續追々御殿へ被相
越候積り申合せ右之趣御勘定方一統に可被達候
但當年は最早餘日も無之候に付自分共下御勘定
所へ立寄候儀は來春之事にも可相成候得共右

に不拘各方を始御勘定方申合之儀は本文之趣に
可被相心得候

已十一月

右之通り奉行衆被仰聞候間御承知可被成候

帳面方

已十二月

改方

十六日

一 村田鐵太郎殿へ金貳分貳朱請取申候

覺

一 銀貳拾五匁 繪圖五枚料

一 銀貳拾五匁 繪圖六枚料

一 銀拾五匁 繪圖六枚料

二口合金貳分貳朱

右之通り請取繪圖仕立候者へ差置申候以上

十二月十六日

大田直次郎

外に爲御褒美金三百疋繪圖仕立候者へ遣し候様

飛禪守殿へ鐵太郎を以被遣候間北町へ遣し私よ

り鐵太郎殿へ禮之手紙認め遣し申候

十八日

一 駿州薩陀村靈泉寺願下げ札いたし尾嶋鍋三郎を以

上る

已十二月 出割

十七日 岩堀 廿五日 河合 廿六日 保田

廿七日 大田 廿八日 河合 廿九日 岩堀

卅日 河合

午正月

七日 山本 八日 大田 九日 保田

十日 河合 十一日 岩堀 十二日 大田

十三日 河合 十四日 山本 十五日 保田

十六日 山本 十七日 岩堀

廿三日

一角倉一學手代伊丹庄藏差出し候中宮寺宮御堂御殿
内糺入用立方伺御廻し出す

半紙にて
ヒレ付

書面去七月中中宮寺宮御堂御殿破損之趣御代官角
倉一學手代被差遣内糺仕候御入用立方相伺候に付
取調候處京都より和州平群郡立野村迄道法貳拾四
里餘支配所内にて夫々中宮寺迄壹里拾町餘支配所
外之由去寅年熊野本宮御再建に付鈴木新吉御代官
勤役中爲内糺差遣候御入用立方に見合不相當之儀

も相見不申候間書面之通り御入用に相立員數之儀
は追て被仰渡可然奉存候

已十二月

主膳正

飛彈守

左近將監

内膳

十兵衛

三九郎

廿七日 割出

關川庄右衛門印

大田直次郎印

大竹庄九郎印

一 瑞巖院殿御靈前新規御道具出來御見分有之柳生主
膳正殿大久保内膳殿追出かけ吟味方岩田本五郎立
合御見分相濟川村新六へ引渡遣す

一 廿九日割出岩堀藤次郎之處痛所有之由申來保田直
之亟出勤之積

一 紅葉山御道具御修復殘銀手形小笠原三九郎殿之押
切長印取之庄右衛門を頼御判取添方出野安右衛門
を以鹽野牧太え遣す

一 王子金輪寺御下銀之承付之儀に付河合内藏助加出
に出る

伊豆守殿被仰渡堀田攝津守殿侍座白銀七枚拜領仕候

一同十三酉年正月十一日大阪銅座詰安岡剛三郎代り被差遣候旨松平伊豆守殿之上申渡候段柳生主膳正殿被仰渡同廿一日御暇拜領物被下置候旨於躰躰之間松平伊豆守殿被仰渡堀田攝津守殿侍座金貳拾兩拜領仕同日被下物被下置候旨伊豆守殿以御書附被仰渡候旨中川飛彈守殿申被渡候

寛政御用留終

尺牘

自享和元辛酉年三月大坂表よりの狀
至同 二壬戌年四月

請取申旅御扶持方之事

米合壹石五升者

但京升也

但一日壹人五合宛七人扶持一倍之積日數十五日

五日

右は銅座爲御用大坂表え罷越候に付爲旅御扶持方書面之通請取申候所仍如件

寛政十三酉年正月

大田直次郎

請取申銀子之事

合銀貳六拾枚者

但丁銀也

此目壹貫百拾八匁

合銀四枚者

但壹ヶ月銀貳枚宛十三ヶ月之積

此目百七拾貳匁

金拾五兩者(内小粒六兩)

賄道具代

合銀四拾九兩者

物書料

内小粒 拾九兩貳分

雜用金

但壹ヶ月金三兩貳分宛之積り十四ヶ月分

金貳兩

梅天近候兩地平安

筆墨紙蠟燭代

一二月廿七日發途渭城夜雨にて御退直も遅く關面別候事御尤と奉存候廿八日も微雨其夜大雨二十九日は函谷の險を踰え候御時酒二幸哉朝より雨晴山上は躰木屐歩行いたし候畑の立場にて傾盃頻に二君相豆の遊遊返立子玉候事存出し申候處其夕三島驛にて菊池内記泊と札有之候間道を心かけ參候處喜瀬川の東にて轎簾を上て顔を出し候ものを見候へば叔成にて兩方輿をよせ暫傾蓋談話御咄をも申候何をいふも途中の事互に官事にて東西へ別れ申候きせめて晝にも候はば休み可申候處泊をいそぐ薄暮なり夫よりは日々天氣よく宇津の山薩埵峠鈴鹿山等下輿歩行足疾頓愈日々二三里づゝ歩行山水の奇賞不可舉記候伊勢路よりは花ざかりにて大津泊早く候まゝ私に三井寺へ參り絶頂より湖水を望申候山は八重一重の花の雲の中にて三上山鏡山比良嶽唐崎矢橋勢田の景如夢寐于今思ひ出られ候三月十日には京都廻りいたし祇園清水花盛にて知恩院八阪の塔東福寺通天橋一覽伏見夜舟にて十一日朝卯

刻に浪華に著申候夫より日々吏事繁く候へ共閑暇には八半時頃より所々一覽いたし候天王寺の古刹高津生玉の眺望天満天神の繁華一々記しがたく候旅宿は南本町五丁目にて甚寛曠樓も土庫も有之候一私宅にても史記會讀候など忤方より申越候御詩會いか宿題御定め候は一月一次づゝにて豚兒へ御談し御極め可被成候詩は是より上げ可申候此土にも雅人多く御座候比隣に久留米樺島勇吉同門の醫生馬田昌調と申候もの關叔成をもよく存居候和漢の學にて詩は至て好きにて日々唱和慰客懷候重て可懸御目候

一佳作感吟仕候高和左にゑるし候上巳には金谷宿菊川などの邊にて詩をも賦し申候其夜は濱松に泊候

三島驛遇關叔成自南紀還

東去西來思萬重。途中傾蓋喜相逢。路過三島見仙客。來自紀南熊野峯。

和山士訓三日見懷用其詩

桃花佳節菊河濱。曲水流觴憶右軍。何日同傾金谷酒。江東暮色隔春雲。

用約は唐人和約の一體にて用其約不步其字候此詩御他見御免歸府迄は人間へ示不申候一客舍無事讀書罷在候親朋の一字千金に候間時々御文通可被下候豚兒方へ被遣候へば一月數度役所便にて不及貸錢候間無御遠慮幾度にて可被遣候かさになりても不苦候猶重てと早々以上

四月十九日

杏花園

山内尙助様

一島崎氏え申入候野村仲助は四月廿日頃立候由にて古銅吹所本所法恩寺橋際に有之候乍去私宅へ是非立より候様先便申遣候且本田氏書狀も届申候

一出立支度入用殘金いさい御書付承知いたし此間五月分迄御扶持方も取十四人扶持拂貳兩壹分貳米と小玉銀二ツ取申候用人節儉にて此分にては餘り入用かゝり申間舖哉唯何もかも通帳にて用事足り過申候二月拂之積に候勝手は甚靜にて中々みだりに客來は無之よろしく候

一交代安岡氏路用差支候由にて出立前日御普請役立合金七兩かし遣候書附取置申候尤御褒美濟留守宅

定吉へ返濟の積に御座候とかく是は定例之由たとひ都合宜候而もわざと物入候様に見せかけ長崎を心かけ候事と相見へ申候夫故わざと御普請役見候前にてかりし事に候慥成男に付間違は有之ましく候

一松藏事吉左右承り大慶いたし候兄弟ともに合方候事は一段之事に候一圓無沙汰にても右之通にさへ成候へは辨損にいたし可申取込早々以上

一出立支度之會計委細承知いたし候今之分にて當分入不申候先便申遣候安岡氏返金も其表えいたし候積に候是以此方申遣候節被遣候而よろしく御座候少々宿にさし置候方宜候

一大久保普請出來に候哉番町御病人はいかゝ本多氏へも此間榮藏遣し委細口上之趣申候相替儀無之由に候何か氣づかりにて一向外出は成不申小屋の内計の由扱々夫に引くらへ候得者此方は安樂にて門限も無之自由もたり申候旅宿の奇麗なる事藏宿之隠居と申内に御座候石澤山故石手鉢飛石など見事に候勝手向等も寇など甚勝手よろしく候自由になり候はいはれ江戸へ引申度候玄關前もたゞき土

にて内井戸之側は石なり飲水は川水をこし申候一月六荷程にて澤山壹荷十文つゝに御座候尤香料にいたし候由用人申候今年五助は暇取候哉猶重便可申上候早々以上

一 大久保清水小川町北町二軒無異大慶いたし候お仲もますゝ肥立候由御同慶に存候

一 野村事御世話に御座候大方廿日過には參可申候是非々と申置候處承知之旨申來候清水鉄吉へ手習筆壹對褒美として可遣候

一 安岡氏之事忤方へ委舖申遣候甚だ惡風に御座候一富原三回忌一向失念罷在候御世話に候婆々様へは時々定吉見舞菓子なども遣し可申候木戸之婆々格位之事なるべし

一 色々珍談辱候相場の仰せ越めづらしく候一澤村宗十郎は三月廿八日死去追善發句繪姿共當月初に一覽いたし候此繪は幸長崎人見氏へ遣し可申候あの方にてはめつらしく候江戸之火事沙汰御役替等天氣等まで大てい早く相知し申候乍去地震之事は始而承り申候とかく異本有之候はよろしく塙

檢校の古語候も存出し申候 一に私義も節儉
迄賜二本にて二本と
もわしく成不申候

一御用人ことの外節儉甚深切ものにて頓鼻禪の洗濯
までいたし候市兵衛が魂のりうつり居候と存候よ
く市兵衛へ御傳可被下候其外も随分よろしく
候質朴なること元祿寶永時代之人也

一日々小遣はさのみ入不申候酒は樽や弟くれ候ま
也平井之方一向沙汰なし困り申候催促狀出候間早
く御と、け可被下候

一職至て小し人形はことの外大造にて見せ賣有之候
職たま、見請候所た一本にて子持筋紋所二ツ
下に鍾馗を染候など節儉之體大笑

一夏物安賣上申候岩城三井之ミセにて夏合羽
送ら
ず詭候もの有之あきれ申候以上

四月二十八日

杏花園

島崎金次郎様
島崎氏へ申入候

一當五月節前諸通帳拂申候尤此内肴屋は安岡出立
之節之振舞に金登歩計入候間此後も見合には相成
かたく候鯛鱧さはらなと計にて小肴無之候拙者餘

り魚物を不好候故鹽さはらのみ焼候而時々用候
錢拂

一三貫三百七拾六文 真木二十貫目(一貫目四百廿文)松二貫
目(一貫目九十文)キ付也
炭二貫(一貫三百四十文)
一拾匁 赤味噌半樽是は残り有之白味噌は醃のご
とし赤味噌も尾張味噌之類也

一拾匁壹分五厘(壹片と錢貳百五十四文)
油三升

一八分八厘 らうそく(間違にて買申候)
一三匁五分(三百六十八文) 紙類
(落付候旅館置付にておし賣也)

一拾五匁六分(金壹分とて濟) 安岡出立之節膳部
一拾九匁六分(金壹歩と四百十六文) 肴屋
一四分(小玉) 平助樂代(三日計煩申候)

一七匁文 醬油
金貳分 銀貳拾貳匁三分八厘 錢五貫百廿二文
外に金壹兩三歩貳朱 給金渡す

右之外書物者金壹兩壹分計求め申是は外物也自分
小遣はあまり入不申候いつ方へ參候而も酒持參小
玉銀壹匁貳匁之外は入不申候酒は樽氏弟が一
樽五月中旬迄有之候處又々平井專阿彌が一樽來り

壹兩日是をはじめ申候平井氏へ右之禮狀は早便に
て島屋へ出し候あの方を届け申候此狀賃は通帳へ
附候様申つかはし候

一此間飛彈倉橋鐵二郎方を手紙持參候敬作と申もの
小出氏元之親類のよし學者にて面白き仁ゆへ大
阪一見中夜分止宿させ可申旨申來候へとも斷返申
候旅館とは申ながら市中にてみだりに人を宿し後
日何ぞ有之節六ヶ舖候間氣之毒なから返し候又此
間平助が甥濃州を參り大阪奉公望にて四五日内に
宿し候間用人侍を以理解申聞け漸町方へ奉公いた
し候尤平助宿に成候義は不相成旨申渡町宿にいた
させ申候此後も右體に不限たとい心安き友にても
一宿はいたさせ不申候間江戸なと尋參りしもの
候は、其段御聞可被置候御普請役宿などへは何か
止宿なといたしものも有之候由承候へ共此方にて
は嚴備一夜之宿もかし不申候

右飛彈之敬作一位の木箸八幡の竹等持參いたし候
間返候も氣の毒にて請置申候右之挨拶は北町迄便
に何にても遣し度候

一野村忠助義五月十一日大阪へ歸り申候錢別之禮内

々厚く申候先是にて義理も相濟し御世話に御座候
乍去又々肴なと贈り申候き
一當西五月十六日者 如林様

泰應院殿 十七回忌と覺申候定て本念寺
布施被遣候事と存候若未參候は來月にても可宜候
其家無後候間並々は町亭にいたし可然候

一當年五月晦日は淨榮寺和尚一周忌に御座候間私方
が申贈候とて早めに使可被遣候
一久保清水北町二軒小川町等へよく、頼入候大
久保隱居佐々本へもよく、御傳此方遣候書狀
御見せ可被下候佐兵衛認め候銅座書物此節役に立
候段も御傳へ可被下候松藏部屋も定而出來と存候
早々以上

二白御張紙直段も當月四日に島屋へ早便に相知
申候さて、島屋にて江戸の沙汰相まれ喜申候
よく、御傳言可被下候以上

右之通認め置候處第四番五月六日御認め之狀十六
日夕到來披見候處

一四月廿七日松島重右衛門殿御作事下奉行被仰付候
由目出度存候夫に附居室之事委細御申越承知いた

し候此度祝儀之狀差遣し可申候處少々手間取候方可宜と後便に遣し可申候もし絲川石田内外へ移り候而是へ移り候へは勝手よろしく候若又其義も相談出来申候は、先例之通り築山氏御相談候てかし可申哉其外にも近年家を仕切りかし候事流行いづれ私歸府迄かり住居之心持にて右之通之義可然哉に候猶後便可被仰聞候

一右住居借地之儀は願書に及不申引移り候節奉行衆へ届出候のみにて甚手輕之事に御座候其已前に築山を以芝與市右衛門へ御たのみ被成候へは届書共あの方にて認めくれ可申候留守宅にて引移り候例改め方書留に何程も可有之候
一お冬事着帯之由目出度被存候當月廿三日は此方にても祝可申候市川氏へ別段狀不遣候間よくよく御たのみ申候色々目出度候事にて嘸々御勞心と察入候

一旅館隣家々のたのまれ候狀二通

青山權太原

菊池内記へ 壹封

南新瑞豐海橋向

貳封とし雅事にて伺しいそぎ候事にて無御座候幸便次第にてよろしく

井上重次郎へ壹封

問屋酒船

此度之御狀内封は並便貸錢大坂拂といたし有之外封は島屋次兵衛といたし參候而貸錢取不申候是は此方にて高直の時あしく候間次兵衛差はからひ候義と被存候毎々世話よく御禮頼入候以上

一松島氏結構被仰附候右祝儀狀遣申候地所之事いかゝに候哉近所によき賣居も候は、御相談可被成候いつれ借住居とは申ながらよき普請ならば寓居も可宜候役所へは届にて濟申候芝氏へ直に御たのみ可被成候下谷生駒殿前池永久次郎麴町三間屋内藤兵衛門は長崎掛にて度々宅狀等世話に成候間暑氣見舞等には定吉參り候て可然候折もあらば肴にても忝々遣候も可宜候

一當月廿三日お冬着帯之祝いたし候由嘸々市川氏も被悅候事と被存候客中之悅無此上事に候畢竟日勤いたし候も旅泊に勞し候も子孫斷絶なきため計の事を願候のみにて貧富は不足論候其日は此方にても早朝魚屋參候間鯛壹枚代三分奢り奴僕にも爲給

候處急に安治川へ船見分の事申來候而御用船に乗り安治河へ參候船は四艘にて一艘に銅凡六萬斤程積入れ出帆いたさせ申船は五百石四百石位之船にて銅座役人々送狀をわたし船中相改候處船子共平伏いたし嚴重成事也船之名久吉丸寶光丸威徳丸繁榮丸と申候扱々今日は目出度日哉數萬斤の銅を積出し出帆無滯長崎迄可參候船之名も順よろしくいづれ此中之字にて出生之名可撰事と悦申候所謂生れぬ先のむつきさためとは此事なるべし右之船名は市川氏など聞候は定て悦に可有之候お富お仲も段々生長と存候

一今便取込儀助方へ返狀不遣候宜頼候金兵衛方々毎々御沙汰書辱よく禮頼候御張紙者島屋々五六日めに遣候此一紙は皆々寫申候官吏にて一向役所など不申來候もおかしく候き猶後便可申上候お冬へ宜頼入候産前之禁物壁に張置候様可被致候以上

五月廿五日

島崎金次郎様

一當夏御借米書附委細御申越扱々直段宜候此方米價下直にて當月拂米壹石に附六十二匁也銀相場六十二匁多故石々兩に播州米也町賣米屋札を見候へば上米壹升九十文位下米五十二文有之候入船澤山にて食候ものすくなき故なるべし

一後藤儀兵衛は皆濟にて可有之候是は元すへ金也四兩之處二三年前減金に相成候間四兩之證文御返し可被遣候委細築山よく存居可申候此方にては知れ不申候勘定場帳面に相違無之候
一泰應院様年忌備物世話に候き恒次郎事奇特に御座候以上
一島屋はは大體六齊に書狀芝居番附其外米相場等申送候扱々飛脚屋之重寶始て豊申候貸錢不取候に付大坂拂と被成候由此度は煎餅入の箱故荷物之部になり十四日目に届き貸錢壹匁參分取申候先日大坂拂に有之上包島屋治兵衛といたし遣し候貸錢濟といたし候も有之候先達而通帳島や差こし可有之候間是を御もたせ被遣是非々書附くれ候様可被仰候大坂拂といたし候へば品により貸錢高く成可申候其上私留守にて錢之出入等むづかしく候此段

よくく重便島屋方へ申遣し置少々にては賃銭取
申候様可申遣候尤島屋も此度は日比之商賣をあら
はし無賃銭にてよろしく候法華宗にて殊更出精
之由に候

一此方飛脚屋申は書状はかさはり候而も八日九日に
は届申候竹壹本箱壹ツにて入候と荷物之部へ入
し候間遅きは十八九日早きは十四五日かゝり候由
に候賃銭も夫だけ高く候先日島屋方書物たのまれ
書遣候便四月廿五日出五月十五日届候事有之候
一北町乳母へよく頼入候お冬事お幸吉例にまかせ乳
母よく御頼可被成候心附等頼入候

一江戸繪圖一向無之候皆々見たがり申候御所持之新
き繪圖重便に被遣可被下候古繪圖は不入申唯今
之姿を見申度由に候持參之享和大武鑑なとめづ
らしがり候袖玉武鑑など携候ばよきみやげなるべ
し

一松島氏地代並肴等御世話に候地面之沙汰無之由と
かく手間取れ候が勝手によろしく候先便申上候通
の事故萬一地面明ヶ候而もいかやうにも致方有之
候間お冬など安し不申候様よくく御申聞可被成

候

一家來いづれも無恙精勤にて橋本辨才有之候へとも
用人並三僕一向之無口にてはなし出來不申おかし
く候用人は質朴なれども折々は小言など申候てい
づれも閉口いたし罷在候臺所甚靜にて和順之體近
所之ものも感じ候様子に候此方かも用人は餘ほど
重んじ置候故何か譯不知候故皆々謹而居候と相
見へ申候三僕とも無事親切にて安心いたし候長
喜別而精勤平は近豪と申し富豪なり樂を好き申
候

一先達而遣候岸氏へ之手紙定て届候事と存候大切に
被成可被遣候少々存寄等書遣候秘書に候

一長日には候へとも官事開舖御普請役一人は兵庫へ
々々役所壹人にて所込申候乍去歸宅候へば靜にて
書物を見候によろしく候大體所々も歩行濟申候當
月は祭禮多く樂み申候廿五日天滿祭は日本一の挑
灯多く船祭の由にと例の仲助世話にて棧舖取置候
由仲助扱々よきものに御座候猶後便可申上候以
上

島崎金次郎様

平安


一此地暑氣強く御座候夜に入宵にも蒸し申候乍去一
兩日は激雨後少々涼しく候土用は定而殿舖事と存
候大雨にても椽側開放し一向ふり込不申候途中に
ても雨は真直にふり申候間大體合羽を着候もの無
之町人紙合羽裾計有之を着申候

一松島一件先春迄被居さうなる様子の由何卒春迄之
内ゆるくよき賣筈にても開立引移り申度候此方
地面は松島富五郎にて届置候 松島より東左一取へ取が
可申候築山へたのみ
芝氏へ可申遣候事 へ候は、地主代り届出し

一書状七通 山内吉見石川伊東新築宅状二ツ
儀兵衛榮藏之三通儀請取申候

一此地米直段下直に候御用扶持當五月廿一日貳石入
米いたし貳石壹斗三升拂候處金貳兩貳朱と三分貳
厘に成候壹石に附六拾貳匁 石也 町々米屋のみせ先
にざるをならべ正札附に米をいだし至而下直なる
は一升五拾貳文と札有之高直成所八拾貳文九拾文
位迄也扱々結構成る所にて遊て食ふもの多き筈に
て候江戸を見候へば半分は遊んで居り氣の長く候
事急の間に不合道をもうかりあるき人をよけ

候事を不知供などに叱られ肝をつぶし申候大名往
來など見候は驚き可申候正九時を八時迄は町中
て晝寐也

一家作の仕方至而上手にて戸のままり竈本之様子臺
所向棚のつり様など感心いたし椽側を高く外雨戸
の舖居を一寸計ひきく附戸へさるをいたす故至而
べり宜しく雨戸の尻ざしなどいふ様な不器用な事
なく戸のふちに四角なる穴ありこの穴へ  此通
り之木をさし込横にねちり置候へば此四角の穴の
中に横に又四角成穴ありて外より明る事なしあは
れ懸御目度候

竈の口至てせまく前の方には灰なし瓦にて高く張
りつめ置候故真木多きたをれ不申候處竈五ツ有之
小鍋をならべかけ候故薪を多くたき候と相見へ申
候石は澤山にて井戸がは手水鉢用水皆石也井戸が
はの下は井の底迄瓦にてはりつめ申候壁土は黄色
なる大津かべにて土ことの外よろしく候焼物すや
きにて甚奇麗也毎日爐に火を入すやきの土瓶にて
茶を煎じ給申候爐と土瓶にて貳匁五分計也いづ方
にても右にて茶を煎じ菓子を樂み候十千亭めくも

の多く候

一土用に成候へとも具足など干し候事一向跡かたもなき事也誰も見やうなど云ものなし重て張ぬきにてもし町人いづれも人柄よく候處此方體之家來御普請役など家來どもの其さま賤しく氣之毒成位也嗚々わるせはしく下申たる事とさげすみ居り可申と耻入候江戸にては水道のごぶの水を飲てよくあたらぬ事と申居候よみ本などにも書有之候川水清冷茶に妙也

一心齋橋筋毎日通候市中佛壇神輿の出來合有之諸國へ廻し候と相見へ申候屏風師と經師は別にて屏風は何十双も作り申候諸國へ廻り申候青貝細工妙々先日も用箆笥の大きな青貝にて金貳分と申候壹歩貳朱位にはまけ候由丸盆の青貝ことの外よく候間來年買歸り可申候壹枚にて十匁を壹歩位迄其外机硯石小道具皆々妙工にて机の上にならへ候事數寄なるもの高彦などに見せ申度候

一過日吉見八太郎の書狀よく御傳へ可被下候手跡見事に出來申候普請有之由

一久保は如何に候哉松藏部屋も出來候哉如何御姉

様へよろしく御頼候

一いつれにしてもよき賣居も候は、土藏附之所御心かけ御開合可被置候若相應なる所も有之候ばいかやうとも出來可申候歸府早々引移候而も宜候猶後便可申上候勿々不一

一又々申入候此間船見分にて川口御三郷方之役所の前船にて通行いたし先年清水口御出被成候所と存出候御姉様へよく頼上候以上

六月七日

大田直次郎

島崎金次郎様

五月十日の書六月二日來五月廿七日の書六月六日聯刷飛來慰閑懷候當地の暑は東都に倍し候乍去時々片雲將雨生涼氣候山々近候故乍晴乍雨夕陽ことなるはしく候益御多福奉賀候小野兄へもよろしく奉頼候豚兒毎々御世話奉存候

一佳作再三吟し申候詩會も始り候由舊盟不寒不堪遙想候拙作并和音とも上げ申候客中の諸作時々豚兒方へ出候間是にて御内覽可被下候人間に落候事を恐れ銅の異名を蜀山居士と申候間客中唱和等に暫

相用ひ申候不知者以爲眞號阿々

一馬田生作入御覽申候跡より自筆に爲認上可申候

次韵穆亭先生却寄

馬光昇字國瑞號天津

詩催酒趣酒催詩。酒力詩鋒擅一時。日日應耽詩酒癖。誰言李白是君師。

同前述閑適

年年爛醉無虛日。日日閑眠無覺時。一醉一眠吾所長。太平餘事不關師。

暑中閑詠

畏日當空石鏢時。魚泡沸沸欲焦池。空齋纔覺生涼氣。臥誦青田雪竹詩。

甚雅人にて比鄰の事故夜々談し申候詩酒共至て嗜候間時々兩玉山の類候事も有之候和漢博學宜清談候人物は叔成に似候人に候東都へも一度は出申度と被申候

一當地は池田伊丹近くて酒の性猛烈に候乍去宿醉なし地酒は調合ものにてあしく候此間江戸より酒一樽船廻しにて被送候伊丹製にて富士を二度見申候酒ゆへ二望嶽と名付置申候本名は白雪と申候至て和らかにて宜候聯句馬田生に對酌

一葦西東載杜康號國瑞

飛來飛去路愈長蜀山

賈帆再閱芙蓉雪蜀

詞席新驚琥珀光馬

七十灘頭萍路遠馬

二千里外鬱金香蜀

水青練漣愈生味蜀

寧讓紫霞仙子觴馬

御慰に二望嶽は一首御作り可被下候

一毎朝辰牌後より未牌後までは役所に罷在候簿書堆案日々出候へども獨斷故いたしよく如破竹御座候日々多きは二十條少も不下四五條候東都崎陽兩地へ驛使を出し候文書不迫再閱程の事に候乍然旅館に歸り候へば門庭閑無雜賓烹茗據梧或抄書或賦詩仙境に入候心地いたし候第一水土甚美人物驪虞如都下のせはしき風に無御座候いづれも近郊菴と云ふ調に御座候此翁など此地にあらば可忘歸候市中の人日備取まで古雅に御座候皆々朝寐午時より未時頃迄は市人といへども一度づゝ晝寐也夜談をこのみ候米價は一升五十二文より九十文位まで故市人くらしよく候女の風俗重て可申上候餘程面白事に候かつぎを著候形など小原女の體など金屏風の如し二千年來の化には感じ入候勿々不一

六月七日

大田 覃

山内尙助様

暑中兩地平安

一北町大久保清水無事之由目出度存候、
 一地主方沙汰無之由彌松島と東氏と屋舖相對替候は
 い松島富五郎地主かはりて東佐一郎地主と成可申
 候さ候へば築山氏へ御たのみ改方芝與市右衛門方
 へ承り候得ば届書出申候のり入紙にて濟申候尤一
 二月おくれ候而も濟申候況や在勤之事をや

彌轉宅之事等にて長崎掛りへ申遣候安岡之方其
 節催促いたし可置候此間例之通東本願寺を五百
 匹參候四月又々此度新規買請願に候五月に入金
 五百匹參り申候此分にては定例歳暮に金五百匹
 參り申候皆々御届申上候而御用中預ヶ置歸りに
 は持參いたし候事之由其節又々伺候押而被贈候
 積也先宿代は出來候可秘候也

一淨榮寺一月贈物御世話に存候安富も没し候由可惜
 候其外は御返書被成候故文略いたし候
 一此節日々夜々祭りにてさはがしく候乍去江戸の祭

に比し候へば町々は挑灯計たて神輿の渡り候のみ
 也弓鎗の行列計だんじりとて屋臺のごときものに
 て槍皮ぶきつくり花一向無之地車にて引申候若き
 ものてうさやようさやと聲をかけ引申候何ほとき
 ほひても甚のろし喧嘩など夢にだもなし此間も途
 中にて長き丸太を向ふから來る人の胸につきあて
 候をナンジャイと、がめしはよくの腹立ちそ
 れざりにてわかれ申候是にては喧嘩なきはづなり
 五人男の喧嘩もさぞかしと思はる

一此度は吉見氏へ返書遣不申候宜御頼申候さつきの
 文此次之便に御返し可申由御傳へ可被申候伊藤氏
 を御沙汰書辱なく御禮頼入候長崎を請取書附上せ
 申候北町へ御届可被下候

一山道高彦を書狀到來手前勝手之書き物頼み參候追
 而返書遣し可申候此方奴僕共いづれも相勤罷在候
 六月廿三日
 島崎金次郎様
 大田直次郎

秋暑酷烈兩地平安

一六月十八日出之狀廿五日々夕相達候其地暑中冷氣之

由此方は土用前は左のみに不覺候處暑中酷烈夜
 分蒸しあつく御座候乍去旅宿廣く風入候間凌きよ
 く候其上夕方日影傾候へば二階の物干へ上り候處
 との外涼く御座候物干より屋根へかけ階子腰掛等
 有之南は紀州の山々近くは天王寺の塔東は伊駒山
 金剛山近くは大阪の御城の櫓白壁北は京の山々丹
 波の山西には武庫山甲山一ノ谷ひよどり越すま明
 石の方すこしはなれて淡路島其前は海木津川口の
 帆柱林のごとく近くは兩本願寺之堂下谷ノ稱念寺
ユウネン寺位也
 大てい上野山王より見わたしたる所程又は愛宕の
 下の屋舖を見るごとく屋根より下の方は大阪の市
 中不殘見わたし申候夕日に雲のうつるけしき機關
 の音とも阿蘭陀音とも可申是にて夕方は暑をわす
 れ臥り申候今迄かゝる見晴しは覺不申ことに名所
 計にて中々詩も歌も出不申候
 一江戸繪圖壹枚早速遣され攝人うちより一見いたし
 さてくむづかしき道と驚き申候且先便申遣候心
 中大鑑幸便に頼み候
 一本多氏へ書狀遣申候是も久々不快にて當年は先き
 どりを願はれ候由彌願濟候得ば益後にも出立之由

此間序有之團扇二本遣候處との外よろこび被申候
 て自筆之狀長々と申來候位の病氣なれば案し候程
 之事とも不被存候序之節宜舖申くれ候様申來候御
 城内禁足にていつ方へ出られず候由不自由察入候
 一岸氏を返書參候間又々返書遣候又々築山氏へ御た
 のみ可被下候
 一北町乳母事御尤に候先便にも心附候間申進候お幸
 方かも申來候間如例御取計可被成候お冬産前一し
 ほたのみにいたし居候よく御傳へ可被下候
 一嵯峨開帳初り候由珍説ども又々板行物等定て出可
 申候
 一島屋を此度之便も上封しいたし直し早序といたし
 來候故八日目に届き申候盆前賃錢之義御尤とも
 此方かも可申遣候若是非取不申候は跡にて禮に
 てもいたし可申候飛脚屋の届ヶ物は至て手輕き事
 にて御座候由に付歸府の上にて可宜候
 一大久保清水小川町北町二軒おとみお仲並お冬も息
 才之由何々之事に候南隣垣之外に里子に候哉朝よ
 りよく泣候て宿之事存出し乳なきと相見へ申此方
 の人のくせにて子供泣候而も一向だまし不申脇に

てはなしいたし居候とも度々見かけ申候六七歳之
子共の舌のまはり候事格別門前醫者之女子七歳口
跡あざやうなる京談に候思ひ過し候故歎雀などま
でよく舌まはり申候男共もやさしき聲にて江戸も
の言葉にはびくりいたし候様子に候

一 半藏御門跡喧嘩野口の鯉奇談に候
一 井關氏惜しき事と近來耳追々途中にても辭儀ばか
り致し居候

一 此方奴僕共いづれも達者に罷在候給金等も朔日朔
日と遣し今までは先かりこしも無之前に少々有之
も引取勘定濟申候先益後迄は具足櫃をば手つけ不
申と存候早々以上

島崎金次郎様

大田直次郎

一 六月廿八日附之御狀大井川七月二日方支に付(町
便)漸十五日に延着七月八日附之御狀(御用便)
同十六日に着一度に返書申上候此地暑中々雨
少く暑氣強候處三日四日之雨にて涼舖耕地を潤
し畿内大豊年其後今日迄照りつゞき暑氣強候得
共日々早出早引晝九ツ時頃歸候へども南本町よ

り過書町まで十町餘に過す町幅池之端仲町位に
て日かけ有之汗之出候程之事は無之旅宿は風入
第一ひろく奇麗にて屋根之漏候氣遣なく自由に
成候はゞ其表へ持参いたし度候兩地平 安欣慰々
々

一 地主屋舖替芝氏を頼濟候山御序に築山へ被仰右之
下書改方留帳に有之候間芝氏へ漸寫くれ候様御た
のみ可被下候いつにても宜候

一 地主普請之事廿八日附にては草木動搖可到所八日
附にて新海へさらりとかはり候由先安堵いたし候
國府田氏組合之由鈴文よりも留守中轉宅之義を例
之苦勞にいたし申越候定而國府田氏宜舖計ひ候義
と相見へよく序に御禮奉願候地代取越の義一
向とも難申いつれにも留守中落附候方可宜候間仰
之通當十月分來二月分被遣候様大阪表方申越候積
りいさいは歸府之上御面談可申など、申置候方可
然候

一 十疊之屋根北隣之家根色々御世話に御座候いづれ
十疊も少々こころり置不申候ば相成申まじく候來
年人へ譲り候ても修復いたし置候へば夫だけ可宜

哉北町御心附之義御尤に御座候御幸方々も禮申
参り申候若書附にてもこし可申は御相談之上例之
夏壹分冬貳分利なしのなしくづしともいたし候方
あの方にても致しよく可有之哉此方にても地代之
手あてに相成申べく但いづれにてもよろしく候い
づれ乳母之方は寄進にいたし屋根之手傳之方のみ
の事は又寄進にもいたし候も不苦候

一 南御徒町若田喜内當地御用にて上坂之由定而此地
御普請役交代と相見へ申候此地へ今日迄一向右之
沙汰不申來交代之御普請役下妻辰之亟案事居候御
狀にて名前始而相知れ申候長崎行之村井喜藏計相
知し申候先便申遣候かけ物はととも間に合不申候
義と存候又々幸便可有之と堀田侯詩は此方之學
者共へひけらかし申に宜候間嶋屋へなりと御相談
候はゞよき便も可有之候尤いそぎ候事には無之候
風雅人共多候間見せ申度候十六日夕若田喜内々書
狀來廿七日出立之山堀田掛物御たのみにても宜
候

一 池永内藏へ御頼之狀嵩高之分は一向不苦候御用狀
之中へ毎々宅狀參候役所にてもよく世話いたし大

體八日九日には届申候御用無之候へば別段にも届
け候間兩三度に一度は御たのみ可被成候

一 長坂氏石井氏雪山吉見山内飯田大塚野村万屋九通
十五日着之内に有之鈴文伊東榮藏へ之狀三通十六
日着之内に有之請取申候先便遣候書狀夫々へ被遣
候よし御世話に御座候

一 嶋屋治兵衛へ兩度御面談之よし扱々深切なる男に
御座候

一 松藏部屋出來濕瘡のよし天より足留と相見へ申候
九兵衛も鹽硝藏御用に出勤候よし此地御普請役
四谷住宅衆承り申候町田喜藤太など申て私同道
之者野村新兵衛殿などをよく存居候九兵衛殿
慥成もの故年番役をも被致候とはめ申候御一笑
々

一 曉岳院並稱譽老女三十三回のよし早き事に候曉岳
院も無縁同前岸祖右衛門もいかゞに候哉從弟女之
義故便宜も承度もし深川邊御出も候ば御序に御聞
合可被下候いづれ曉岳院忌日前に原町寺へ香奠白
銀にても南片に可被遣候三十三年が果と相見申候
養家にて追福は無覺束候

一此地も静謐にて具足も箱之内に持くさりに御座候
 尤盆前迄は例之一物も出不申(三十三圓)當月は又々
 御扶持拂候間八月朔日給金位は是にて相濟可申可
 成丈節儉に致申候尤此度地主代り之事をことごとく
 しく安岡へ申遣し候十月間遠無之様先方に見えら
 せ置可申候盆前之諸拂御慰に入御覽候

一金貳兩貳朱七月一日用給金但用人壹兩ツは月バサ
一日は金壹八月一日同七月
兩ツは金壹

七月十四日通帳拂五月節句後よりかりなり

薪代百六十貫目 廿貫目四百廿文ツ、九日
 十日に廿貫目ツ、燒申候

一三百七十七拾八文 わか松一把七十文
 マキツケノコト

一九百四拾四文 醬油代、
南片と 油代

一金壹分ト銀七百三拾文肴代 用人看サカフコトキラ
 ヒニテ仲間共ヒソカニ
 小言ヲ申候ヘ共節儉第
 一キカマフリ也

一金六百文日備代 用人下長助計
 皆勤其餘ハ二三日煩候

右之拂金壹分貳朱ト錢六貫百三拾九文也、
 用人へ金壹兩壹分貳朱わたし錢三百五
 十七文残る

外に書物屋拂金壹兩壹分ト錢三百五拾七文也是は
 算用之外也
 五月節句後々現金小遣三分餘也
 一此地米直段益下直に相成可申候大豐作にて皆々市
 中悦び申候
 一此地風説奇談とも別封吉見方へ封し込遣申候御覽
 可被成候是は近所二人ほどに頼置日々之事相知れ
 申候尤五畿内之事は大概忘れ申候面白き一冊に成
 可申江戸沙汰越みせ候而取かへ申候
 一此盆前はめづらしき義にて當地之役人御手當其外
 銅山渡方等先月末々私裏判一寸おし候へば穴藏の
 燈をあげ井戸車のごとく銀箱を引あげ颯々とした
 し申候昨日は三百貫目今日は四百九拾八貫目八千
 三兩など、申候には驚入申候私印判始ての事と
 大笑いたし候皆々江戸へ跡届にて濟申候扱々重き
 御役と始て心附き申候是は大切之こと故外へは御
 沙汰なし云々

島崎金次郎様

大田直次郎

雨後新涼兩地平安

一七月廿日廿八日迄大井川止めにて往來無之文通
 も滞り申其地々六月廿八日と七月八日附之書七月
 十五日に届候いまだ書簡參不申此地二百十日之早
 朝はやて風にて淀川船損し候沙汰有之候當日は晴
 光甚穩にて八朔も陰晴不定夕方小雨先穩なる方に
 候

一長崎奉行並同役村井喜藏ども廿日立當月五日銅
 座着之積候處右之川留めにては大方十日前に着
 に成可申候銅座へ二日御止宿に附座人御褒美事又
 は願事等色々紛々關舖御座候天草詰御普請役廿四
 日立大阪交替御普請役廿七日立の由いつれも一
 所に大阪へ着可致候さ候は、十日前後は大取込
 と被存候乍去月日のはやく立候には關舖もよろ
 しく候先半年は濟候と覺申候奴僕共相替義無之
 候

一此地馬田氏宮元寺日々出會親類同前に心易く用事
 相達し調寶に御座候馬田氏妻もよき人物にて衣類
 等之事迄心附申候

一十三經汲古閣本九兩餘にて御座候新渡嘉慶板十四

兩貳分之由申候兩様ともすがやにて江戸直段御間
 合重便可被仰下候

一北町小川町大久保清水いづれもよろしく頼入候お
 とみお仲賑々成長と被存候石井永坂二封大塚壹封
 上申候

一島崎吉見へ此度は書狀不遣候間此手紙御まはしよ
 く々々奉頼候

一唯今迄去年々詰合此度歸府之屬吏よほど俗物にて
 取扱困り候事共有之交替いたし候跡は可宜と存候
 残り候屬吏は至而實體にてよろしく候

一淺草鐘銘墨本十帖別封島屋にて板にはさみ傘の古
 き油紙つゝみ遣し候故少しも皺無之全本にて七月
 十八日夕相届き申候望候ものへ分ち遣し可申と奉
 存候學者なと物もらひうけ候挨拶によろしく候
 族館中之義理有之贈答に困り申候錦繪團扇東遊な
 とにて俗人の義理を防ぎ申候當暮は繪草紙取よせ
 可申左様思召可被下候

一仙洞御所御屏風御製已下之和歌寫取候間草稿を進
 上申候歌人へ御見せ可被成候人々寫し候てもよろ
 しく候加賀屏風の歌も上申候

一當夏蕪州鹽竈の中へ落ちて死し候雷獸圖上候吉見
 えも御廻し可被下候當地見せ物師買候而已に船に
 可積候處蕪州を御止め被成國中へ埋まれ候由申
 候

一詩稿閣上殊に夏日山亭之作宜候重便に小さき唐紙
 に書可被遣候洛陽書生へみせ可申候馬田も和作可
 致と申候

一七月廿八日酉上刻近所出火餘程騒き申候本町四
 丁目どふ池筋鍛冶屋火元にて御座候物干より見候
 處唯一小路をへたて候へども風無之五ツ時頃鎮火
 町人足三人之定式南部津輕對州役人数十人之手勢
 を引連れ來り届申候吹屋泉屋吉次郎も數十人入
 足來門前挑灯如市候泉屋より酒三升燒飯
 燒飯大半切に一盃皆々へ振舞
 候ため也
 銅座人銀座人皆々驅集り申候火危く候へば町奉行
 衆も來り差圖にて旅宿を防がせ候由に附如此之人
 數共防候は大體は防止め可申候立退きは泉屋方之
 由承り申候先々無難にて宜候き當四月九日は西横
 堀出火西之方二町計隔り此度は東之方一町計にて
 近火に御座候き御慮に繪圖認め遣申候

「印火事場

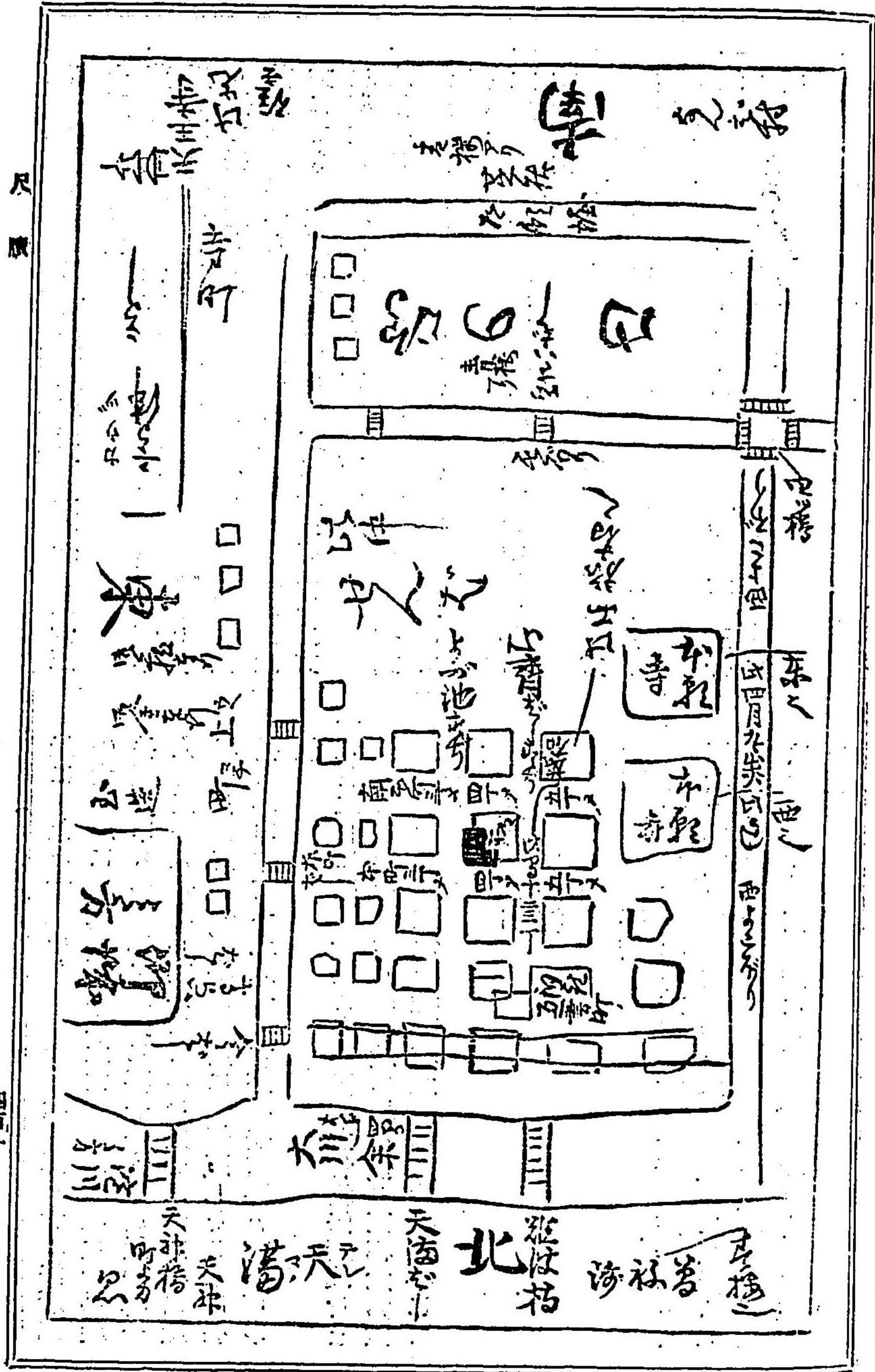
大坂の圖大概此位なもの也船場嶋之内上町御城
 之方
 天満大川向計にて西横ほりる西に阿波座堀立賣堀
 さつまほり等有之安治川之方へつゞき申候兩本願
 寺之堂のやね何れ之所よりも見へ申候天王寺の塔
 も所々かみへ申候湯島の臺より下谷柳原之方見わ
 たし候位之廣さにて江戸四分一と可申町をはなれ
 候へば直に田舎と成江戸之麻布巢鴨のやうなる屋
 舗とも町ともつかぬ退屈なる所無之よろしく候町
 中は至て繁華也青樓計澤山也

一常元寺の四書典制類聯と申候新渡之唐本二帙寸珍
 本もらひ申候右之代りには江戸に有之さらさ紙少
 し計にてももらひ申度と被申候さらさ紙一枚何ほ
 とに候哉二十枚も遣し候は、可宜候其餘は此方に
 て歸りがけにかきもの致遣可申候先方も其方望候
 に御座候島屋へ被仰付油紙包にいたし棒へ巻きて
 なりとも可被遣候もめぬやうにいたし度候

八月五日

蜀 山

一秋涼に成候道中筋川支にて往來不自由之山に候堤



も所々崩れ候由に候長崎奉行着大取込奈良晒壹疋土産物に御座候

一荒川氏御病氣御快廿八日御出立之由目出度存候幸川も明き候頃にて大方此節御着に可有之候様子承り候て榮藏遣し可申候御城内鑑札出入六ヶ舖榮藏計常々本多へも遣候き本多も八月朔日御着之由此方にて御文通のみにてあの方は外出成不申此方は御城入成不申よく可被仰下候

一八月七日増田要助參候而御尊承り候江戸書圖七武鑑五御遣し所々へ義理を補ひ申候此武鑑此方にて甚めづらしく候

一久世公一色公中元之御祝儀金三分つゝ參候由兩方共挨拶之狀遣し申候北町御沙汰書之御禮よく被仰可被下候

一地主家作も取かゝりのよし來春迄之分金壹兩三分遣候而よろしき段先便申上候川支にて延着可致候

一羽州百姓騒動御勘定所へ届候正本めつらしく候此

邊にも色々沙汰いたし候此地七月晦日會禰崎新地の女郎屋にて五人切已來之大變御座候花火や巴屋兵藏と申もの盡九ツ時過に藝子一人と扇屋の唄一人と友一人切殺し其外にも手を負せ(女郎都は屋根つたひ逃申候)梅田墓所にて切腹しそこなひ召捕られ申候古へ五人切の古跡也委舖跡を書上可申候

一八月二日には淡路嶋より龍出右之會根崎新地をまき芝居の櫓をやぶり高槻城の櫓を損じ京都六角堂をも巻候由に候色々變事有之候に旅宿邊無事にて大慶いたし候

八月十二日
島崎様

秋涼時候兩地平安

一八月十三日當地北の方三番村と云所に萩寺ありと聞七ツ時頃を參見候處中々本所龍眼寺には及もなく僅なる地に咲候處正燈寺の三分一位也男女見物は參候へとも例の靜なる事也歸り道にまりは道をいたし高麗橋筋四軒町と申候所を通り候へばかけ

行燈に荒川數馬宿と有之候間萩にて一盃給候後立より候所數馬殿立出大に悦ばれ候而又々酒肴御馳走に成候道中無滯川の明候後當地着御病氣も快來十八日者御城入之よし右御城入前町宿之内も中々外出は出來不申候由扱々不自由成事に候其上町宿にて何かと物入強候間一日も早く御城入いたし度と申事にて候翌日何ぞ進上可致と存候へども生肴はむだな事と存じ鹽鯉二本に袖玉武鑑一冊もたせ遣候處ことの外之悦ひにて則返狀掛御目候扱組頭衆へ御願之上やうやう相濟十五日之八半時頃私旅宿へ御出に付又々酒進め嘶候處組頭之申渡しに早く行早く歸候様尤往來の御届入候由にて七ツ半頃には早々御歸に御座候彼醫者馬田昌調も先日同道いたし候に付十五日にも呼候而脈状をも見候處一體元氣よく候間可宜と申候其日は足に少々腫氣有之候處十六日に馬田見舞候へば腫氣もとれ一段と元氣又々酒馳走に成候と申候私儀も御城入前今一度右挨拶可參哉と相考候處參候へば是非酒も出可申すべて當所の習足もとを見候間硯ぶた壹ツ蒲餅あぢのらつきよ位にて代貳夕煮肴一ツ出し候ても

又々貳夕とか三夕とか相成候間やはり返禮は不行方可宜と差扣申候其代り御城入後は上町に用達有之是へ書狀遣候へば何にても用向足申候買物等も御城内にては高料之由酒も池田に安部攝津守家來淺田宗兵衛と申もの私懇意に付是へたのみ候へば池田伊丹之樽割買候に手支不申候事御咄し申所悦に御座候先々大病氣後道中無恙御着樂ものみ酒ものむと云元氣にては氣づかひ無之候一寸右之段爲御知申度津國屋十助方へ一封差出申候早序ゆへ賃錢之所よく御聞可被成候御袋様およねどのへもよく此段可被仰達候爲證據返事手紙入差つかはし候

一八月十二三十三四十五夜とも晴光にて月よろしく御座候十二夜は馬田氏十三夜は萩右の荒川十四夜には旅宿之涼棚にて月を見申候十五夜は淨榮寺自由軒の妹賀平野文平と申男天滿興正寺御門跡掛所の留守預りの所を呼に參り候間暮頃を參り馳走に成候歸りに難波橋向鍋島役やしき稻荷祭にて男女とも藏やしきへ見物に入候間參見候處生花造り物多く挑灯如晝水門の川をへたて、舞臺をたて三

味線はやし方を入幕引口上にて芝居有之候是は藏やしきへ米をはこぶ中衆と云もの素人芝居也中々よくいたし候始而此地にて芝居のやうなるものを見申候此頃長崎奉行着中心勞いたし候爵散いたし候定吉殿へ詩作

十五夜遊興正寺

一片金輪上鐵蕉 寺門深鎖夜蕭蕭
人烟咫尺天三五 幾處樓臺吹玉簫

所々へよろしく頼入候此便いそぎ候間何も認め不申又々御用便可申進候以上

八月十七日

大田直次郎

島崎金次郎様

秋冷時候兩地平安

一八月二日出之狀同九日に届申候其後音書到來定而道中川々差支候と相見へ申候此方々出候七月十八日届は八月初旬に届候旨役所より六日附にて申來候其後此方より八月三日同十三日同十七日(第十七便)出候三通追々相届可申候此地十五夜迄は晴候處十六夜より廿日迄雨天月色無之廿日過も日

々雨天一昨廿頃々漸天氣に相成候間道中又々川差支可申候尤八月五日より十六日迄大井川とまり候由承り及候

一安岡氏へ壹封遣し候是は築山氏へ御たのみ御返事被下候様にと御申可被下候内々之金子當十月留守宅へ返濟被下候へば地主かはりし地代金三ヶ年分の方へ振向候段申遣候間其心得にて御挨拶可被成候其留守宅にて難義いたし候段申遣候一體地面明退候様申候處留守の事故漸地代金取越三ヶ年も遣候様に申置候間返事御催促可被成候築山にも其含みにて可被仰置候○若林源内へ返書壹通是又築山へ御たのみ可被下候御勝手がへりに御座候

一七月十六日攝州高槻之騷動實説一通上申候吉見氏へも御傳覽可被成候古今之大きはぎのよしにて刀は村正之由に候同會根崎新地にて花火屋四人切いたし此實説も委備相知れ申候後便に上可申候此者と高槻之人切の者と從弟の續の由是又珍説に御座候

一木島伊東倉橋吉見へ壹封つゝ御届可被下候此地いづれも相替義無之候若田喜内交代濟安堵いたし候

扱々よき老人にて御座候

一北町大久保清水小川町いづれもへ宜奉頼候増田要助壹封上申候定而此狀差立候後延着之書狀追々可相届と存候今日は差急き早々申入候以上

八月晦日

杏花園

兩地平安

一八月十日附同十九日附之狀九月六日朝晝に届一見いたし七月八月中大方道中川支にて書狀皆々延着いたし候

一地主普請出來候由先宜く存候地代金之義も頼入候諸親類相替義無之大慶に存候拾遺家根御繕のよし御世話に御座候お冬も丈夫のよし安心いたし候食物等御心附可被下候

一給金之義被入御念候義と被存候榮藏仲間勞は相分り候由儀兵衛へはきれゝに月々わたし候も如何に候給金五兩貳分之内金壹兩壹分貳朱當二月取金四兩貳朱之内

金壹兩五月一日渡 金壹兩七月一日渡 金壹兩九月一日渡
殘金壹兩貳朱は當十二月朔日にわたし候積に對

談いたし置候

右之通りいたし置候得共一體貞實にて奇特成ものに付當暮少々褒美にても遣し可申哉と存居候乍去外々へ響候間歸候而後之事とも存候其外奴僕ともいづれも實體にて安堵に候榮者才氣有之如才のなきもの故中々當地女共にはだまされ不申候と是又宜候唯々可恐者女に御座候東西南北遊女園女計にて榮藏は此多少々濕瘡出來故猶更用心にはよろしく候松藏同斷に候儀兵衛長助は誠に皆勤に候一先便安岡氏へ此度地主代り候に付地代金少々先納之義申立當十月無間遠返金之積申遣候いづれ返事可有之候増田要助杯ニ承候へば喰代などは斷候由申候返事次第にて長崎掛りへ難義之旨可申遣候安岡一體沙汰あしく候由に候以上

九月十六日

大田直次郎

島崎金次郎様

昨日封後又々相認候八月廿九日附之書狀拜見いたし候川支にて延着と存候此方々出候書も追々相届可申と存候

一中神氏々届物請取候毛引は重寶に候へ共狀賃此方(江戸宅)拂にてはもらひ候而も高きものに付き可申と一笑いたし候學者といふもの此位時情にうとき事に候

一地主氣之毒成る事に候地代いかさま御見合御尤に候むつかしき組中故跡も定て引込などに成可申扱々地主に縁なき事に候

一福原の蛙の歌住吉の蛙にも不滅事に候學者之幽靈は先例多く有之候左傳に數ヶ條子産など搜神記幽冥録近頃清人之聊齋志異など學者之幽靈數多く有之候麻上下染帷子之例は見當り不申甲府様へ酒之意見いたし候男之先例有之歟猶重便可申上候一家内親類無事此方相替義無之大慶存候早々以上

九月十七日

大田直次郎

島崎金次郎様

此御報吉見と早く御相談六日切歟八日限に島やへ可被仰付候

一九月六日附之狀三井便にて同十日に出候よし十八日着拜見いたし候八月中之書狀追々届候出とかく

川支にて御用狀等も延着いたし候諸親類無別條大慶と存候

一先便書落候き高橋岸祖右衛門方へ御尋候由御蔭にて従弟女之左右も相知れ大慶に御座候此後は音信遣し可申候

一更紗紙之事御世話に御座候是は常元寺和尚より銀廿夕計之唐本をもらひ申候其代りにさらさ紙少々くれ候様申候かけ物の表具にいたし候由に附さらさめきたる形拾枚ホトツ、五拾枚も遣し可申候此外他は物にて謝し可申候其つもりにて御差下し可被下候且亦袖玉武鑑甚めつらしく皆に遣し申候袖玉大名附之方も取交御序に五六部被遣可被下候島屋へ被仰附可被下候

一荒川氏事被仰下御城入已後はいまだ左右不承候定而御替も有御座ましく候此節諸山之新銅乳吹等にていそがしく見舞遣不申候

一橋本榮藏事儀助方申來いかさま夫も可宜候外四人はいづれも金鐵之如く請合申候此壹人は長き間は請合申かたく候今迄も度々目にあまり候事有之候へども遠國之事殊に一通ならぬもの故取扱も

六ヶ舖第一に我儘にて皆々も困り申候き朝寐は朝飯迄晝寐計何もいたし不申病氣も左のみの事にも無之濕瘡にてもはや段々宜相みえ申中々歩行などせつなきをこらへ候て引込不申候様なものに而無御座此度幸の事に候間願之通暇遣し可申候乍去一人に而歸し候は無心元候間來十月廿日頃長崎同役歸り着坂之節頼み同道歸り候様可致候一體此方申合にも遠國にて病人等みだりに暇不遣人にも附候歟路用等差支なき様にいたし歸府迄は家來分にて歸府之上暇遣し候申合候間幸よき序に御座候元氣も食事も歩行も随分出來可申候一體もはや我儘にてあき果候と相見へ申候委細儀助方へ申遣候内狀御覽可被成候自身賄とは申越候へども路用は遣し可申候いづれ損之卦なり

一右に付代り之侍星野々差越可申由申候得共是者不益に候間御斷可被下候いかに慥成ものと申候而も穴のむじなにてあしく候内々田山にも相談いたし候處長助をくり上にいたし侍につれ仲間は月やとひ壹分ツ、にてやとひ候が宜旨申候歸りの節は仲間一人不足にてもよろしく候由申し候御城内など

にて人かへ候節侍は金貳分遣し仲間は壹分之定に候へどもまさか其様にも成申がたく候今壹兩歟三分も遣し返し可申候

一此度初旅にて發明いたし候事有之とかく召連候ものは才なき律義一篇よろしく候道中旅宿とも何も才は入不申唯律義にてよろしく候御普請役中旅功者にて侍はとかく仲間に力をさへせ候が宜候と申候御家人之二男等必々連候はあしく候由第一我儘にてつかひにくく損の由成程とても書き物も何も自身いたし候而相濟申用人も侍も随分無筆にても餘り差支無御座候早々以上

九月二十日

大田直次郎

島崎金次郎様

秋冷之候兩地平安

一此間廿日出之狀六日限にいたし差立候間定而早速相届可申榮藏事暇願候事内々力太郎も榮藏方へ申來候由然所長崎奉行肥田豊州當廿一日長崎表出立凡十月十三日頃には大坂表へ着之旨今日申來左候へば十月十六日頃には大方此地へ出立可有之其

節同役中村繼次郎を頼み供人數之中へ入れ差下し可申候左候へば中村用人へ木錢米代相渡し當人へは一日百文つゝの割を以て遣し候は、不足も有之間舖不存寄伊勢參宮でも可致も難計候左候へば又々少々損亡なれども無致方候いづれにも先便申遣候通人代り之義は相斷此方にていか様とも可致増田要助も參居候間利害申聞長助くり上にいたし安刀にても遣し可申候いづれ申立候通惡病に違無之候へば猶以御免く尤私家來分にて差下し歸府之上暇御申渡可被下候大取込早々以上

但侍と申候處袴も袴も入らず刀ばかり差し申候合羽は着詰に御座候へ共羽織の時は野羽織貸し可遣候

九月廿三日

大田直次郎

島崎金次郎様
吉見儀助様

冷氣相成候兩地平安島や治兵衛一通高橋氏頼一通太左衛門殿へ伺計可被下候中村氏一通
九月十八日附(第十八便)又々川支にて十月六日に延着此方より(第十九便)九月十七日

九月廿日第廿便同廿三日番外急事差立候定而追々届候義と存候
如仰雨天多く九月之天氣左之通○晴●雨●陰印也
九朔○二●三●四●五●六●七●八●九●十●十一●十二●十三●十四●十五●十六●十七●十八●十九●廿●廿一●廿二●廿三●廿四●廿五●廿六●廿七●廿八●廿九○
十朔時二○三○四○五○六○大抵相違無之歟
一荒川氏其後取込相尋不申右之節之書狀は八日切に被立候
一十三經直段御世話に御座候此方も大抵似より之事に候
一大久保清水北町小川町無替事おとみお仲無事お冬丈夫之由もはや臨月の旨日々吉左右相まち居申候御届之義女子に候は、歸府之上にて可宜候男子に候は、酉幾歳と申事に候間御届可申上置候築山へ被仰芝氏へ申遣候へは手輕き事に候御乳杯書附等も何もさして六ヶ舖事は無之存候届おくれ候分は不苦候年附計相違なき様にいたし度候事
一御勘定御入人有之松村近藤倅などは同慶に存候山

本も支配之職位にて候扱々尤至極成御入人に御座候乍去出役之中御譜代計にてとかく御抱は六ヶ舖と相見へ申候是に附候而も私事などは不存寄難有奉存候築山に御逢候は、松村近藤山本へよく祝義申し様に頼入候端流にては御免御免

一先便急便に申入候橋本事左右を待居り申候定而一兩日中には返書參可申と存候長崎奉行も當十六日着之由に候

大坂にて直段之事御慰に認め申吉見へ御見せ可被成候

一御扶持米拂候處肥後の上米にて壹石に付七拾匁なり

一大き經りカネ曲尺壹寸計長さ四寸五分位の大根三本を壹把にて十二匁つゝ高直なり當年大根少き由一體大成もの無之候

一松茸壹斤に附去秋三分位之處五本壹斤六七分之處百文位にて上々御座候當年も下直之由風味匂ひひとの外よろしく所々より大きなをもらい申而松茸之食あき申候

一肴は堺より參候而とかく高直なり當町少きはいわ

しヒツコの江餅スガシの澤山成物鱧まな鱈なりことなり江餅小ききなり澤山成物鱧まな鱈なりことなり
れども二三匁位にて高し黒鯛の事はちぬと申和名抄にもチヌとあり古名なり

一此節經有之候例年初經位の季候は十月頃なり
一九月節句雛祭なり菊の花をあげ候にはあきれ果申候尤八日かけ取濟候而夜より上候十日に仕込なり雛棚商賣三月よりはさびしされども内裏作りの翠簾かゝり候物との外奇麗にて下直也此中に内裏雛と官女等をかざり申候價は安き處十八九匁より三分位高きは十兩餘迄有之由貳分位にては内裏雛ともに揃申候尤家造り取はなしにて箱入なり北町などへゆめくはなしにもなり不申候

一北町女子のまげゆひ候ひちりめんかのこのまげりばなしねだりし間承り合候處此方にてはばいまぼりと申長さ半るりだけ程有之貳匁七分のよし尤下直成も有之候は、調へ遣し可申と存候此方にてはまげにむすび候後洗濯して半るりにかけ候由節儉なる事なりもし御出候は、此段おはなし可被下候存之外高きものなり

十月七日
大田直次郎

島崎金次郎様

冷氣日増兩地平安

一 九月廿七日認廿九日出之狀十月九日相達十月四日出之六日限り川支に而同十二日朝相届拜見いたし風邪痢病等流行之處家内親類共無恙安堵いたし候此方も少々風流行候處皆々丈夫にて大慶いたし候一橋本暇願並星野氏手紙も橋本へ参り吉見より田山へも書狀來則即刻其段申渡候彌十五日長崎詰同役着候而橋本家内病人有之急に暇遣候旨相頼同行いたさせ可申木錢米代之分同役たのみ用人迄遣し當人者當月分給金も壹分貳朱遣し置候處十九日出立故未は十日分も残り有之故金壹分も遣候ば不足も有之まじく候尤歸府之上私宅え参可申其節此請狀(請狀は跡より遣し可申候江戸へさへ歸り候へば跡にて可申上候ても可宜敷候事)御消印暇差出候積り道中者私家來分にいたし候事先例に候事近所交りに馬田其外へも内々談候處兎角御返し候方いかさま可然と申一人にてもとめたきと申もの無之候病氣はともかくも是にて御推量可被成候事

扱々損徳之事計にて恩義などは夢にも存不申ものなり

一 安岡氏返書以今不参候由随分御催促可被下候増田要助にも承合候處先々も其通申かけ候處斷之候由申候き
 一 更紗紙並武鑑並堀田侯掛物之義承知いたし候
 一 お冬達者之由何々之事に候出生之後名附候事男子に候は、太郎を下に御附候而頭字は北町儀左衛門殿へ御たのみ可被下候女子にても頼入候定而辭退可有之候へとも大阪へ申越候様可被仰候達者と子共にあやかり候様にと被仰可被下候祝儀等は宜頼入候御入用多き方不苦候事
 一 大塚築山書狀落手今便返書不差遣候宜く頼奉候
 一 東氏地代金之儀何かと御世話に御座候
 一 跡代り長助取立候儀は今日内々儀兵衛を遣候増田要助掛合其上之事にいたし置候いつれ榮藏出立後の事にいたし候間必々其地屋野などには御沙汰無之方宜候尤同役へも右家來榮藏義親類大病人有之と申歸し候積りに候外見一向病人らしく無之候間食も歩行も達者に可有之候扱々去々年孝行奇特者

八百人も傳を書候陰徳にて名字帶刀御免之忠義者を一人こしらへ候事六づかしく獨笑いたし候まかしくり上のけんとも可相成哉と申合せ候猶目出度左右を待居候事に候以上
 方々へよろしく頼入候北町ねだりものも調置候箱入にいたし同役へたのみ下し可申候早々以上
 十月十三日 直次郎

金次郎様

寒冷之候兩地平安

一 長崎奉行豊後守殿十月十六日着十九日出立同役中村繼次郎者十五日着に而十八日出立に附榮藏儀頼同勢之内へ入れ歸府いたさせ申候十一月三日江戸着の積に御座候間十五泊に付木錢米代料金壹歩用人へ遣申若川支等有之候へば又々勘定可申と申候へ共廿四日分程之料有之候間大方宜備勘定と相見へ申當人へは晝食料金壹歩遣し候盗人に負錢位にて象牙箸一膳爲儀別遣申候當人も此節に至り少々残念の氣味に御座候江戸着候は暇之義御申渡早々此方へ可被仰下候先々大安堵いたし候豊後守殿並

御普請役衆へは伊勢へ廻られ十一月九日江戸着之由中村は無其義當人にはちと残念ながら此方勝手に宜候請狀封じ上申候江戸着之上御消印可被下候一増田要介へ(當時儀左衛門と改む)儀兵衛を以内談いたし長助内存をも爲承候處要助事殊之外悦申候平人一人半季にかへ候事迄増田世話いたしくれ候間長助事十九日増田長藏と改め野羽織刀かし遣候當人も悦候

一 北町小川町大久保清水相替事無之哉お冬當月臨月と存候賑々御心配と存候段々丈夫之由承り安堵いたし候去十一月南町若田土藏燒候由賑々御驚と存候
 一 袴肩衣等は一向入不申奉行衆滯坂中計之事にて唯々裾のきれ候は田山も困り申候町代の婆々をたのみこそくらせ申候乍去もはや五六ヶ月に成候而大體難用高も相知れ申候
 一 肥田豊州滯坂中座人御褒美等も取らせ遣し座人氣請宜候一體秋御褒美濟候へば冬は大方無之も御座候少々之事にても甚悦申候名聞利欲第一之所故如此候拙者へも爲土産金三百疋先例之通御普請役へ

貳百疋と申候此度も金五百兩長崎町人預け返られ候由目出度候事なり

一當十月十日豊州通坂の節書上直段入御覽候

一加賀米 壹石に付 五拾九匁六分

一筑前米 同 六拾九匁三分

一肥後米 同 七拾壹匁四分

一中國米 同 七拾三匁五分

一筑後米 同 六拾九匁六分

一岡大豆 同 五拾五匁九分

一金壹兩に付 六拾貳匁貳分五厘五分

一錢壹貫文に付 拾匁四分六七厘

右之通銀遣ひを重にいたし候國故錢は何程と承り候へは壹貫文に何匁と申候物の直段を附候にも銀壹兩銀貳兩又は何匁と申候

江戸の了簡にて金壹分を拾五匁と心得候と大に損有之候さすがに金壹分は欺き不申候べども油断をいたし候と貳朱判にて遣し候七匁五分にとられ此方への勘定に七匁八分など申され候人物の至て悠々たるとはちがい利にさとき事飛鳥のことく十露盤と秤は片時もはなされ不申候是は町人計居候國故也町方與

力などさへ大御番と小十人は御目見以下か佐久間も御徒頭を被勤候由御徒目附とはとちらか上役など、申位せめて便に大概順を取よせ見せ申度候猶重便可申上候早々以上

大田

島崎様

兩地平安

一十月廿三日出の六日限狀(大井川 十月廿六日申刻より 宮野風故出船 今二日晝時着) 同廿七日辰刻迄

無之佐屋廻り

一お冬事先月廿二日夜酉之刻安産殊に男子出生の由至而安産に而母子共丈夫之旨御申越目出度大安塔いたし候皆々御祝ひ別而北町市川氏にても御悦と奉存候御届並名前之義先便申上候様御取計と奉存候幸今日者御役出之日に付御普請役兩人馬田氏田宮氏佐伯氏天王寺三郎在候 婦人醫島屋惣意 晩程招候而酒宴を催候處右御手紙到來別而悦入申候北町乳母木戸か、等世話之由安心に御座候此上者乳出候而丈夫に肥立候義を祈り申候若又乳等前格之通少く候ば早々乳母御抱可被成候別に御相談に及不申候嘸々唯今迄

段々御手當御心配察入申候遠方にて承り候は誠にぬれ手で粟と申ものにて大慶いたし候随分寒氣之節猶又御心添可被下候先右書狀着之義申上度早々以町便申入候委舖者二三日中御用便有之候間其節可申上候以上

十一月二日

大田直次郎

島崎金次郎様

猶々五月祝も歸府後に相成別而大慶いたし候當地人形ことの外宜敷候以上

十月十一日附之大封壹箱同廿五日着日増冷氣之處兩地平安大久保清水小川町北町二軒も無事お冬丈夫之由乍去臨月之事故嘸々御心配と被存候此狀認 總十一月二日安産之 事申來即刻返事出す

一十月十九日飯田町火事之事承及候宮原氏など如何に候哉奥女中怪我人多くなど申傳候間無心元御座候

一堀田侯掛物一幅 一さらさら紙五十枚 一武鑑袖珍 袖五 共六部 一淺草海苔二十枚 一十二草圖藤見より壹枚 一略曆二枚 右之通請取申堀田侯詩かけ置候處皆々驚目申候銅座

人なども一覽感心仕候來月に入候は難波梅一枝大根にさし箱に入れ飛脚を以獻上可致と存居候先々先方へは御沙汰なしに可被成置候

一當冬御切米書附拜見委細暮々可被仰遣候旨承知いたし候此方も先々只今迄之様子にては越年も無障相見へ申候來春下向前に取寄候様にも可相成哉御扶持方も隔月に拂代金貳兩餘には相成申候前に物入多くと申候譯とくと承り候處全く遣ひ過しと被存候新町へは四五町有之門限はなし前々忍び歩行も有之候様に沙汰いたし町内之もの覺居候而内々咄し候去年などは夏物蚊屋上下ともにかり取にいたし返し不申など悪風聞いたし候去年之家來はよほど惡舖候由皆々申候其外東西共に遊所みちみち候間若きものなどは一年詰甚た危く御座候安岡閣魔顔之事承知いたし候如何いまだ挨拶は無之哉もし挨拶無之候へば此方にてもいたし方御座候 一長藏事至極似合申候跡へ中間一人可抱入候處平助喜助申合飯焚と供とを兼帶いたし外に入不申候方勝手可宜と申候間一月五百文つゝ増遣し候而一人前遣兼させ申候箱爲持候事はたまゝの事故一

人雇に而も間に合申候平助始終飯焚候處喜助と申合兩人出精相勤申候先々安心いたし候皆々和順甚穩に相成候

一萬屋六右衛門龜屋柳屋などは如何萬屋助次郎方なと是又如何若火災に逢候ば宜く御頼奉り候承り次第見舞狀にても遣可申候

一今日出立之天草御普請役松本佐七にたのみ北町頼のまげ紐箱入等下し申候十六七日頃

一當冬萬屋鶴屋草双紙出候は、兩方共貳貫程つゝ被遣可被下候此方にてはめづらしくかし本屋など裏打いたし合巻にてかし本にいたし候長崎同役方へ遣し可申存候長崎にても悦び候由に候毎々長崎同役よりめづらしき物もらひ候間遣し度存候其外新板物しやれ本兩面摺等萬屋御聞合何にても御遣可被下候御頼奉り候

一大田恒次郎參候由當春中吟味役岡松八左衛門殿時有之是は野本武兵衛親類故私方構無之出入致させ度旨被申候間少も不苦候旨申置候手跡宜候旨申置候埒の明ぬ迄にて何も氣を遣事には無之存候猶重候可申上候以上

十一月朔日

島崎金次郎様

大田直次郎

寒冷兩地平安

一當月二日安産之狀到來即刻六日限に而返書遣し申候十一月朔日附認置候書狀壹封前後に成候得共遣し申候彌母子共丈夫に肥立候義と存候

一右二日の夜は御役出之日に付仕出し等申附御普請役兩人馬田氏田宮由藏蘇州と云佐伯重甫天王寺村來宴に附右書狀到來兩悅一所にて御入用もかゝり甚節儉當り候處暮頃播州姫路家老川合隼之助が登斗檜千代鶴と銘有之酒到來皆々悦び狂歌出來候間入御覽申候ふしぎ成日に到來大に興をたすけ申候銅座人小山氏流鏑馬記持參佐伯氏いろは萬年草と申書物持參是又奇事と申候蘇洲が發句は御役出の祝計に持參いたし候處是又出産之祝儀にも兼可申と大笑いたし候招仙舎と有之は御普請役町田氏にて今日も遊人連中にて御座候猶重便可申上候今日取込早々申上候皆々へよろしく御傳言頼入候以上
十一月四日 大田直次郎

島崎金次郎様

寒冷兩地平安其地寒氣強候由此地はさのみならず霜も薄く今朝少々氷を見申疝積之氣味一向無之風も皆々引候へとも引不申候唯今迄一日も不衣服藥一切無之候幸の事に候

一十月廿二日の第二十二伊十一月五日に届申候此書はいまた安産之前日と相見申候

一母子共丈夫に候哉二日之六日便着後左右無之候定而一兩日中には届候事と存候乳はいかゝ

一築藏事も歸府と存候定而暇取候事濟候事に存候

一飯田町火災宮原氏怪我も無之安心いたし見舞之事御世話と存候嘸々跡之普請等にて宮原大取込と存候乍去やけはこりとやらにて嘸々御見舞成市事と存候柳屋に萬屋龜屋等へ御序に奉頼申候助二郎方へ三枚とも被遣候へば届き可申候柳屋は半焼ゆへ別封なり書圖にてくはしく相分り申候宮原は取込と存候間書狀遣し不申候其段よろしく頼入候

一甲州狀杉浦伊東吉見狀落手地代金壹兩三分被遣候由承知候

一十二月に入候へば御金日に例之上納金貳兩之氏へ御たのみ可被下候築山より御たのみ其上定吉にて早朝に金子持參欺尤切れ金に無之を須賀屋にも御見せ被遣候お冬方に書附預け置申候き年々同文言にて奉行衆奥印有之爲念去年之文言書送申候

金子之事

後藤包

右者寛政十一年正月大坂銅座御用被仰付候に付旅用着類諸色致支度候處同月林大學頭書物御用の方へ出役被仰付銅座御用之方御引替相成申候依之旅用意支度入用等拂方差支候間拜借金相願候處同年拜借金三拾兩被仰付申候戌迄拾五ヶ年賦之内當申年分書面之通上納申處仍如件

支配勘定

寛政十一年十二月

大田直次郎印

堀内 小膳殿

小倉孫右衛門殿

富安 九八郎殿

鶴飼 次兵衛殿

右之通相違無之候以上

柳生主膳正

右之通美濃紙に書候而芝氏へ見せ其上にて例之宿に置候印紙へ書き候へばよろしく候いさい芝氏へ手紙遣し可申候築山よりも御たのまれにて左候へば御金奉行之掛合も何も改方にていたしくれ申候以上

一杉浦庄兵衛十月十三日出役被仰付申候由承り候築山へ傳言御頼可申候祝儀書狀跡より遣し可申候

十一月十四日

大田直次郎

島崎金次郎様

兩地平安

十一月三日付同九日御書入之御細書同廿日到着此方が差立候二日附六日限四日付同十五日付追々着と奉存候少々寒に付御痛積之由御保護可被成候

一産婦小兒共達者に肥立候由何々以目出度奉存候鎌太郎と名も付候由農業之具にて宜舖殊に藤氏之元祖大職冠之御一字拜領之心持に而目出度被存候能々北町儀左衛門殿へ御禮頼入候扱又乳も澤山出候由重々目出度大安堵いたし候臍緒納りし跡へ灸は

御すへ不被成候由一段之事に候灸は嫌之家法にて乳より外によき薬はなく候間蟲氣さへなくは麝香や熊の世話にも及まじく丸薬も餘り御用被成まじく候神代の子供は少名彦のまくりは用ひ申まじく候

一乳附已下家内夫々へ御褒美書附御尤に御座候木戸重助か、詰切之由宜敷頼入候お米殿無々ねふく可有之お袋様男子誕生之評判無々大悦之事と神樂坂にひびきわたり大坂迄聞へ申候なんでも定様をそたてあげたからはから又鎌様をそたてあけねばならぬとの御請合のよし急度承知いたし候

一北町濕瘡無々困り候事と存候乳母事は湿もうつり不申候哉お幸おとみはことにつよきよしお仲なとうつり不申候いたし度候まかし當春抱瘡の輕き様かはりと存候ば可宜候

一奴僕御かへへのよし御尤に御座候
一佐々木氏市川氏産衣之御禮金十郎殿より御看守袋之御禮其外所々到來物之方へ宜御禮頼入候

一石井磯貝淨榮吉見野村市川書狀六通落手皆々此度御返事不致候此次之便に遣し可申北町市川氏へ夫

迄宜舖奉願候短日にてことの外世話舖其上御座銀座共兩方大取込御察可被下候

石井返事認申築山へ御たのみ可被下候

一當十月以來惣勘定書附相嵩み何角御心配之儀と被存候

一榮藏引取請人書附落手萬事夫に而御察し可被下候跡は甚穩には安心いたし候此度之安産いつれも大悦いたし候平助もことに喜悅に御座候猶期後喜候勿々以上

十一月二十二日認

大田直次郎

島崎金次郎様

甚寒之節兩地平安

十一月九日附之書狀役所便十二日出にて廿日に着後者左右無之候彌母子共丈夫に肥立候事と存候乳も續て出候事と存候此方御用便之節廿五日に狀出しをき定而達し可申候

一昨四日夜八ッ時過々大雷雨晴れ候て七ッ時前々天王寺之方に火災有之今朝沙汰承り候處天王寺塔炎上並諸堂大方焼候由扱々可惜事に候定而雷火に而

候哉今日引ケを廻り見可申と存候猶委舖後便に可申遣候

一先日御城内荒川氏より酒一壺看添到來是も少々御快候由とかく先達而之病氣治し兼候と見へ申候則書狀掛御目候先此位に候て氣遣も有之ましく候

一此節江戸長崎兩地へ掛合事多く殊之外繁多に御座候其上短日にて忙しく候吏務紛々皆一決いたし候事故不容易事共多く候少閑暇には例之唐本類夥舖書肆より持參夜分にも少々つゝ見候一々求め置度ものとも御座候少々つゝは抄寫もいたし候今日差急早々相認め申候以上吉見へよろしく御頼申候

十二月五日

大田直次郎

一寒中兩地平安 産婦小兒共壯健と存候

一天王寺焼繪圖並瓦塔再興之時也石摺入御覽候外に書入無之繪圖貳枚進候間此通に朱引書入いたし外へも御見せ可被成候吉見氏北町 金兵衛方へ壹枚つゝ被遣可被下候繪圖御用に候は、又々遣し可申候一私方へ參候佐伯重甫泉屋眞兵衛大功にて寶物共取

出し候由町奉行衆も早速詰候而御靈屋第一に防か
れ候由一體火消ぬる候間諸堂焼申候可惜々々
一塔の瓦は佐伯氏方もらい申候車長持第一之寶物と
珍藏致すべく候

一焼失前に頻に盜難有之諸堂鳴り候事なと有之候由
近所のもの申候て慎可申處濫行の僧とも不恐候故
歟天災に逢申候浪花第一之見物を失ひ申候能き時
節に參あはせ一見いたし候事に候來年歸り候は
定而御再建願出居可申二月之樂も有之間舖扱々殘
念此事に候翌六日夕方焼跡一見いたしあはれなる
事に候當春初て參り候節古雅成る事に感し一首詠
候處只今思ひあはせ候得ば物のさとしにやはしめ
て天王寺にまうてし時
うつゝなもなにはの寺をきてみれば
たゞ夢殿の心地こそすれ

只今之氣色に髣髴といたし候事に候
一佐伯重甫夷曲入御覽申候誠此通之景に御座候
一十一月九日附同廿日に達候後久々書狀到來無之候
取込故と存候此方は

十一月二日六日限同四日同十五日同廿四日十

二月五日都合五便二十四便廿八便迄差立候
定而相達し可申候

お袋様およね殿其外
先十二月五日付出候は第二十八便也書落候間
申上候

一當暮例之通夫々々祝儀被遣可被下候且大久保御姉
様清水御姉様へ金百疋つゝ歳暮可被遣候北町お幸
へも可被遣候

一來春正月末歟二月頃金拾兩御登せ可被下候尤此地
小判は少々之切しにても甚むつかしく御座候間皆
小粒にて紙へ御張被遣可被下候歸府之節並三月節
句前々拂土産物等之用意にいたし候間申上置候
々々々にて小兒取込之事察入候早々以上
十二月七日夜
大田直次郎

島崎金次郎様

十一月廿四日付之御狀十二月十日に延着甚寒之節御
地寒氣烈候よし此方は巨燧有之候へとも當り候程
の事無之手水鉢四五日已前に薄氷其後は氷無之候
硯水朝氷り不申甚暖に御座候霜もあまりふり不申

候十一月末より折々雁わたり申候兩地平安去年中
腰痛松藏事ともに病出し候當年は一向痛不申仕合
に御座候不思議之事者左の手に有之痰瘤なくなり
齒堅く相成香物などたべよく相成候○先便申上候
金子之義來春彌頼入候、

一産婦乳澤山小兒丈夫之由目出度存候先月廿七日若
宮神樂坂へ宮參神佛兩部に天台法華之加味よろし
く候但北町二軒は井伊酒井兩家之古實にもあたり
可申哉一笑々々高井屋舖換之由先々年始之節坂道
之峻岨なく宜候引越祝儀にても被遣可被下候、
一上納金之儀芝氏より申來候由此間芝氏へも書狀之
節頼遣し候

一中村徳次郎を殘錢返し候由私方へも申來候間返事
遣し申候南町金村彦衛門兄弟にて御座候間南町に
て承り候は、居宅もまれ可申歳暮迄之内何にても
肴にても禮ながら遣はされ可被下候鹽物などに候
は、南町へたのみ候而も可宜手紙は大田定吉より
にてよろしく彌御安泰位にて大坂へ申來候旨文言
御差圖可被下候殷勤成方よろしく候
一鎌太郎出生御届之義御世話に御座候年齢之所に不

搦大方歸府後届候類可有之候年にうそをつき候事
得手物故如此候

一 大久保清水小川町北町三軒無別條珍重に御座候伊
藤家濕痔はいかゝ少々快方に候哉おとみ嘸々困り
候義と存候

一 疝積之氣段々御快目出度候

一 小兒は餘り暖を過候はあしく候冷候方宜敷由に候
着物にくるみ巨燧やくらの上へ置候事堅く禁制可
被下成候至而毒の由申傳候手も折々動かせ候方宜
敷由貴人之子者多病百姓の子之丈夫なるにて相知
れ申候度々あやし候て驚かし候事毒也とかく下へ
ねかし置候而不搦方宜敷候由

一 此表天王寺火事之咄のみに御座候材木等町々寄
進多く車につみ火事羽織にて若きもの奉納いたし
候當八日夜丑刻太子像も庚申堂へ天王寺内南光坊
の被居候といふ湯屋方丈へ御歸座有之御代々御位
牌も十二日に秋野坊へ五智光院へ御歸座いづれも
途中伶人奏樂之由に候去五日曉火事之節太子堂が
庚申堂へ御遷座之節は五重塔焼ケ上り南大門の方
へ倒れんとする最中火之子の中へ樂人鳥甲にて簞

筆策持参かけ附例の神輿は御ねりにて途中立樂有之候由さすが古風成事と皆々感涙に候へどもあづま夷の了簡にてはグハラ〜やけ落候中を御ねりにてヒウドンヒヤウド、ンもあまり利口な沙汰とは不相見候吉見へも御はなし御笑可被成候最早月迫り折角御仕廻可被成候以上、

十二月十五日

○

十二月五日附之狀同十八日相達寒中彌御安全家内産婦鎌太郎とも丈夫に有之目出度存候鎌太郎義蟲氣も無之大便時々不通候節は丸藥御用之由御尤に御座候夜分等御心附け奉頼候儀助方再縁之御世話之義當人よりもよく〜御禮申候様申來候

一出産御届之義御世話に御座候都而書附等甚難成所故手間取候と相見へ申候此方を出し置さへいたし候へば宜候尤請書之書手と紙等は役所に多く有之候間誰にても爲認濟申候築山へ能々奉頼申候寒中狀も遣し不申候間宜御頼申候
 一 去月廿七日宮参り配物等御世話御座候今井治助者小松屋にて多く出合候人にて候

大久保清水小川町北町二軒無別條大慶御座候北町伊藤氏方濕瘡今以盛之由嘸々おとみお仲等困り候義と存候宜奉頼候おとみ餅は毒に相見候餓頭御遣可被下候

一 儀兵衛其外へ御傳言皆々宜く申候田山へ書狀不遣候儀少々遅筆し候間別て難有がり申候

一 歳暮之景色甚静にて餅屋かんばん有之所一匁に付五百目

平生のおそなへも一々秤をたて置候而かけ申候のし餅はたて壹尺に五寸ほどつゝの箱に入れ四角にいたし是も秤目にて足餅には餅の切れはしを添へ候由丁銀之心持なり、

一 町内年寄が一尺計之大鏡もち遣候間すはりの代りに用ひ金壹分計もつかせし可申候皆々下戸衆餅は悦可申松筋等も町人用故手軽く申付とかく節儉第一にいたし候

一 土産物仕込にかゝり候思召も御座候ば可被仰下候瀬戸物下直に候へ共こはれもの故危く船廻しも萬一之事無心元直段の急にえれかね候小き雅物求め申候荒増左に書附入御覽候何ぞ可宜思召も御座候ば可被仰下候歸府前迄に工夫いたし候

一 唐繪石摺補正成時大石内職助書等 是は到來物おびたし〜
 一 仕込置候尤無料なり

一 青貝細工之大盆甚奇麗にて(大壹枚二付貳朱)大二三枚程末

一 同封さん類一匁餘五本計末候 一 水入等雅物一匁餘のもの唐物とみへ申候

唐物まがひなり

一 すきやきのかん徳利八分ツ、白燒ハ壹匁五分程

唐物

一 酒のみ猪口三匁位

此外まごの手、燈臺、火箸等數多有之候唐物眞物又はまがひもの等唐物やに有之候急に直段不知候而安きもの多く御座候右之類に候へばあまりかさはり不申文庫にも入れつめをかひ長持入にいたし小道具等面白きもの多く御座候別而青貝細工妙なり

一 盃臺箱入 三匁餘なり

一 青貝書棚二尺四方 二分位

一 唐卓 十匁十二匁位也

一 すきやきのこんろきびしやう 一組三匁にて至而奇麗

尺 廣

に候へともさて〜かけさうにて危く御座候一つ求め置候而毎日用ひ候處存之外丈夫にて土の性至而よろしく候

一 新渡之猪口皿之類扇盃類等は到來物多く有之候間土産に用ひ可申唐本に餘程買過申候間土産物方略し可申候

一 何にても思召つき候而御望之品有之候は、可被仰越候正月之内に大概極め長持詰いたし置候早々以上

十二月二十五日

大田直次郎

鳥崎金次郎様

改年之御慶申納候餘寒未退兩地平安萬福之至

一 十二月十五日附之二十七便同十六日附 町使同月廿三日附之番外御用便共正月三日に到來拜見いたし候

一 體寒氣ゆるく氷雪共に少く御座候被位之事に而天氣宜候

一 上納金無滞相濟候由芝氏例之戯れ承知いたし候湯呑所へたのみ居ながら相濟候事と被存候奉行衆よりの請取書去年之書附と一所に被成置可被下候玉

子一箱被遣候由御世話に御座候

一 大久保清水北町二軒無相替義鎌太郎丈夫之由大慶いたし候北町お幸濕齋同篇の由久舖候へば退屈いたし樂湯等にて追込候事有之候間必々直し樂無用にいたし様能々被仰可被下候忍冬にても茶のかはりは飲候が宜候おとみは段々快候由承り候是又御心附可被下候

一 繪双紙京傳作上紙摺十二冊並すり六十八冊袋入三冊之やれ本二冊被遣面白候並すり上すりとも長崎同役其外へ進物によろしく候

一 福原富原狀吉見より石摺海苔吉見八太郎狀とも慥に請取申候

一 喜左衛門殿の海苔被下宜御禮頼入候此度は返狀遣し不申候平助への御届物遣申候

一 荒川氏へ歳暮鳥渡水菜遣候處禮申來候自筆(此節之書狀も入御覽申候)にて病氣全快之由に候當春も早く使者参り申候

一 吉見氏婚儀も十二月十九日に相濟候由目出度被存候嘸々御姉様御悅の事と存候

一 當春交代高橋儀右衛門被仰渡候旨齋臘廿九日に申

來大安堵いたし候例年よりは早くにて二月中旬過には高橋氏發足之旨長崎掛りより申來候左候へば三月末歟四月初には歸府いたし候様に相成可申候夫に付先達而申進候金子之義高橋氏(高橋氏宅は白山御殿坂邊と覺申候築山へ御開合可被成候)へ御たのみ御上せ候而も宜候町便にても役所便にてもいつれにても宜候早き方安心に御座候

一 中川公御頼にて青貝細工書棚舊年差下候處右料物(六十夕餘)も参り殊之外氣に入候而猶又卓机料紙箱箆等注文申來候間誂へ申候但右之代(百八十目程)はいまた参り不申候間歸府前に立かへ可申も難計候間右之用意等も有之候間金子之義御くり合次第拾兩より四五兩已上之分は不苦候道申入用出立前宿代道具代金五兩程銅座人不殘振舞等も有之候處當時金子残り拾貳兩餘に相成候間此段申上候御上せ候員數等此次之便に被仰下候左候へは安心いたし罷在候(御役所便りも爲替故慥に御座候町便も同斷都合次第にて宜候)員敷さへ極り候へば高橋氏着之節持参にても宜候高橋氏者神寶方掛りの隣にて別而心易く御座候間荷物之内へ何に

ても御頼可被成候當月中に舟廻しにて少々土産物等はしけ可申回船間屋へ可申談と存候書物等殊の外荷物多く成候間船出可致候二月同役着後はとも大取込に候まゝ二月初に大體長持に片附候積りに御座候何か歸り風立候而手に附不申候齋臘も御用多く大晦日七つ時迄有之候

一 當年は松餅も盛砂等にて大さう成傍町内かいたし鏡餅も一尺餘之物町年寄を贈り去冬を巨燧矢倉等も櫓くさく結構成事共に御座候正月之重詰等酒鹽肴等迄進物にて歳暮に酒も買不申何程潔白成御時節にても遠國は大概此位成ものと存候大體口のすくなる程斷候而此位也あまり潔白過候とて却て迷惑がり申候尤家來等へも嚴鋪申附置候間いづれも篤實にて安心いたし猶春永々可申上候以上

正月四日

島崎金次郎様

大田直次郎

餘寒時候兩地平安 正月元日之御狀同十二日到來之處其日早便有之早々可申上候右申上候残り申上候一年始之書狀任仰別段禮狀遣し不申年禮は少々御座候得共江戸表年始狀數十通相認め候へとも兎角殘

り申候

一 一家内親類共相替事無之小兒丈夫之由目出度被存候北町濕齋如何に候哉少々は快方に候哉承り度存候大久保も同前之由先達而野村隠居より家内之濕は松藏か濕にては無之由申來候是計は遠方にて相知れ不申例之異説と相見へ病中もこまり候なと申こし候き

一 歳暮之祝儀夫々へ遣はされ被下毎々御世話に御座候お米殿嘸々取込に可有之候能々御傳へ可被下候お袋様へも宜御頼申候當年元日は鎌太郎ととうにあたり候間御祝可被成候此段お袋様へ御如在は有之まじく候へとも、御心附申上候段宜御頼申候、一 久世和州一色氏を例之通目録來候由禮狀遣し可被下候重便可申上候

一 北町親類倉橋藤四郎殿天草詰之由此方にて逢可申候

一 歸府荷物多くはり可申候間例之桐之箱壹つ船便に下し申候此地廿日過に出帆候は、遅くとも二月下旬には着可申哉尤海上之事故縦漂流いたし候とも不苦品計入れ申大切のものは持歸り候方丈夫に御

座候荷物かさばり候には困り入候只今詰方世話
いたし候乍去上坂之節雨に逢不申候故桐油等損じ
不申候間油計爲引申候

一交代のもの出立之日限二月中旬過と申事に候彌相
知れ候は、又々御用狀にて申來候段色々の願も出
居候由掛り之者より申越候

一土産物之品之内新渡皿至而下料に付八拾枚程求め
置候京都盃蓋共箱入是又下料に御座候間少々求め
置可申候

一早春甚いそがしく何方へも參不申候扱々歸り風立
候而何か一向手につき不申荷物の工面計いたし罷
在候とかく荷張り可申と存候右に付吉見氏へいま
た返狀不遣候能々被仰傳可被下候北町へも同断奉
頼候

一吉見を申越候高津梅つぎ穂之義承知いたし候是は
近日是より別に箱入にいたし差立可申此節紅梅等
所々よりもらい申此段御序に頼入候以上

正月二十五日

大田直次郎

島崎金次郎様

○

正月十九日付之書二月五日相達拜見餘寒強候由此
地も晝中は暖にて春來餘寒強十九日頃より當月迄
餘寒強巨燧に入申候一兩日前之雨を和暖に成候其
地廿六日大雨大雷のよし島屋より申來夫々は靜に
成候事と存候親族無事兩地平安目出度被存候北町
濕瘡段々快大慶いたし候清水も婚姻後よろしく候
由悦候

一土産物之義被仰下大抵求め申候被仰下候吸物椀
廿八前二た通切溜一組は京都物よろしき由是は銀
座へたのみ置候堺庖丁之事も銅座へたのみ置候新
渡南京差身皿一枚求め申さしたし 貳匁八分是にて
下直成事御察し可被成候水張の事承知唯々かさば
り長持へ納り不申困り候事に候書物類其外いつれ
かさばり申品により又々一艘たのみ可申哉箱等も
此地にて申付候へば板下直に候先便舟廻し差出し
候一箱押附着可致候木曾道中願も相濟安堵いたし
候

一金子之義大に御世話と存候いかさま役所便之方儘
にて宜候十五圓にては餘り候程にて宜候全く用心
のため候

一裝束抄三通皇統略圖壹枚三十幅六七寸請取申候價何
程に候哉承置度候

一伊東富原野村吉見井上鈴木黒澤七通請取申候

一芝氏黒澤氏木原氏家來書三封上ヶ申候井上鈴木富
原伊東野村は跡々上可申候

二月六日

大田直次郎

島崎金次郎様

○

正月廿七日附之御狀二月八日到來二月三日附之御
狀同十一日に到來委細拜見いたし候寒暖未定兩地
平安

一長坂吉見二通伊東中神福原輪廻二枚添珍書狀落手い
たし候

一北町濕瘡段々快大久保御姉様御同前之由扱々同じ
やうなる事にて嘸々御困りと存候乍去歸府頃には
全快と被存候

一鎌太郎丈夫之由一段之事に候おとみお仲嘸々成長
と被存候

一二月十日晝より夕迄御城外の原東町奉行所水野
前にて蛙合戦有之三四十疋も死し候由評判いたし

候私は跡にて承り見不申候

一兼而申入置候金子拾五兩皆小粒にて二月十一日御
役所便にて到來儘落手いたし候先々大安塔いたし
候當時之分にては土産物等調候而も是程は入不申
候得共用心のため宜候

一被仰越候吸物椀二十人前二た通之内上の模様にて
十人にて四十二匁除也十人前十八前つゝ中にて二
十人前調へ二十人前五十七匁ほど外に五人前十二
匁ほど至而宜物有之調申候いづれ江戸よりは下直
ならんと存候切溜も庖丁も申付置候皿類茶碗類南
京新渡物下直故餘程仕込申此節多事に附右金子之
請取迄に早々申上候外々へも宜舖奉頼候以上

二月十二日

大田直次郎

島崎金次郎様

○

一暖和時候兩地平安家内無事鎌太郎丈夫親類中無別
條義と目出度被存候北町大久保濕瘡も追々平愈と
存候

一此間回船問屋筑前屋新兵衛平井母阿彌殿船便有之わ
れもの頼み遣申候入日記相添醬油樽二樽にて下し

申候三月下旬迄には大方着可申われものは長持より船之方宜由申候

武樽之内 十錦出中皿拾枚

大皿壹枚 鯉模様小皿六拾枚

茶碗十出十貳拾 土鍋天草燒 深草燒壹つ

右之通有之候外小皿鯉もやう 貳拾枚は長持へ入れ

申候いづれも南京新渡にてめづらしく候甚下直也

一吸物椀盃箱切溜七人組堺庖丁浦切二本外くりむき

とし中庖丁三本調申候いづれも下直にて土産物も大體可宜存候

一此間被遣候金子十五兩にて歸府も安心に御座候歸

府候は、殘金可有之候誠之用心に宜備此度詰之同

役へ決而無心等不申候事長崎掛りへも相届置申候

當廿七日には高橋氏大方出立もはや少々之間に相

成扱々取込公私用とも書物多くいつ方へも書狀返

事不遣候天王寺樂目錄辻氏へ御見せ可被成候以上

二月二十四日 大田直次郎

島崎金次郎様

二月十九日之三十二便三月節句に成同廿六日之三

十三便六日到來寒暖不定兩地平安

一淺草鏡銘五女官圖體に落手いたしお幸吉見淨榮書狀落手

一家内無事大久保濕瘡于今直り不申由奉頼候

一倉橋河久保事承知いたし候此分に候は、川支も無

之十日朝は高橋一同着可到候左候は、十日程申送

廿一二日頃出立之積に内々町田氏申合置候木曾路

十五泊十六日目着四月七八日頃歸着可致候もはや

少々に相成取込申候乍去風邪流行も少々引直に快

御座候歸路奴僕不足に付一人下りたかり候もの増

田要助世話にてつれ歸り申候平助風病後半人と相

見候間壹人つれ可申候

一土産物等大抵調へ申候路用金も随分此間被遣候て

澤山と存候見るほともの買申度候へとも見合申

候尤此後たのみ候へば便次第出来可申此度中川公

たのみにて青貝細工机箆筒大香卓料紙硯箱五品詔

に而百八十目上箱貳十々にて出来此節揃に付代料

立替置申候大造なるものにて舟廻しに申付候口賀

事扱々氣の毒に存候坂町も笹の葉二本にては難儀

と存候扱々薄命なる人に候

一鎌太郎丈夫と樂に罷在候暇地唐木綿此方下直たるべく候品により求め歸り可申哉と存候壹端有之候は、可宜候

三月七日 大田直次郎

島崎金次郎様

一筆啓上仕候暖氣之砌御座候處益御勇健被成御座

目出度御儀奉存候隨而私儀御普請役町田喜藤太一

同道中無恙昨七日歸着仕候右之段申上度呈恐札候

恐惶謹言

四月八日 大田直次郎

成因幡守様

外各通 参人々御中

水若狹守様

参人々御中

佐備後守様

参人々御中

一筆啓上仕候暖氣罷成候處彌御安泰被成御勤仕珍

重奉存候然私儀御普請役町田喜藤太一同道中無

恙昨七日歸着仕候在勤中は彼是御世話に相成千萬

尺 願

忝奉存候右得貴意度如此御座候恐惶謹言

四月八日 大田直次郎

各通 吉田勝左衛門様

同 田坂市太郎様

同 杉浦兵左衛門様

同 高橋儀左衛門様

同 村井 喜藏様

同 久保十太夫様

一筆致啓上仕候暖氣罷成候處彌御賢勝被成御座珍重

奉存候然私儀町田喜藤太一同道中無恙昨七日歸

府仕候在勤[引繼]中は彼是御世話罷成忝奉存候可

得御意如此御座候恐惶謹言

四月八日 大田直次郎

羽田要藏様

菊名直六様

河久保和三郎様

別通

若田 喜内様

には[引繼]之字除之

猶以御留守宅にても皆々様御替り被成候御様子

尺 願

一斧七本金はいかゞ成行候哉よもやあのまゝには濟
申まじく當人身分之事は來年御祈禱のため幾度も
ゆるし候様馬蘭へ申遣候

此事便に申來らば御消可被下候

一九州海道松之大木根からぬけ又は吹折候を見て始
而船中の大風を存候扱々危き目に相申候子々孫々
の末迄も海船などは乗らぬ事と歸府の上も舟遊山
など見るもおそろしく候船中十三日も近年めづら
しく候

一此度かほる不思議の因縁にて長之道中船中旅宿中
長崎迄毎晩く背中をもみ足のうら迄もみ申候如
此やさしきもの古今無之候此度かほるに別れ候は
手足を取られ候よりもかなしく富士野すそ野より
鬼王團三郎を返し候も此様な事かと存候扱々深切
重寶は難盡筆紙候委細來年歸府之節委曲御話可申
上候何卒吸物肴にても被成何となくかほるへ一盃
御すゝめ可被下候中々其位な事にて禮は申つくし
がたく候邊に立かゝり認め早々以上

九月廿日認

島崎金次郎様

直次郎

大田定吉殿

なをく旅中第一の重寶定丸小鍋道中重寶本町幸
作吳候尻輪に御座候是にて三百里餘の駕籠の中尻
痛ますさてく重寶なるもの有之ものにて感心致
候例のオロシヤ人にて臨時大さわぎに御座候以上

○ 俄之寒冷兩地平安此書御他見御無用極内用計申上
候作方島崎氏共番立
同断にいたし度候

一當十月家代金如何に成候哉當秋少々も御遣に候ひ
し哉定て當冬より暮へ掛けては取續六ヶ舖被存候
藏宿は借り替は致し可申候得共是は暮之方に入可
申候其上小兒は多く炭薪油等万事入用可多と存候
私錦囊之謀を殘し置き候其爲須賀屋方皆濟壹文も
出入無之候間壹と晩樂地を御呼被成來十一月歸府
迄十三經並白氏文集本朝文粹二箱之儘御預け候は
金拾兩者貸可申尤歳暮に押詰候ては悪しく此書届
次第早々御相談可被成候

一瀬戸物町嶋屋より額之殘金勘定濟候哉是等之事承
度候

一出立之日芝氏へ本包封じ鈴木門三郎殿へ届候積是

亦如何

一岩原用達へ金子拾兩相渡し置日々小遣帳用達共此
方世話無之宜候殘金貳拾壹兩貳分小玉銀八拾分計
も有之此分にて例之割金參候迄相凌き可申候道中
入用差引贈物等にて如此
右之件々追々其地よりも可申來左候ば此ヶ條御消
し可被成候何れ遠方は行き遠ひ聾の嘶し同前に候
此度便かさ高雄候故別段定吉え不申遣候宜奉願上
候以上

九月十九日

嶋崎金次郎様

大田直次郎

大坂便之沙汰有之に付認置

薄寒之節兩地平安此地奴僕迄無恙 生形三郎右衛門大
川貞八毎日見舞候
深切

一易御讀之由一段之事に候古注疏能々御覽候て朱子
之注に御引合御覽可被成候程子は別に理屈を云ひ
候間面白くは候得共朱子とは別に御座候熊坂など
か致し候書は却て惑の種と存候大概に御流覽可然
候東涯之易之注よく御座候由板本に有之未見候十

三經樂地え冬中預け候事嶋崎え申遣候得共易計は
引ぬき貸可申候

一於冬乳いかか惣領に一旦出し候乳故凝りさへ解け
候へば出可申候追而三醫清醫の説承り可申上候乳
母も能き人物無き者にて候間能くく御案し可被
成候

一金谷氏より南朝雜錄百和香借りに參候由承知に候
但中川公などは格別其外は留守にて知れ兼候と申
て書不借人の戒可然候

一近藤重藏え北齋書五拾三次摺物壹帖屋代氏え 年去
善光寺縁起三册稿檢校取次に松浦公え曲宴抄古
の謠のやうなもの一帙二十卷カ
御催促御取返し置き可然候稿より參居り候奉湊浪
語寫し置き可被下候

一十九日會之儀承知いたし候是は下町其外舊知己之
縁を繋置候のみにていかやうにても宜敷候十四日
詩會何卒井子瓊鈴猶人中村文智君などかし座舖の
つもりにて出席いたされ候様私御頼申上候由頼入
候福原兄弟湯原犬塚などへも御談可被下候近日來
年中宿題出し上可申候且文題も出し置可申候當十

二月は十日頃納會に可被成候十日宿題歳抄放歌七古絶 爲谷會稿跋文

右出來次第御見せ可被成候會前に直し置可申外々えも御配り可被成候

一奇書奇器色々出申候閉目で二十一史建立之外無他事候押附相分可申候若當年分り不申候得ば當冬唐便に來年持參候様申遣候由に候甚廉也

一漁童樵夫事御尤之事に候折々寛猛相濟も宜敷候唯々我に使はるゝ彼が愚を憐むべき事に候是にて旅館之羅漢達の事御察可被下候迎も役に立やうと思うてはむづかしく偏袒右肩も有之坐睡も有之其中に重藏尊者計は餘程德行圓滿にて五百羅漢之中でも立て居る方に御座候長丹尊者などは餘程面白きものにて至上に吉力功上々吉之痴に御座候乍去氣づかひ無之安心なものに候萬々後便と早々以上

一 お多其外え宜頼入候およね殿え申入候鎌太郎嘸々御世話と存候小兒も出來取込候間先年の粟餅の丸吞等無之様御頼申上候早々以上

十月十二日 同 直次郎

大田定吉殿

○ 薄寒に候兩地平安

一九月七日附之書十月四日着以後癩信不至候御用狀を十月十三日に相届候宅狀大方一兩日中には相届可申候日限延引ゆへ御用狀之節後れ候儀と存候

一北町二軒大久保清水えも宜頼入候此方家來いづれも達者によく勤申候何も不自由無之却而歸宅候ば不自由にて困り可申候

一 お冬乳之事官醫小川文菴え相談候處よく鯉をたべ候がよく候由一切鹽からもれのたべ事候あしく候とかくうまくなき淡白のものたべ候が宜候由申候此度參り居候唐醫胡兆新え相談いたさせ候處別紙之通樂方書附くれ申候めづらしきもの故胡兆新直筆之まゝ進上いたし候間御藏し置可被成候よくよく醫者の文盲でなき男に御見せ被成御用ひ被成候て可然候文菴子はよろしくかるべきと申候一體和らかなる療治ゆへよろしく候二七の日は長崎崇福寺え出て日本人之療治いたし右療治請候に藥をもり候事無之此別紙之通り樂方を書あたへ申候是唐にての療治は皆々如此の事の由日本の醫者の藥箱

の便利なるを見て感心いたし候由に候此胡兆新療治之樂方七冊もはや奥原重藏に寫させ申候餘程奇方有之由に候

一唐本類十帙めづらしきもの會所よりかりよせ候て夕方書拔申候色々奇書見つくしがたく候近來新著之書めづらしきもの御座候下直なる分は調もいたし申候唐本には飽腹いたし候抄書二三册出來申候

一寒夜小用に度々起不申腹中和らぎ候樂とて古き大風呂敷やうのもの熱湯にひたしよくまぼり候て晝壹度夜ねる前に壹度腰より横腹をむし申候腰を五度計りさて腹の臍の方より二度ほどあたゝめそれより手拭をあつくまぼり候て顔をなでふき候て臥り申候着物は帯をときていたし候けしからぬあたたまりにて夜中ふせり候によろしく候尤右の風呂敷やうのものは二つにてとりかへゝあつ湯にひたしまぼり候がよろしく候是は男女に限らず腰のひへ候候是も會所の役人の悴の傳にて夜中わざゝ悴參り尻をあたゝめくれ候其後も丹次長藏其傳をうけ候て毎日ゝ右之通にいたしくれ申候扱々長崎ものも大坂ものと同じく和らかにて深切なる事人

のはなしとは相違いたし候童子などおとなしく喧嘩など一切いたし不申候役やしきへ參候乙名二人隔日に相つめ申候いづれも和歌をよみ書畫を好み風流にてめづらしき書畫ども掛物持參見せ申候江戸ものゝごとき不風雅不沙汰ものは一切無之候日本はいづれ西よりひらける國と今更初て心附申候一奥原寫物日夜出精にてよく候何か妻方より手紙參候處住居之事に付苦勞有之候様子に候子息など定て苦勞いたし候事と存候どうぞ無事にいたし度候事

一市川氏より書狀參候處今日は取込別書遣不申宜く相頼申候右唐醫之事御はなし可被成候

一當地之人物は十千亭錦江真顔なと、申風に御座候西川のやうにて氣のきゝたるものも御座候浪花よりは亦々さとき方にて候得共一體温潤游惰にて柳長批杷丸米人など、申様なものは一切無之候氣の長き事浪花に似申候

一味噲壹樽入置候所江戸味噲同前にて至てよろしく浪花より赤みそ壹樽船廻しなどは大笑に御座候且揚場三河屋より世話にて新川のものより江戸酒壹

樽廻し申候私酒は少々つゝ見合罷在候に付いまだ口明不申候道中酒を過し候故此地着後相休み居候節儉よほど違ひ申候養生も此上なく候

一十月望夜月色よろしく候に付赤壁の遊存出し井上鈴木え詩を寄申候詩文共多く御座候後便可入御覽候早々以上

十月十六日 直次郎 定吉殿

九月廿七日附同月六日附之書一度に十月晦日着慰遙懷候兩地平安目出度存候海陸無恙長崎着之儀

九月十五日 九月廿六日 着之三書にて御承知之山乳母九月廿八日引越候由無々何かと御勞煩に奉存候右取込にて郷信も中絶候事に存候

一先達而入御覽候胡兆新藥方之内に有之候七星猪蹄此方にて手に入候間干し堅め別便に遣し可申候當人無沙汰煎しにて御用可被成候

一詩會易會有之文粹盛衰記等御一覽之由 盛衰記書抜キニ有之御引合ニ御覽可被成候古言モ有之候 朱易衍義宜かるべく候いつれ易は朱子本義よろし

一藥物奇品奇石も一通集め申候樂種目利のもの予か書を乞ふによりて集申候

一此地之ものいづれも予か詩歌を渴望いたし候唯今迄所持いたし居候ものも偽物多く候此度鑑定致候

一泰西輿地圖説 六册 浴海異聞 殘り 魯西亞志共浪花便植木彌三郎より十一月初相達致落手候不思議成時在動にて亦々魯西亞の一件沿海異聞壹冊出來可申候

歸府可入御覽候色々奇談追々可申入候 一石川五郎兵衛事病氣如何桑名え泊り候節承候得ば四五日前此驛に宿病後勞甚く候様に申行遣ひ致し歸宅いかい御爲知被下候

一嶋屋次兵衛九月中旬より大病之由如何御序に御聞可被下候斯人病氣故江戸劇場番附其外流行之繪等遣し不申扱々遺憾に候重便顔見世劇場番附 福輪給此地未 知可被遣候以上

浪花より出候絹袖一反麻一反早速届きの由承知致候

十一月六日 杏花園 大田定吉殿

き由觀海先師も被申候き 一内田持參之織物の中七七八は空の字なるべく候空と草書にも認め申候めづらしき物也定て高價

一御作一覽栗熟詩獻衆賓衆之字三重韻には平に有之候得共仄歟と覺申候猶御訂可被成候晨起後聯崖菊臨空發 此二字 客至 碎光イカ 右之外無所議候別て栗熟の作可宜候稚子は鎌孫と被存候

一狂歌數首面白く候乍去我も是故に流汚名候事故無益之事と本歌をば詠覺候が宜候旅行などは和歌よろしく候

一此間福濟寺聖福寺等の唐寺 唐人建立 一覽いたし候處一體堂の造よりして唐畫の加く門の榜額に龍の彫物のふち書は木庵即非(金剛寺額思出候き)等堂門とも一々に聯有之門前の石欄石基等日本のやうには思はれず是計は三都に無之驚目申候三百里外を經候一得は是計と存候

唐通事 彭城仁左衛門 來見唐話の事など承候東都にて得候譯家必備莊嶽唐話見せ候處是通詞之初學に讀候書のよし段々譯文いたし候

兩地平安 此地寒暖不順朝夕如磁手に候

十月十六日附之尺素十一月十日來慰渴望候此方より出候書追々到着と存候蝦夷草子二卷小田文藏より深切にかしこされ候處是は不殘沿海異聞に有之候而遼東之家には候得共深切之處よく吉見え御謝可被下候

一芝氏にて拙者病氣之事御聞の由無益之遙想と存候而是迄不申遣候き實は小倉上陸より寒熱強く佐賀邊にては甚敷候故 飯田町か 三河屋大きに驚き幸三官醫從行いたし候間小川文菴を迎來診脈候處一時之感冒にては無之至而六ヶ舖申し九月十日長崎興

疾に而直に臥床に入漸く九月末に快候得共腹中和し不申候處村上氏 會所役人 傳にて腰を暖め快なり十月十八日出勤只今は全快候得共過酒を禁せられ却而養生には宜候かほるをも口を止め置候間發覺いたすましく候扱々深切なる男にて夜々足をもみ申候依之九州道中は如夢覺申候日々人夫之駕籠にて難儀致候き乍去當時は全快故御案し被成まじく候出勤之上魯西亞の事上裁の無之内大小之事共紛擾日々勞簿書候

一此度天幸也官醫從行別て小川氏は堀口彌右衛門本
 意醫業出精此度此人の藥百三十服餘服申候尤人參
 附子入り候藥にて御座候先日藥禮五百疋遣し申候
 一病中胡兆新に見せ候ば可宜なと申もの有之候間源
 平盛衰記小松内府の例を引て斷申候病中之豪氣是
 計は自讃に候き婦人は格別官吏之身として異國之
 藥可服事には有之まじく相斷申候鈴文などへ御咄
 しの上御一笑可有候
 一風車詠物前後聯とも緻密可唱漢名之事御尋候處帝
 京景物略の中に春場と申所に出申候風車と有之候
 如暈と形狀を申候は此方の風車に似申候
 一肥後米著と申人は細川之大夫にて樋口季成など知
 己に候き俗稱米田口門ハモトと申ハモト服部仲英之門人之
 由に候
 一穴八幡庭園致一覽生郷心候
 一客館朝夕之寸暇に抄書いたし撮壤編四卷計と崎陽
 日記庭に百舌鳥の聲多候間出來申候又々瓊浦雜綴と題
 候隨筆書懸り申候古筆の賣物日々數十枚持參候内
 書畫等面白きものは求め置可申存候予所蔵扇面引
 出しの箱に有
 之林屋陳鳳占書と有之候東坡承天夜遊と記申候

陳鳳占書の春夜宴桃李園序一幅琉球人とも可申揚
 晉か牧童圖此童鎌太郎ニ似
 申候間求メ置候其外月樵野の岡高玄岱
 書なども有之求め得申候即非木菴道榮杯と満目申
 候客居の一樂此事に候與原生書は達者にて段々筆
 料にて寫させ申候歸府之節車に載せ不勝と一笑い
 たし歸府迄には餘程書畫入手可申候廿一史之大願
 未果是非來春迄には相分り可申候
 一須賀屋卦引本二三冊つゝにてもほしく來春交代之
 節にても其外便にても可被遣候 草々不一
 霜月十七日 杏花園
 鯉村足下
 兩地平安
 十月十六日出之御狀十一月十日來拜見いたし病氣
 之事御尋もはや全快去月十八日出勤如平日御座候
 扱々九州にて難儀いたし候へども無益之案事故秘
 し置候處相知れ候由に候間定吉方へ委細申遣候三
 河屋彌平次に委細御開被成候へば難儀之譯相分り
 可申能々禮被仰可被下候
 一須賀屋方いかゞに候哉經濟之事宜頼入候此方も來

春に成候はねば例之割合入手不申候尤縁合は出來
 候由申候へとも成丈自力にて罷在候
 一奴婢とも暇出し候由御尤に候此上は乳母何とそ一
 人にて遂げ申度候
 一島や額五組にて金貳分貳朱分遣し置候不殘相返候
 儀にて御座候
 一長谷川奥原増田五二助いつれも丈夫に相勤め申候
 一出勤後日々開舖御座候朝も五つ半より出候而八つ
 時過に引申候乍去臨時之一件にて日々用事多く御
 座候大阪からは餘程繁多毎日〳〵初めて見候事取扱
 申候一體荒物屋と申見世にて御代官所之外一切之
 商人産業米金出入唐紅毛事其上にヲロシヤ迄參候
 而大取込めづらしき事共見申中々江戸にて考候様
 なる事にては無之候
 一此後も書狀は大方正月に着可申何分家事之事御頼
 申候早々以上
 十一月十七日 大田直次郎
 島崎金次郎様
 大久保清水北町二軒へ宜頼入申候

癸卯兩地平安
 十月廿五日附之第四便十一月十九日着慰遙想候十
 月十九日は夷曲會賑之由狂詠一見いたし短日繁用
 一向無寸暇奇書奇畫に日々驚目申候東坡醉翁亭墨
 本雪山山人梯本人丸の歌等入手申候國姓書も有之候
 是を求め可申と存候
 一別紙秘物上申候人物之畫計御寫追而御返し可被下
 候
 一十一月十八日初而梅ヶ崎と申所へ昨十七日ヲロシ
 ヤ人十九上陸に付爲檢使罷越終日荷物を藏え運ひ
 入候を見申候使節レサノツト逢申候通詞名村多
 吉耶大
 田直次郎さまと申候へば使節も大田直次郎と申て
 うなづき右の手を出し此方の右の手を握り申候是
 初見の禮也夫より部屋へ通り椅子によりかゝり此
 方手附山田吉左衛門と同く椅子により居候ば通詞
 を以て對談幸太夫事よく覺へ居候夫より假屋中を
 見廻り奇器を見申候善畫者有之繪を見せ申候書を
 も一冊見申候南アメリカ國嶋々岡人物草木鳥獸船
 等の圖有之所々心覺に書ぬき申候カムシカットの
 漉も有之大きな漉と見へ申候今日も唐船一艘着

大取込早々以上
扱々好奇者は必奇事に逢ふ事と生涯之大幸大愉快
之至にて病氣も何も平癒いたし候呵々

十一月廿三日
大田定吉殿
杏花園

此地一寒一暖兩地平安

一十月廿六日附之第四便御細書披見大久保清水北町
二軒孫等相替事無之大慶いたし候乳母も居馴候事
と存候奴婢とも暇被遣候よし寒氣に向ひ窺下之事
御世話御苦勞と存候

一須賀屋へ御談候處尤承知暮候方故兩三度之積に御
相談之旨承知いたし候

一十月御切米細密御書附借り返し金拾壹兩と拾壹匁
貳分五厘御請取内金拾兩長谷部氏へ御持參殘金五
兩は十二月渡候積御談之由安堵致候當暮者定而六
ヶ舖可有之被存候何分宜御取計可被下候此方ヲロ
シヤ一件御下知濟不申未た交代濟不申候内は何か
願々舖御座候早く一件相濟候様に存候右交代等濟
成瀬公並同役も返り候へはいかやうとも致よく御

又十里程沖手に唐船二艘入津一艘は天草の方へ風
にあひ候かと遠見番之者届出候而大取込扱々冬至
にめづらしき事を見候事と獨笑いたし候生涯之願
遂げ候奇事來冬めせたく歸府色々御話可申上候早
々以上
諺に雨ふりて地堅ると申候ごとく旅中醫者も大酒
を止られ養生いたし身の爲には甚宜舖御入用も餘
程儉約にあたり申候呵々

十一月廿二日
島崎金次郎様
杏花園

十一月六日附之第五便同廿九日相達此節甚寒に候
へ共兩地平安

一先便被仰下候通り樂地堂之方調達候哉無々當歲暮
は御心配と存候此方當年は先有合にて濟可申存候
間今便金〇〇差立候此内にて大久保清水兩姉君へ
歲暮之御祝儀一片つゝ御遣可被下候奴婢共いづれ
も丈夫に皆勤安堵いたし候
一奥原も寫物爲致都合に而筆料遣し小遣之足にもい
たさせ申候是も淺草へ置候妻之方も店賃之事申越

座候間歲暮之所何分頼入申候猶後便可申上候
一鳥やの額うれ不申候由尤金子半金之餘大阪に拂置
候間残りはいつにても宜候此方奴婢共無病にて皆
勤いたし私儀ももはや全快食事すゝみ過候而困り
申候扱々九州路にては難儀いたし飯田町かほる世
話にて小川文菴治療宜十月十八日を出勤いたし候
尤氣分は始終よろしく夜分寒熱強御座候き夫故病
中も寫物等いたし補養いたし候唯今迄覺不申樂等
多く服用致候かほるへ能々御禮奉頼候小川文菴も
來春は江戸へ返られ可申候下谷三枚橋の由にて其
節者定吉にても禮に被遣可被下候扱々名醫にて深
切なる人後來頼候にも宜候唐醫胡兆新との問答甚
面白き事に御座候
お冬乳はとかく出不申哉せめて片乳にても出候へ
ば小兒のために宜候間唐醫胡兆新へ小川文菴相談
藥方並七星猪蹄幸便に遣候何も毒に成候ものに無
之候間試のため御用ひ可然候歲暮短日無々御取込
と存候此方日々出勤朝夕もせはしく候昨日も梅ヶ
崎と申所へヲロシヤ人十九人程上陸先使
節之者も上り居候荷物上り候
に付爲檢使罷越終日ヲロシヤ人の中に居候所へ又

困り候様子に候夫故給金の内金壹兩壹分程右店賃
へむけ當暮々毎月一片つゝ其地々喜太郎方へ被遣
被下候様にと申候間かはせにいたし候而も宜候是
又當暮其地もむつかしく可有之候間此内にて御引
跡は小遣へ御入可被成候北町清水なども無々米價
に六ヶ舖と存候小川町おば様もいかゞに候哉一々
手といき不申候

一來春同役松田交代之節は少々金子下し候様にいた
し可申候當冬唐船七艘入津に付來春之元代にて藥
種買拂之仕來りに候前借出來可申候乍去あまり船
數多く繁昌過候而米直段之安きと同一在勤之勝手
にはあしく候由慾に目のなき男とも申候萬々月迫
來陽愛度可得貴意候早々以上

十二月五日
嶋崎金次郎様
直二郎

十一月六日附之書同廿九日來甚寒之節に成候處兩
地平安兒女とも生長と遠察致候乳母も居馴候哉
一北町二軒清水大久保無替事愛度存候
一堀檢被狀御届歸路狂歌堂へも御出のよし大屋のう

ちとは見へ不申醫者歎山師のうちのやうに見へ候
太平の代にはかゝる事も有之と去秋驚き申候き淺
草菴へもより御立寄可被成候是は格別移居の
時の實意も有之まめやかなる方に御座候

一芝氏令息並備從まで學問詩作など出來候由隨分御
勤可被成候近隣に學友なきは不自由に候井玖鈴文
など隨分御出會可被成候不及己者を友とせず益友
を求め候方よろしく候

一鎌孫唐詩を誦し候由一段之事と一詩を覺候は併
少し宛賞し被遣可被下候定て今程は祖父の事忘れ
候哉但は覺居候哉筆硯を弄び候哉如何

一蘭奢亭かほる參候はよく旅中の様子病中之
事御尋可被成候大きに世話に成候甚實儀なる者に
て御座候狂歌師には珍敷候

一魯西亞今に御下知無之滯留いたし事多く御座候處
へ唐船壹年定額十艘之處當冬七艘着千九番同十番五
一二三四五番也
來年分半高取こし入津大取込奔走いたし貨物夥舖
候而市中は大繁昌滿悦に御座候近年に無之珍舖年
に參合候として市人共相慶し諛言如山に御座候七艘
にて五百六十人餘之清人來候間少しは書畫にても

いたし面白き人物可有之哉扱々存の外文盲なるも
のに御座候乍去人物は蕃人より至て宜く相見申候
唐人者近郊菴西川氏と言ふ人物に見へ申候魯西亞
の人物は金罇柳長顔色は眞顔と言ふ顔多く御座候
御一笑可被下候大方紅毛人に似より申候
一程赤城は祭に出候辰巳屋隱居によく似申候さて
芥子坊主は身苦しきものなり

一平定準喃爾方略と申唐本十二康熙より乾隆の近頃
まで北方の亂を静め候事を記し申候俄羅斯界の事
も有之面白く候間一覽の序に書ぬき申候其外南巡
盛典など乾隆南巡圖之事盡く記し有之是は求め候
積りに約し置候墨帖も數多見せ申候高玄岱書一枚
唐紙に書候二葉求め申見事に候

一來年開講より定日に詩會並會讀等無意續き候様に
可被致候

一井鈴二子定て繁務には有之べく候へ共宿題に相頼
白藤山本子なども御出候やうに可被成候得益多か
るべく候山本氏蓄髮宜祝儀頼入候

一重便に袖玉武鑑小本同袖珍大名附小本被遣可被下
候扱々不自由に御座候すり物新板ものなど見申度

鯉村子

副啓
一通事彭城仁左衛門劉德基
字君美詩を善くし余が崎鎮八絶
を和し清人にも和を申付置候由十一月廿九日清嘉
慶十年乙丑の時憲書(黃絹表紙)を贈る大小閏月左
のごとし曆計は賣買のものにあ
らず通事故に得候也

正小、二大、三小、四大、五小、六小、閏六小、
七大、八小、九大、十大、十一大、十二小、
凡三百八十三日
立春正月五日也

此方來年の曆と小異同有閏月も違へり扱來年歸府
には閏一月の日數延候事と今より屈指申候

一十一月廿五日には丸荷役として清商の荷物揚候立合
に新地参貨庫十二月二日には清船番船全勝號の船の荷
揚に参船中菩薩堂の中に毛氈を舖座し居申候清人
自分持用の書畫をも見申候箱類の書附全勝公司
陳國記など、有之、記と書し申候記は此主と申事に見へ
申候箱等竹器雅甚し帆柱などは畫に書るが如く船
中の柱聯紙にて張置候雲霞出海曙梅柳度江春とあ
り雅なること也

一十一月廿七日一枝の梅花を見申候一絶「紫菊凌霜

十二月四日

六日に發申候

蜀

山

候あまりかさばり不申ものは御用狀にて隨分よろ
しく候至てかさばり候は大坂銅座植木彌三郎名宛
にて町便に御出し可被成候亦是爲川辰吉名前にて
も宜く上封計被成長崎え届けられ候様口上書御添
候へばよろしく候いづれ口上書封し込可被遣候
一鳥屋御相談大阪迄出し候へば届き可申候大阪銅座
野村仲助か爲川辰吉へ添狀御遣し候へば御用便無
之ても荷物幸便色々御座候
一子拾番唐船持渡り候八哥鳥青音呼(是は新地にて
見申候八歌鳥は似鴉)丑三番船持渡候唐鳥の内竹
鶏一羽山和尚(一名松鴛鳥)一羽御役所にて一覽いた
し候高價にて無用のものにも御求め亦是は詭物も有
之年々唐鳥持渡り餌むつかしくとかく殞申候此間
も青音呼一羽當地年寄詭置候處殞申候青鸚哥も羽
毛甚見事に候き
一來年大小之山人見せ候は
ヲ四八八人十來九二持大名霜さぞ物入であらふな
と申し候江戸より來候哉未詳猶後便可申入候早々
以上

猷説橋官、已入廬陵華譜上、不須亭北倚闌干、

二句落寄字一

嘉慶甲子十月作

容門縣震隸

落字の事書き様面白く候

けふは十二月十日也わづかに四五十日へだて、清人の近作を見る事誠に太平の代の幸なるべし此一紙は北町佐々木氏非鈴二子などへも御見可被下候

吾身上已誕辰故此詩面白く寫し置候此日淺草市の如く紛々の内寫し取申候清人共一見悦ぶ體なり

十一月十六日附之御狀十二月十一日届もはや寒中兩地平安此方寒氣至てゆるく火も入不申日も多く梅花は十一月末々咲此節八重も盛にて候乍去寒暖入交り餘寒至て強き時も有之由

一須賀や一件段々御世話手紙二通迄御見せ被成當時之米價にては賑々むつかしくと被存候いづれ十三經は手放し不申候方に可被成候少々利足等損候而も宜御座候此暮さへ濟候は、來夏松田伊左衛門交代歸り候節金子頼み下し可申外に大阪に飛脚便も

有之候へ共何とやら江戸へこかし候やうにて見分悪しく候間内々松田をたのみ下し可申間夫迄の御差繰宜奉願候乍去松田歸り候は五月末に成可申候春夏二季之處むつかしくと被存候いづれにも又々工夫いたし可申候押附ヲロシヤ一件濟候て歸り候同役も有之候へば是はあまり心易くも無御座候間有體之事打明ケ頼みたく候此方はいまだ御扶持も拂不申皆々直段宜時節をまち候而用達へ預ケ置候歳暮金銀計は不足なく殘金も十六兩有之候來春に當年入津之商賣始り候へば會所より納金參候間其前にも登貫目づゝも取越候仕來り之由之處先當年は入不申候扱々金銀は不足なく候へ共日々せはしく例之異船之御下知遅々に付萬事大取込奉行二人で引繼無之兩方へ勤候様にてせはしく候早々片付仕舞申度候兩奉行方歳暮金五百疋つゝ成一家來一同丈夫にて唯今迄皆勤一和いたし丹重共節儉にて此方より朔望廿八日等肴申附候はぬ内は素食計外々々格別物入少く仲間壹人不足之處箱持入候日は一月に五六日も有之其日計一日百四十八文半日百文位にて雇申候當暮仲間へは格別に金壹

分つゝも褒美遣し可申と存候侍は隔日に休み候へ

共仲間二人は日々出つめ食焚番もせわしく候平助

五助事至而丈夫五助事毎朝〱御見へに出申候

一明日はもはや淺草市と存候處淋しき事に候歳暮の

けしき一向無之候唐船七艘之處壹艘五島にて破船

いたし候間六艘にて御座候此商賣來春に成申候予

買物等例の安直段にて買ひ申候此間荷上げを改め

丸荷役へ荷物のまゝ改候事 立合に二三度參り申候

精荷役荷物をきりほど改候事 終日反物藥種其外々見あきいたし候紫檀之大木蘇

木などは真木之如くにて御慰に一船之積高二番船

計有合候まゝ上申候反物等目を驚し申候

一寒氣之節勝手向御世話に御座候乳母事右なじみ候

哉何かと物入に遠察いたし候鎌太郎事およねに手

をはなれ不申候よし歳暮祝儀之事先日書し候まゝ

早春にても一片にても被遣可被下候お冬樂も遣し

いかゞ効驗有之哉少々にても乳出候へば勝手可宜

候

一築山國府田等御逢候て宜御頼申候築山より先達而

手紙來候處取込返事も遣し不申候短日にて取込早

々申上候此手紙は早春に届候事と存候猶後便目出

度可申上候勿々

十二月十六日

大田直二郎

嶋崎金次郎様

なほ〱十二月十五日町年寄後藤惣太郎へ江戸へ出立いたし候に付義助定吉方へ計書狀出申候へとも此書狀は四十餘日かゝり可申候間二月頃届可申候今日之狀先に届き可申候

〇

十一月廿五日附之御狀十二月十九日に達兩地平安

此間は十日め〱に書

狀能届き安心いたし候

一當暮之家事何かと御世話に存候樂地之方高息に付

淺草にて御借請廿三日に長谷部方皆濟之由帳面御

取戻し市川氏 當暮上納金之事迄委細承知いたし候

先便役所便に封じ込歳暮に届候哉と少々金子上申

候定而届候事に被存候十二月廿五日過は別休 來夏松田

歸府之節は何卒金拾圓計も上可申積に御座候

一米價下直にて賑々世上六ヶ舖可有之候唐本など下

直之由淵鑑類函などは此方之直段位と存候

一泉屋亭主茶香之事安き事に候随分有之ものにて承

合追而可申進候少々ハムきにも相成可申哉

一 奴僕共一和いたし皆働故歳暮美田へ銀三々平助五助
 は休日無之出づめ候故百疋つゝ遣候奥原増田
 は出勤日故少々減し申相當ニ可有之哉

一 當冬唐船七艘之處浦にて破船六艘に成候縮緬絹袖
 拂底に御座候 縮緬は御用方さへ不足絹袖は一反も無之縮緬
 多し縮、絹袖は幅 細絹と申もの少々渡り申候物も少く藥種計
 狭く不宜もの候由

一 へるへとわんの上品なる物羯山と申もの有之 價三
 位高料 百疋

一 めつらしき物多く見候へども商賈は來春より夏へ
 かけ有之其節ならでは買事成不申何かむつかしく
 手間のかゝり候様成事にて急の間に合不申候

一 最早當年も四五日に成候へども未だ江戸へ御沙汰
 無之交代濟不申扱々困り入申候早く片附候様いた
 し度候大方春之代りの同役此節極り候事と存候

一 當九月中勝手雜用九拾九匁六分壹厘此
 十月 貳百八匁 十一月 中 百四拾六匁 當月も金貳兩計
 は入可申先此位成事と存候外々々は入不申皆々節
 儉故と存候

一 堺町番附被遺夢のやうに存出し候扱々何も不足は
 無之候へとも外出不自由にて籠鳥の如く難儀いた
 し書物にても見不申候は、食物計給候事と存候此

節短日朝五つ時過出勤引け七ツ前に成候物三々通
 程つゝ一々熟覽餘程草臥申候 此間漸少々は覺申候會所下
 扱々大阪は障な事に候ひき

一 霜月末の梅花盛八重も大分開き此節一重は落花跋
 氣成事に候一昨廿四日少々雷雨夕立の如くにて雪
 は一向無御座候猶來陽目出度可申上候以上

十二月廿八日 大田直二郎

鳥崎金次郎様

十一月廿五日附之第七便十二月十九日相達寒中兩
 地平安北町二軒清水大久保等へ寒氣見舞別狀遣し
 不申能々御傳可被下候

一 播陽古跡便覽並俄羅斯事池北偶談より御書被下
 相分り申候池北偶談初卷に今一と處俄羅斯事有之
 康熙帝黃帳の中に御逢有之獻貢物いたし候事の
 様に覺申候いつにても御搜索可被下候

一 智廣院殿十七回忌之由年光如流覺申候

一 秋中同行之官醫三人 千賀道榮、吉田、小川文卷 此節歸府被致候
 千賀は十二月十日出立 廿五日之夜小川吉田共被參離筵
 吉田小川は廿六日出立 惜別申候正月末か二月上旬に東都に歸られ可申其

節被參候は御逢可被成候別而小川文卷殿は病中深
 切之療治にて本復いたし候間歸府之節一寸禮に御
 出可被成候 小川文卷下谷三枚橋 いづれも近く候間萬一
 病人等有之節御頼被成候はいよろしく至て學醫に
 て胡兆新をも驚し申候不思議成る縁にて小川藥治
 を請候て客中別て心易相成殊に惜別申候

一 鎌孫豐女之寫眞朝夕くり返申候豐事はろくく覺
 不申候得共鎌事覺居候によく似申候間定て豐も似
 候事と存候俄羅斯硝子鏡の畫に其子の肖像を持參
 り詠め申由夷狄も同情と存候

一 歳暮も甚靜にて御座候松は大き成松をたて申候年
 忘れも何もなく扱々寂敷くらし申候餅は先例にて
 用達方にて春かせ申候 此方四斗俵二俵御 扱一一生にめ
 づらしき餅を春申候酒も浪花より四斗樽一つ小樽
 一つ此間船にて着正月の設にいたし何も不足はな
 く候得共やはり奔走いたし候故郷之方宜覺申候先
 々七月ヨリ六ヶ月は立申候早く來秋にいたし度候
 一子九番船江泰交と申候は落第之書生にて書畫を善
 く致し候間絹地頼置申候大力にて文武ともにすぐ
 れ候へ共賄賂なくては及第出來不申由畫の文鎮に

大きな斧の頭をいたし候は武を忘れざる志の由
 夫故商賣の事にはうとく御座候和漢共に可嘆々々

一 先日申上候山水畫帖小帖 申込置候處春に成候ば手
 に入可申下直なる事に可有之候徳源散人程 此節取込
 燈下早々走筆申候猶來陽可申入候以上

十二月廿六日夜 杏花園

定吉殿

十二月五日御認候第八便之書大晦日に相達兩地平
 安兒孫親眷無恙幸甚々々

一 改年之書狀諸所え相認め當二日便に池永内藤へ頼
 遣申候是より直に奉行衆吟味役組頭衆へは配り申
 候右之書狀にて取込候處急に宿便出候間宅狀並親
 類中え略狀元旦大醉中に認め候間文字等無心元と
 存候右之段御咄御一笑可被下候

一 第七便に書狀往返日限委御認め此方にて往返帳
 に記し置申候十一月十日より十日目く大體相達
 慰遙懷候正月御用狀日限も違候間延着も可有之存
 候

一 草雙紙等大阪便にて可被道旨相樂申候戲場やくら

下三枚宛は四ヶ所程より到來人々へ遣し申候番附は島崎より参り候て見申候扱々何にても東都之板行物等見申度存候

一正月之内は少々閑暇にて出勤直に引取候間四日に近所聖堂神明唐寺等参詣六日には舟行飽之浦と申候所より山をこへ大村領の内福田浦之巖洞を見に参申候山中梅花開落巖石に岩ひば等有之絶景に候濱邊の景もよろしく一農家にて行厨飲酒亦々舟を命じ海岸を回り候向ふ方には硫黄島古本平家物語に有之後實備し薩摩にはあらず五島など見え申候波濤如山千帆如畫洞中へ屋根ある船と供船式艘こぎ入れ一町計入申候左え曲りし所より眞暗に成候間早々出申候洞の大きは是にて御察し可被成候入口高さ五六間はいは三四間にて御座候江島など、違ひ歩行にては入がたく船にて入候事に御座候詩作別紙に記申候眞に絶境にて候七日は秋葉山より山越に蒙茸たる草むらを攀上り烽火山上り申候至て高山にてめぐりの山々ひく、見へ海上に五島天草島々見へ申候長崎之町は眼下に見下し申候寛永年中には烽火臺置られ候由遺址有之候夫より山を下り七面山へ参

り別當高岳院にて酒食を開き薄暮歸酔いたし候七面には加藤清正大明神勸請いたし有之法華宗歟と相見申候八日には諏訪社松森天神妙見社など、巡行いたし山水遊覽は無殘所飽満いたし候へとも村童などを見るごとに鎌孫存出し候て頻に動歸心申候乍去もはや當年中と存候得ば格別前期も近き心いたし候
一東海堂早文十一月廿七日没故之由可惜事に候五老子は快復當日にも被參候由能々御傳言可被下候一年始狀所々にて中々一日には遣がたく存候其中に久世大和守殿林大學頭殿へは遣申度差遣申候御序に御届可被下候堀田豊前守殿へも遣し申度所用人之名も存不申是は吉見へ御對談文言いかやうにても宜候間代筆にて成とも被遣可被下候正月二日三日附にていつにても宜く御座候林家へは鈴木白藤へ御頼可被成候此外同友中へは年始狀遣不申候間御序に能々被仰聞可被下候
一此度魯西亞船渡來御用にて御目附遠山金四郎殿御出之由に候是は聖堂御褒賞之節も逢候人にて御座候右に付當時私居候住宅御目附住居に相成候間岩

原同役並御普請役共大方寺院之中へ移居いたし可申扱々大取込と奉存候御徒目附原田寛藏も知己にて宜候

一家僕いづれも皆勤大慶いたし候正月は挾箱持壹人宛松之内雇候而濟申候僕は壹人にも少き方取扱いたしよく存候猶重便に申入候以上
正月十二日 直二郎

外に箱入にて此封之内といいたし大阪便に出申候 定吉殿

二白今十二日彌日蓮宗本運寺塔頭大乘院二人に一乘院一人本光院御普請役之積に相成候來十七日頃引移申候私は大乗院之方にて海上見はらしも有之扱々遷喬の遷の字識をなし申候阿々

發時甚寒到時春色兩地平安
一十一月十五日書十九日發にて十二月十一日に相達申候此返書は當年中之驛便に附し候ば正月月中旬頃には届可申此書は當十五日紅毛獻上物差副之年寄後藤惣太郎へ託し候間道中四十日餘もかゝり東都へ參可申候間正月下旬歟二月初には届可申夫故番

外にいたし置候此書狀より跡に差立候狀先になり可申哉も難計候

一生形三郎右衛門道中にては度々逢申候が此地え參候ては却て出合不致候とかく彼此ともに入らむつかしく禁足と心得能在候此届物大久保へ届けくれ候様相頼候間遣し候幸便にたのみ入候隨分丈夫に相見え申候神原氏へ別段書狀不遣候間是亦よろしく頼入候取込いつ方へも無沙汰いたし候段仰聞けられ可被下候

一春來佳興可有之候此方當時歳暮年忘れも何も無之吏事と奇書のみに消日申候鎌太郎阿豊とも丈夫に候哉嘸々成身いたし候事と存候およね殿嘸々世話と存候宜頼入候

一幸便にまかせ初春之祝儀金百疋宛遣し候お冬へもよく御傳可被下候此方經濟は隨分宜舖歸府之上借金等拂可申品により松田氏歸府之節頼少々は下し可申候彙中に苦無之計は遠國御用之一徳に御座候

一早梅其外佳作面白御座候閑暇之節和し可申候
一唐山綴物亦是藥種等之包紙雅なるもの故此間精荷

役出役之節唐山荷物唐人五六立合もらび置候まゝ御人徳改いたし候事 慰に上申候外に長崎書少々鎌太郎へ遣候

一霜月下旬より當月に入所々早梅盛に御座候八重も漸開申候扱々年光如流覺申候早く熟梅の時をも過し再ひ菊花を見申度候好奇の癖も奇物にあき果候間爲谷之一隠吏とにさしこし讀書小酌をたのしみ申度候山水も奇書畫も最早左のみに存不申候本膳後の吸物をみる如く胸につかへ申候猶後便可申入候早々以上

十二月十二日

杏花園

鯉村几下

猶々東海道中勢州四日市にてもらい申候書本御慰に入御覽候よほとおかしく書き申候以上

十二月五日附之御狀十二月晦日來其節は寒中兩地平安親類一同家内小兒いづれも壯健珍重に候

一上納金御世話に候是は芝氏計頼にて宜候きいづれも濟候事故宜候池永方も能々申候様申來候

一去暮御目附遠山金四郎殿被仰付候由にて當時岩原御役宅は御目附住居御徒目附御小人目附共同長屋

て宜く御座候猶後便委しく申上候今日も早朝方役所へ出又々銅藏の封開新地迄十四五町参り又々寺地見分八町計歸宅後寄合大阪狀江戸狀等認め大草臥早々申上候以上

正月十二日

大田直二郎

島崎金次郎様

第八便之書十二月晦日來候儀は此間大阪便に差立候正月十三日出之狀に申遣候此地春來暖氣候得共兩地平安二孫家内無恙北町清水大久保へもよくよく頼入候

一御目附御發駕日限未だ相知不申候得共岩原役屋舖修復のため同役御普請役とも不殘引拂明十七日彌本蓮寺岩原郷之内塔頭大乘院表ノ方大田仕切竈を別ち候て引移申候人夫も私共壹人に拾人宛出申六七町も西之方へ移り高みにて眺望宜舖御座候僧徒は持佛を引候て本寺へ参り明渡に御座候唯今迄居り候所よりは大に狭く候へども中々氣を轉じ候而宜候乍去一刻も早く御用相濟同役交代濟候様にいたし度松田之代りは大方もはや可被仰付候

住にて明渡し候に付急に修復申附本蓮寺と申候谷中瑞輪寺位之寺の塔頭大乘院へ當十七日頃移轉いたし扱々大取込御察し可被下候乍去不思議に同宗之寺院へ引移候事自徳院様杯御存生候は、嘸々御悦ひと被存候右之寺に今日見分普請方にて所々修復いたさせ佛壇も和尚も本寺へ引取明渡し申候扱々めづらしき事に御座候去春は牛込爲谷へ引越當春は岩原本蓮寺中へ引越申候乍去至て高みにて海上五島琉黄島邊迄見はらし唐船ヲロシヤ船目下に見候事御旗曼茶羅も入可申と獨笑いたし候門前は濱邊にて魚市有之岩原可宜候へとも和尚之樂を失ひ可申と大笑に御座候

一舊臘經濟は嘸々六ヶ舖可有之候と遠察いたし候十二月六日便之節金子少々封し込上申候定て晦日前に届可申哉當春に成候哉と存居申候

一當地も御目附御出は近例天明六午年寛政三亥年御改正之節のまゝにて大騒き兩奉行衆も家來らあり悦氣には無之申當四月五月頃迄に濟候へば可宜候へとも何かにつけて六ヶ舖可有之候誠に此節之取込難盡筆紙候乍去病後壯健家來いづれも皆勤に

一大阪便に近作等遣申候亦々少々認め上申候一春來いまだ便無之松田村田は去九日江戸御用狀便に宅狀參申候き此度之宅狀は繪草子にても入かさばり跡に成候哉と被存候芭蕉翁が「蓬萊にきかばやいせの初便」と申候も體認いたし猶後便と早々以上

正月十六日

直二郎

定吉殿

猶々舊冬銀之介殿よりいで楊枝澤山被下扱々重寶いたし候よく御序に禮頼上候取込別段不申遣候被仰下候唐人畫之事承知之旨可被仰遣候以上

尺牘第三

長崎よりの來狀

正月十八日附之書狀差立候處右夕方に十二月十六日附之書狀第九便到來亦々廿二日に十二月廿五日附之書狀飛來當年之初便連綿相届兩地平安目出度存候此方相替候事無之

一當月十七日に岩原郷之内本蓮寺中大乘院へ引移申候覺替其外勝手向等覺建具湯殿迄市中入用也出來跡は僧徒え被下其外にも銀子にても可被下候間當時追立られ候は可爲難儀候得共一體貧院大破に及候處清潔相成候て僧徒は可爲滿悅此方も少々之功徳にも可相成候但表門より公然として香を買入候は少々氣之毒に候折々幸便も有之候て自由軒にて宴會いたし候心持に御座候呵々

一先便上候俄羅人圖之秘物早速御寫取御返却儘に落手いたし候
一七星猪蹄相届候て専ら藥用之由効驗之程如何に候哉
一高雄山鏡銘本町より届候山

右者第九便返書

一菊池角右衛門殿より醫林蒙求序之事申來候由承知いたし候近便遣可申候
一抄書之命題之事承知いたし候是亦後便可申進候
一吉見弟子山木氏拙者門人之積書上置候處御褒美銀被下候由重疊之事に候是は吉見え此方より可申遣候

右第十便返書

正月廿二日認置

杏花園

定吉殿

第九便 定吉殿封

島崎登封 馬蘭亭二封

佐々木登封 御沙汰書共

新樂登封 お冬一 お幸一 お香一

井上佐左衛門登封 吉見登封

第十便 定吉殿封

島崎登封 吉見登封 門人御褒美之事

歳暮併春之事經濟 目出度候強飯珍敷

何かと御世話に存候 箸紙參候

香子登封

鈴文登封原田氏書狀儘に請取申候

祕書附入

中村與三郎より一封 久世大和守殿使之事 芝爲次郎一封

右之書狀共儘に請取申候兩三日別て大取込熟覽之上後便返書遣可申候

一定會狂歌點之儀承知之旨馬蘭へよく被仰可被下候何れにしても四五日前引越大工來候て修理最中御用向取込勿々

一遠山氏廿日頃出立之山二月末迄には御出と被存候左候得ば萬事相濟可中原田氏も知己にてよろしく杯樂罷在候何も後便と早々以上

正月廿三日 直次郎 定吉殿

二白此方より十二月未正月初め差上候書狀追々相届可申候

十二月十三日之番外大坂便正月廿八日延着子十二月十六日出第九便正月十八日來子十二月廿五日附第十便正月廿二日來前後に相成候遠き書目も一見此中にて古渡唐本古今議論參は奇書にて殊に人の贈り候書故手放し不申候尤追々島崎より申越候趣

にては先典物にいたし候にも及申ましくや如何々々卦本五冊落手いたし候

一新刻繪草子十五冊福助書三葉落手江戸之光景存出し候扱々去年より繪草子高價にて定而うれかね可申と存候大方敵討之世界殺伐之風損春色候事に候

一春來勿邊漸居を安じ候風景は誠に奇勝に候得共非吾土之嘆有之候此間之奇事は二月二日唐館内にて例年之土地神祭有之唐人共狂言を致候其日八つ時

參り一見致候あらまし別紙入候然し同友其外吉見氏えも御見せ可被成候是は俄羅斯事と違ひ何方へみせ候てもよろしく候扱々一大奇事に候

一正月廿一日頃浦上村邊郊行いたし候處正月初より野邊は一面之菜花盛にて廿日過よりは山吹咲此節

緋桃咲申候櫻も早く可有之隣之躑躅紫花開申候何か仙境の如く年華移り暖氣は三月末のごとく寒中無雪無氷此分にては餘寒も不足畏候得共毒熱可恐事に候

一近作如何諸子之春興見申度候押附觀察使來候は亦々大取込に存候
一醫林蒙求序漸構思候間今便遣候宜く頼候尤點竄い

たし候て宜所は直し可申候旨無遠慮申越候様御傳
可被下候以上

二月四日

杏花園

定吉殿

今日は本蓮寺にて涅槃像を見申候奇々

正月六日附之第十一便同十六日附之第十二便仲春
十日に一度に相達慰遙候漸春暖相成候
兩地平安

一 正月之天氣御記し浪花よりも元日より六日迄之天
氣記し來候奇事に付左に記す

長崎元日快晴 二日晴 三日雨夜戌刻過雷鳴 四日陰

五日陰 六日晴北風

大坂元日快晴 二日快晴 三日陰夜半より雨夜半より甚し

四日前夜より雨五日陰 六日快晴風佐伯氏より來

江戸元日晴 二日晴 三日陰 夜八時半地震 四日雨

五日晴 六日晴

五雜俎天部に十里不同風。百里不同雨。と歎有之
候様に覺申候重便風雨の字御正し可被仰下候奇々

一 二月十月初櫻咲申候一重咲の様也桃花紫躑躅等も

此節盛なり牡丹も含芽申候鼠山之作舊遊を存出し
候卦形蛙中の形
字平聲更思

一 唐密胡兆新當春歸國 光緒三枚計り遣し詩を書せ
申候書はことの外見事也紛々商賈の輩にあらず左
に記す

甲子初秋於崎陽旅館雨後聞蟬有感之作

一 雨生涼思、羈人感歲華、蟬聲初到樹、客夢不
離家、海北人情異、江南一路賒、故園鬼女在、
夜夜卜燈花、

蘇門胡兆新

人說洋中好、我亦試輕游、掛帆初意穩、風急繁

心愛、漸漸離山遠、滔滔逐浪流、不堪回憶想、

鄉思滿腔愁、

在乍揚帆離山試筆爲南畝先生雅正

蘇門胡兆新

一 江泰交 號藤園 落第生之由書畫妙也絹地に蘭を頼申
候山水も頼置候先日銀之助より書かき候唐人の事
頼來候間扇面にても書せ可申御逢も候ば宜頼入候
別牙枝を贈られ于今重寶いたし候

一 館内之清人とも予か名をまゝり譯司より一と通り頼

み候ても至て念を入れ認め申候爲谷十詠崎鎮八絶
等遣し和をとり候積りに御座候庚通事頼川仁十郎
彭城仁左衛門柳屋新兵衛など至て懇意に成候間色
々彼地の事承り可申と存候

一 白藤より八股の事尋候様申來候右譯司を以て承り
追て可申上候地理之書の事御世話に候いづれ奥原
に命じ寫させ申候白藤子へ約の詩遣候和作は跡よ
り上可申候取込候間其儀不能候とよく御傳え
可被下候

一 十四日開講律詩二十餘首出來候由盛事と存候後便
見申度近作の内平仄正しき分少々淨寫可被遣候清
人に見せ可申候

一 年始帳一覽藤井順七郎は本所のものなり聖堂學問
吟味之頃聖堂え出役寛政八辰年四月支配勘定に成
り予より八箇月之兄也靜なる人にて御座候御普請
役上條源次郎も學者之由相樂居申候

一 今日なと春晴海上島嶼及山々之景色如畫中之信美
非吾土之嘆計也出帆唐船六艘浮海上亦々夏は參申
候

一 監察使も二月五日浪棧着同九日發途に候へば十二

日頃室津乘船當地え被來候は廿六七日の事と相見
る申候吏事紛々可想像候

一 肥田豐州此頃和歌を見せられ候間書ぬき入御覽候
(馬蘭亭吉見氏へもみすべし)豐州激務の暇和歌を
好まれ候事感心いたし候横田泰翁門人也

一 唐本商賣はいまだ始り不申三月に入可申候由書目
入用のものたのみ置候端物瀬戸物小間物類明日よ
り始り申候竹のほりもの山水筆立餘程妙工に候間
求め遣可申候新渡の唐本之内に琉球國志略めづら
しきものにて當時内々かり一覽いたし居申候春明
夢餘錄明代ノコトヲ寸珍本珍らしきもの大方御用之
方に引上られ可申候其間何れ半年計は會所に預置
候間随分一覽出來申候三月の頃唐本入札濟候は
奇書も手に入可申早々以上

二月十五日

直次郎

定吉殿

十二月十六日發之御書正月十八日達し十二月廿五
日出之御狀正月廿二日來審近狀候其節は寒冷此節
春暖兩地平安候様無恙相應之儀有之御座候由先

御安堵に候

一歳暮經濟も先相濟可申と存候何かと御世話辱く御座候此方も不自由無之いまだ持參之物遣切り不申會所へも申遣し不申候間此間はあの方御用は無之哉と催促いたし候もはや春商も始り候間求め物少々いたし可申處又々當夏商も有之絹紬少く高料六十目位之山縮絹紬多く候へども不宣候縮緬は御用之方さへ調進無之大廣と申て高直なり幅廣き計有之市川氏御頼ゆへ先夫にても可致哉と存候いつれ絹紬は五六反も調可申候安きものは瀬戸物計反物はとかく高價に御座候唐繻子など三兩位にてたれも求め候もの無之候毛氈之事被仰下是又思ひの外高く候へとも黄色毛氈青毛氈等たのみ置候乍去かさばり候もの故便に遣しがたく當冬持歸り候方丈夫に候難は大坂へ申遣し當正月十日過に船廻し出候由野村仲助申來候間大方届き可申土産物はとかく瀬戸物安く候由御普請役など申合例之水張いたし春夏之間に醬油樽にて江戸へ廻候積に候唐棧留一向渡り不申候拂物出候は、

一古堺之狀與原へ遣し候先便申上候古堺母の店賃の

事いかゝに候哉與原もとかく濫團扇の風に困り申候筆耕出精候ても持に追付神有之氣の毒に候平助へ三袋之傳言申聞候随分まめに候

一地代金十二月廿四日納濟餅も相應に有之由此方にては餅あまり青くかび申候火事沙汰もあまり無之由御同慶に候猶重便に可申上候已上

二月四日 初午なれと甚靜なり

直次郎

金次郎様

尙々當月二十日頃は御目付も可來原田定藏にも逢可申相樂申候大久保清水北町二軒へ宜頼上候

○ 正月六日附之年始之御狀二月十日に延着新春之嘉慶御同前申納候大久保清水北町二軒鎌太郎おとよお富お仲いつれも丈夫の由何々の事に候私儀無相替加年いたし候一體寒暖不揃に候へども暖氣がらにてははや花盛に可相成候此分にては冬はなき國と覺申候尤例年方は暖成方よし草などは青く候て秋を春迄つゞき申候菜花一面にて三月末迄有之候由に候

一去暮色々御世話にてむつかしき年も濟大慶いたし候此方も遣候狀中之金子十二月廿九日に相届き夫々へ御配濟のよし大慶いたし候夫に附與原申は重ては古堺色々申候とも當年中店賃月々貳朱の割合之外は御渡し被下まじくと申候與原此方にて残りし給金もかりこしなどにてはや殘金壹兩壹分計に御座候尤筆耕之積に候寫し物いたし候へども是以少々之義眞一枚四風かり、何を申も色々もの目に遮り候間買たきものゝみ多く候乍去随分精密にてよろしく長谷川増田は眞の質朴にて買物にも心附不申安心のものに候奴僕二人精勤に候

一明日の當春唐商賣始り候反物は羅紗天鵝絨色とろめん類にてちりめん一向少く白紋ちりめんも大廣にて損成ものゝよしされども一端心あて置候緋紋ちりめんは無之候絹紬一端も無之拂物に有之候は、大是にて可縮みけんちう三拾壹少々求め申積に御座候其外土産物にいたし候瀬戸物茶わん十きん下直故求め候てゆるゝ水張りいたし春夏の中に船廻しにいたし置候へば歸府の頃まで土産之間に合申由に候又々此春商賣濟候て夏の唐船參り候て一と商

賣有之阿蘭陀も參り候て又々一と商賣有之當春之一と商賣にても扱々けしからぬ御用に候御座候申々川々などの及ふ所にあらす御安心のために申遣し候間御一覽之上御安心可被下候様可被成候松田氏歸府之節金子たのみ少々つゝ成とも下し可申候女共などへは御咄御無用可秘々々いまだ去秋之殘金少々有之候

一毛氈十七八夕色毛氈廿二三夕位に存候外々高さものに候かさばり候間夏商賣にて買候て持歸り可申とてもの事黃計に無之五色にいたし可申と存候青黃赤紫かば等至て見事のよしに候

一鼈甲はとかくむつかしく家中へ引上げ拂出し候由板にて江戸へ持參ひかせ候ても至て高料のよし竿かんざしなど此節市中拂ものに出候もかんざし二本にて六七百多などいふ事にてけしからぬ事に候大阪鼈甲屋三井大みせ有之此方にてつもらせ見可申と存候當地に一軒其事功者成もの有之いつれにも安くつゝ一本金壹兩位之事に申候吉見氏も鼈甲の事聞合參候御出會之節御咄可被下候いづれ後便大坂便に大坂店を聞合相場を承り合可申北町

お幸お冬などもねだり申來居候處右之仕合故いづれ御普請役其外も一同當所並大阪に相正し候つもりに御座候吉見へ宜奉頼候吉見方は奉行衆へ直に縁ある人が頼候方可宜候歟

一 正月十六日に大坂大津や吉五郎船にておとよ内裏雜賣對積出し候由日本橋問屋より届候積野村仲助を申來候大方二月中には届き候はん歟

一 御目附二月五日大坂着九日出立之由左候は十二日頃室津乘船歟當廿五六日頃には着と相見へ申候何か市中並改所も大取込にて御座候猶後便と早々以上

二月十五日認

此節之儀に候間夏商賣の内何にても御望之品色合迄御書附可被遣候何にても求め可申候

大田直次郎

島崎金次郎様

猶々色とろめん多く有之候へども用ひ方のなきものに候何色可宜哉御入用も候は、可被仰下候縮けんちう中々宜舗ものよしに候

一 市川氏へるへとわん帯地四つ程と申約束之處へるへとわんは帯にはさんぐのものよし皆々申候羽織など可宜候尤至て高直に御座候猶後便御開合可被下候早々以上

申候時々展覧いたし候

一 吳船録入蜀記は百川學海中に有之先年撮壞編卷十ノア抄寫いたし置候御捜索可被成候都て百川學海中此書の並に有之紀行類面白く御座候浪花にて抄書いたし候撮壞編中にも山水之分御覽可被成候

一 集句の詩面白く古詩を覺候には宜敷可有之候柏樹村之詩一誦懷土之情難忘候千山萬水奇勝といへとも不如郷里一田間候

一 鶯谷十詠浪華篠崎長兵衛父子并門下とも翻々と賦し來候いづれも面白く候かさばかり候間他日下し可申候譯司え頼み拙作十詠清人えみせ申候劉培元とか申候漢は詩をよく作り候由申候間頼置申候其外之俗漢とも詩を作り候は稀に候由洪泰交近作をも乞候處久々作り不申候由譯司申候

一 魯西亞板行もの此折本至而辨理にて多く調へ置申候別封箱入にいたし浪華便に多く遣し可申候かさばり候間此書状態は一葉入れ置候以上

二月廿五日

杏花園

定吉殿

正月廿六日附之御細書二月廿一日來春暖相成候へ

一 鮫は去年は一向無之候處當年は少々有之位は寄番が私方へ渡候は三番四番之位之處九本渡候間いつれ持歸り可申録太郎刀にてもこしらへ遣し可申候以上

正月廿六日附之書仲春廿一日相達寒暖參差兩地平安

一 諸眷無恙兒孫丈夫之由大慶に存候但乳母小瘡の由如何いづれ損の卦と存候財悖而入者亦悖而出之理と存候鎌太郎丈夫に候哉北町二軒大久保清水へも宜頼入候

一 正月十九日大會之由夷曲去年分も此度點いたし馬蘭亭え遣し候到來物等承知いたし候

一 三醫之中千賀道榮は十二月十一日發足正月二日浪花に至り小川文菴吉田長達は十二月廿六日立正月廿日頃浪花にて馬田氏に逢候由申來候右之内小川文菴は誠に豪傑にてまかも去秋藥を飲み候もの故是へは御禮として御出可被成候下谷三枚橋の由吉田は本郷丸山の方の由是は至て近所なり是亦よき人にて御座候

一 胡兆新も當春は歸國故絹地二三枚か、せ候處ことの外見事に候洪泰交も書を書かせ山水畫帖に入れ

共兩地平安家内無事大久保清水北町二軒相替事無之由大慶に存候

一 乳母小瘡の由いか、嘸々御困りの事と遠察いたし候一日もなくてならぬもの、上去年中々所々手を詰候物入後と申米價安く不通用之節何かと御差支察入候松田歸府之節は金子十兩遣し可申候へとも先當分之防きにもと大坂便別封に金子封し込旅文箱封にて遣し可申是は御用狀便と違ひ少々延着いたし候てもかさばり候事無構候間右之通にいたし今日同日に差立候へとも文箱封し候故少々はおくれ可申候

一 正月十九日初會大入之由到來物等委細承知いたし候高彦半椿並に着拂代壹分二米參候由此度書中禮申遣候

一 藝者騒動一件並連歌のむだにて江戸の事思ひやられ候

一 御同僚萩原忠兵衛殿へ出入候利吉と申もの永田庄左衛門と申ものへ届狀早速用達申村作五郎へ申付遣申候尤返事も取次可申旨申遣置候間左様御心得可被成候

一御目附も廿三日小倉泊にて廿九日矢上泊晦日着之
山先觸來候又々騒舖成候由此節も追々冬船之唐船
出帆等にて事多候處又々大取込に候も去秋々當年
のやうなる多用の年は無之山皆々申候

一松田伊左衛門交替藤井順七郎(本所住居)も此節も
はや出立四月上旬には來り可申左候へば松田は四
月中旬出立と存候成瀬公は同役村田など一所に御
目附御用濟出立之由に候へども少々跡に成可申哉
いづれにも早く片附靜にいたし度候乍去遠山公も
原田氏も知己にて安心いたし候外々にても以之外
心遣ひいたし候早々以上

二月廿六日

直次郎

金次郎様

猶奴僕共いづれも丈夫皆勤奥原へ御傳言申候以
上

二月六日之書狀同廿九日來兩地平安もはや難到着
賑に存候

一御普請役上條源二郎へ書物御託し之儀承知いたし
學者之由に候いまた不知面候
一乳母も再出來候由先々安堵と存候二兒健の山何か

の事にて如雜費則不足論候大久保清水牛込二軒無
事可祝々々

一藝候より白金壹枚來候由承知いたし候

一昨晦日四半時頃御目附遠山氏到着立山御役所にて
謁見夫々岩原御やしきへ參申候先日迄此方假臺所
にいたし置候處奇麗に修復出來廣間になり其所に
ひかへ居候間獨笑いたし候原田寛藏にも逢候處大
封の詭物持參いたし候と申候是も大取込いまだ請
取不申候一兩日中には持參いたし候積尤此方と出
會候も出入甚むつかしく候處御目附へ伺候處舊遊
の事不苦旨被申候間來駕候て劇語いたし候積りに
候節句早々俄羅斯人鎮臺へ呼出し御糺し有之積に
候珍らしき事に候乍去大取込に候

一鈴文々要用之事申來候間返事遣し申候宜く奉頼候
一諸所より參候書狀請取計相記し申後便に返事遣可
申候

飯田權之助 お冬 お香 逢坂御やしき朝倉々

榎原氏詩上申候 吉見 芝居番付入來
御序によりしく御禮

一島崎氏へ申入候去二月廿七日出の大坂便箱入 金三
圓遣し申候何分宜頼入候當春は米直段も下直物入

も多く定て所々さしつかへ可申候當年御用勞疲い
たし候へとも是計は苦勞をのかれ申候松田歸府に
又々下し可申候

一市川氏ヘルト帶の儀(帶は宜と申有之又はさん
さんのものとも申候先便申上候)尤ヘルトワン
一反にて金五兩餘いたし帶は二十筋計も出來候由
夫故買候ものも見合たちあはせ候由相手なければ
むつかしく色は黒の方宜候いづれ歸府迄には申
合出來可申ことの外丈の長きものに候色紺紅紫綠
等有之候へども黒より外はいたしかた無之候羽織
丈は割合有之先々取置可申と存候勿々

三月朔日

直次郎

定吉殿

正月中旬出之番外狀原田氏へ御託し被成候處原田
二月晦日着にて封狀は三月三日相届封引本十冊共
原田持參委細面晤いたし候兩地平安大祝々々

二月十六日發之狀第十五便三月九日に相達委曲一
覽仲春杏花園集之諸作面白候原田氏持參の中にも
正月開講諸子之作若晤談一卷閱し申候來會の諸子

尺 版

へよろしく頼入候今日ことの外取込いつ方へも書
狀遣不申候

長坂與右衛門 吉見狀 越後 高橋周藏狀 お冬文

久世公請取

右一々落手いたし候吉見へ久々書狀無沙汰に成候
宜頼入候北町二軒大久保清水小川町共無替事兒孫
壯健大慶いたし候

一扱去秋よりの魯西亞使節も當三月六日七日九日と
三日立山へ呼出し有之獻貢物はまりぞけて御請無
之先年の信牌御取戻り來り漂流人は此方へ請取申
候此國え以來は參るまじき旨東都よりの御教諭文
並奉行よりの論共に七日によみきかせ此方々總二
千把米百俵鹽二千俵被下候旨七日に被仰渡候處彼
方の願の江戸拜禮も不叶交易之願も不叶獻貢物も
不叶甚歎息いたし候而此方よりの被下物請申まし
き旨申し候處通詞を以色々御諭有之漸九日に請取
難有旨御禮を申述終には感服いたし候顔色にあら
はれ申候扱々日本之光輝發越希代之事を一覽いた
し感涙いたし候まかしなから是鎮臺肥田君去年々
の丹誠にて所置一つとして違失なく此度の禮式之

次第も獨斷に出候而御目附も御出候處早速事決し國家之大事僅に三日に相濟候事感心いたし候七日之御教諭文和文にて長き文を肥田君高聲に讀み聞せられ候事滿座盈々耳ヲロシヤ人も小首を傾け恐入候様子に御座候き成瀬遠山二君儼然として列席の體東都之御威光は遠國にありて却而勢強く候事今更驚入候社中の諸子へも御咄し可被成候委曲後便記し可申入候席圖計先入御覽候先々尋常の人へは御見せ被成ましく候扱々愉快之事に候き吉見へも御みせ可被下候以上

三日禮式之次第委く記し置候間後便可入御覽候奇々々々

三月九日

杏花園

定吉殿

○ 先生の書籠中於松前魯西亞人へ御諭書の寫一通ありちなみにこゝに録す

寛政五年七月廿日於新部屋御直松平越中守殿久世丹後守高尾伊賀守へ御渡ヲロシヤ船入津等の儀に付て御書取

一魯西亞人へ信牌渡候連九州一同浦觸にはおよぶま

之き事

但長崎へ預り候平戸五島しま原などの類松平筑前守松平肥前守は勿論右等之面々取計魯西亞國願によつて長崎へ入津一船の信牌被下候間入津いたし候儀も可有之候然時は和蘭陀船入津之時之心得を以人數等可遣旨杯輕く達し置候儀は子細有之間敷事

一船遠沖に見候は、早々通辭并紅毛人の内にもリニ其外役人二三艘に而乗出し魯西亞船信牌之義等も改之猶改め差圖の上入津を可免に付船が、り致し候様申付長崎島々之内相應船が、り相成候場所へ船をかけさせ尤番船にても番人にても爲附長崎御番所其外御堅等手筈宜節入津爲致可然事

一入津之上は和蘭陀人取扱に准し然るべく候尤東浦塞等之船入津候節の取扱も可有之哉に候得者猶相糺し體段宜被取計候

惣而外國の取扱は體段第一にて御武威御仁惠共に行届き又侮り不申様に一旦申渡候儀等俄に變し不申様且地下の者猥りの儀無之様可心付筋に候江戸へ杯從來の仕來にて餘り持重りいたし候

儀も候は、右等をば程能削減しかし又紅毛よりも大國に付野鄙に被召扱候様に存候ても如何又珍重致し候様にも取候得ばはじめより主客の勢

ひ相察し候是等の鹽梅能々可被心得候事

前文之外之大名迄云々相達候様に人情動き殊にいつ入津の期も無之上は如何に付不申渡可相濟哉と存し候九州邊大名より家老其外之人數出し不申候共御手薄之義者有之間敷哉と存候是等は土地に附候義俄に人情を動し候も不可然かねて申渡し置候も人情を動し如何に候能々心得被取計可然事

一魯西亞へ申渡書付うつし見せ候間長崎奉行兩人一覽致し可被置事

信牌

おろしや國の船一艘長崎にいたるためのしるしの事

爾等諭すむねを承諾して長崎にいたらんとす抑切支丹の致は我國の大禁なり其像および器物書冊等をも持來る事なかれ必害せらるゝ事あらん此旨よく恪遵して長崎に至り此子細を告訴すべしなを研究して上陸をもゆるすべきなりそれがために此一

張をあたふる事しかり

石川將監書判 此度

村上大學同判

政府の指揮を奉して

給ふ

寛政五年六月廿七日

朱 御 印

信牌之御文字

御印同斷

兼ての通信なき異國の船日本の地に來る時は或は召捕又は海上にて打拂ふこと古へよりの國法にして今もその掟にたかふことなし縦令我國より漂流したる人を送來るといふ其長崎の外の湊にては上陸の事をゆるさず又異國の船漂流し來るは兼てより通信ある國の者にては長崎の湊より紅毛船をして其本國に送り還さしむされども我國法にさまたけあるは猶留めてかへさず亦國初より通信なき國よりして漂流し來るは船とも打くだき人は永く留めてかへすことなしなかれども遙々我國の人を送り來る所の勞をも思ひ且は我國の法をいまだ不

辨によりて此度は其儘かへることを許さるゝの
 いた重てはこの所にも来るまなきなり
 一國書持來ることありともかねて通信なき國は國王
 の稱呼もわかり難く其國の言語も文字も不通貴賤
 の等差もわかちがたければおのづから其禮の正し
 き所を得がたし我國にては敬したる事も其國に於
 ては疎慢にあたらむもはかるべからざれば國書の
 往復はゆるし難きなり今度漂流の人を送り來るを
 拒みてさいふには非ず此地より通信のゆるしがた
 きを以てなり

一江戸へ直に來ることも亦免し難し其所以は古より
 通信通商の國といふとも定あるの外は強に不許之
 縱令押て來る共皆嚴にあつかひて何れの濫にても
 すへて言の通する趣はあらずして却て事を害なふ
 べき也此度蝦夷地よりして直に江戸に入來るべき
 との其國の王命なるよしをひたすらにいひつゝのり
 て今告しらする事の趣にたがひなば却て其國の王
 命にもたがふに同じかるべし如何にとなれば異邦
 の船みゆるときは浦々嚴重にして或は捕へ又は打
 拂ふ掟なれば交りのむつまじしからん事を乞求て却

て害を招くにひとしかるべしされば其國の王命に
 もたがふとはいふつべし今かくの如くいひ諭す件
 々の旨をもうけひかすばことごとく搦とりて我國
 の法にまかせんとす其期に臨みては悔思ふとも詮
 なかるべし

一爰に江戸官府の人來りて我國の法を告知するは漂
 流の人を遙々送來る勞をもねざらひ且は其國の人
 々をして事のおもひをあやまたせざと也送來る所
 の人は元より江戸官府の人に渡すべしとの旨をう
 けし由なればこゝにてわたさんも其子細あるまじ
 されど我國法によりて其望所を許されば又送り
 來る人をも渡さざといはんかさらばうけとるべき
 にもあらず我國の人を憐ざるにはあらずといへど
 も夫が爲に國法をみだるべからざるがゆへ也此旨
 了解ありてその思ふ所にまかすべき由也病ありて
 不連來漂流の人二人も又此所に送來るといふとも
 重ては此沙汰に及がたし長崎の外にてはすべて取
 上なき旨をよく可辨なり長崎の港へ送來るとも我
 國の地方見ゆる所は乘通るべからず洋中を通行す
 べし先に告しらすることく浦々にての掟あればお

ろそかに思ひて誤る事なかれとなり
 一長崎の港に來る共一船一紙の信牌なくしては通す
 る事難かるへし又通信通商の事も定おきたる外猥
 に許しがたき事なれども猶も望ことあらば長崎に
 至りて其所の沙汰にまかすべしこまかに言さす
 ことの旨趣をくわしく了知ありて早く歸帆すべき
 也

官事禁漏洩兒孫
 勿示人 杏花園

春暖相成候兩地平安

一魯西亞申渡濟候事は先便申遣候扱梅ヶ崎之旅館に
 有之荷物船積濟昨十九日春晴午時頃出帆申時前に
 は湊を出伊王島の邊へ見送り候筑前之船共大鼓を
 打いさましくかへり申候今廿日には大方帆かけ見
 隠し可申候先々去秋よりの大事一時に濟大慶いた
 し引續き監察使も出立扱因州公も同役村田も出立
 可致當月中には片附可申左候へは無程もとの岩原
 へ引越可申來月十日頃には松田氏代り藤井氏も可
 參伺れ騒々舖候事に候去ながら日月を移し候計に

はよろしく最早炎涼一變候へば歸路にむかひ可申
 候此分にては當秋交代も例之通り濟可申と大慶い
 たし候出帆前二日頃を筑前之大船小船に紅白の幕
 をうち警固如畫御座候いかなる魯西も驚き可申と
 存候昨十九日は幸新地唐人共貨庫へ出役海上近く
 梅ヶ崎の隣ゆへ使節梅ヶ崎を出候而筑前之小舟に
 のり夫々大船へのり上り例の二ツ首の鳥の旗おし
 だて旗持は舟屋形の上に居り申候を見申候夫々魯
 西亞之本船へ移り申候本船帆柱三本三段に臺有之
 其臺の上に魯西亞人立居申候是固めの氣味歟其臺
 の名をバラダと云ふ是よりカムシカットへ歸り
 し由其船中之用意に飯を持參いたし候パンとは麥
 粉にて焼き食し申候此入用計も銀十八貫目餘かへ
 り申候殊之外取込勿々申入候皆々よろしく頼入候
 以上

三月廿日 杏花園
 鯉村子

二月廿五日附之御細書披見逐日暖氣成候兩地平安

一初雛二月十八日届候由海上無恙間に合候段致大慶候

一 大久保清水北町二軒いづれも無事之由猶宜頼入候し候事も居馴み候由御同慶に候小兒共嘸々成人いたし候事と遙想致候痘瘡の用心々々此間原田定藏歸府之節テリヤアカ一器遣し候半斤有之候あまり澤山に候は、外へ四半斤御譲り被成候も可宜候

一 二月御借米之價下直成事に候
一 屋根普請井戸普請等嘸々物入之事と存候松田交代も四月十日前には參候左候へば松田も出立六月初に而歸り可申候

一 妙栖童女幸善院遠忌御世話と重藏へも咄し申候
一 辻忠左衛門没故之由驚入候扱々可惜人物に候戸田氏南町へ引移子供も多く有之由承及候跡にても出來候哉平助も驚入よろしく申上候様申候
一 上條氏へ御たのみの物押附御届可申御健別御尤に候

一 狂言繪本面白く候角力喧嘩大阪も申來候
一 おろしや一件も無滞相濟御目附も三月廿五日出立

芝譽申候

一 昨廿八日本蓮寺々岩原御役宅へ歸り候處御目附住居之跡へ入候間甚奇麗に成八疊三間十二疊一間二階二十疊計表座縮立切置候へとも是亦三間にて二十疊餘臺所納戸等手廣く雪隠などは一間半四方位本陣に泊り候心持に御座候あまり廣きも居所にこまり申候大笑

一 絹袖此度拂底にて漸く拂物調候處一端にて七十二夕つ、三端求め置候商賣に出候は七十四夕のよし拂物之方貳夕安きと申候尤一端にて壹疋に御座候縮絹袖は徳用のよし何にても江戸にて承り候より直段高く御座候人馬平安散など市中にて買候へば一つにて壹夕五分位に候絹袖當夏の唐船に持渡可申哉と待居候

一 金子方々毎々御沙汰書寫よく、御禮頼入候別段返事遣不申候
一 大坂便先便に金三兩遣申候大方届き可申候
一 築山御逢候は、宜頼入候あの方々も此方々もふさいいたし候
一 米價之咄計は此方にて一向無之其上用達方へ銀子

廿七日に因州公出立同役村田も歸府致候、二年詰之上候扱々少々悪物にてこまり候處歸り候而大慶いたし候市中にても大悦に御座候何か評判あしきもの

一 にも當地奉行の方もあしく江戸もあしく半年詰こし候而御手當の事も江戸か一向無沙汰當地奉行もきの毒にや月割にて心附致候をも不足と存色々ねたり事申故甚豊州も立腹に候き
一 洛陽ものは欲ふかきものなり餘程之變物にて候き歸府尋參候はば定吉逢候に及不申候事

一 因州公より山水畫帖二冊もらひ申候是は唐人持渡候而直段出來不申已に持歸可申處因州公御買請候而私へ被下置甚難有存候扱々よき人にて御座候歸府之上は近所故必々屋舖へ來候様約束され候右畫帖は誠に奇事に當地之ものも感心いたし候
一 豊州公もすさまじきものにて此度の一件も誠に獨斷にて決し申候遠山なども參り候へとも一向無議論豊州へまかせ去年申一件無事相濟大悦に御座候此頃は嵯峨様之手習と詠歌蹴鞠に御座候明後二日は巡檢に出兎狩可有之と申候私も罷出申候是はめつらしき見物と存候乍去市中評判はとかく因州

遣し置候而毎月晦日、に惣勘定いたし日々小遣帳にも用達方にて附候間去年の金錢とも手にふれ候事無之用事辨じ扱々めつらしき事にて律僧の心持にて大笑いたし候萬々後便に申上候以上

三月盡日 大田直二郎

島崎金次郎様

三月十六日發之書四月十日に來披見いたし候家眷無異愚遙想候私並丹治重藏奴僕兩人無事に候
一 増田長藏儀三月末々伏枕當地醫師眞野三圭信田主膳針醫梅部等療治いたし看病人も壹人雇附置候處養生不相叶當四月十日七時頃致病死候扱々可惜事に候先例之通永昌寺へ禪宗岩原葬送いたし法名實悟了參と附申候右に付奉行衆へも御届出し江戸へも届書出申候當地詰同役御普請役家來用達筆者等麻上下にて供いたし重藏も參り見候處急度いたし候葬式のよし築地の伯父へも便次第爲御知可被下候嘸々驚可申五助事同國にて家内の様子も能存居申候故主青沼氏へも御序も候は、爲御知可被下候葬地も山にて候崩れ候間地面よろしき所を撰ばせ瓶

も水瓶一番にいたし板蓋針かねづつくい塗にいたさせ申候今迄同役家來病死と雖も加程には無之と皆々申候石碑も面に法號横に年號月日を記し背に行書にて

死生命、殃壽夭、吁從者、歸黃泉、其在世、三十年、生伊豆、沒肥前、名長藏、氏増田、南畝子題

柳文に如此問々有之候間如此記し申候石碑料錢四貫餘に御座候病中々樂代葬式石碑料地面代月牌料等にて貳百七拾餘々相かゝり申候扱々是非もなき義に候跡へ子供にても抱小侍にいたし候積りに候以上

四月十四日 認置 直二郎

定吉殿 金二郎様

三月十六日附之書四月十日に相達慰遙念候此地寒暖不揃蚊と蠅計澤山に御座候

一大久保北町二軒清水家内小兒兵壯健之由一段之事に候

一絹袖拂物有之三匹求め置申候壹匹價七拾貳匁尺幅一尺六寸二分 長サ五丈三尺七寸

去年などは松田拂物を調候に五十二匁位のよし候に直段高直に成候由

一鼈甲之事先便も申遣し候此間文の黒き所多き惡甲カネ（惡甲の大き菓子益程なり薄きことセンベイの如し）唯壹枚此間拂物に出候處九十匁餘と申候右にて櫛に成候哉簪に成候哉素人にはとんとわからぬものにていづれ簪に仕立有之候方丈夫成ものゝ處いづれ二本にて六百目以上と申事にて大阪之方承り合可申年々鼈甲も少々宛渡り候處よき所あしき所に不構皆々奉行衆之方へ引上げ家來へわかち家來方にてよき所は取候而其跡を拂物に出し候よし夫故鮫と鼈甲は逆もよき所は此方の手に入不申候由鮫も當年よき所十本計有之皆々上へ引上げ市中此方買請候は一向之惡鮫なり棧留は一向無御座候若又夏船など少々持渡候ても右之通之事故中々此方之手には入申まじく候縮緬などは御用之方さへ年々不納に御座候毛類計澤山に有之候由申し候

一黒ヘルヘトワン壹反代銀三百五拾六匁五分 五つ割にて羽織に成候

よし割合に入候様にと申候間何も入用も無之候へども求め置候五割七拾壹匁三分なり是は下直と申ものも有之其外何もかも江戸にて申候とは相違にて皆々高直に候樂種程下直にて高直に成ものなし夫故元代極め之外買ふ事成不申候

一瀬戸物類土産に可致と四斗樽につめ當月廿日頃舟廻し出し候夏秋之間には着可致候是も大坂にくらべてはあまり安く無之候

十錦猪口五十 染付同十三 蓋茶碗十

十きん五寸皿十 同小井十 青磁内もやう茶碗

三十 首尾よく着いたし候へばよろしく候

一唐人に書掛頼候ても中々たいは置れ不申禮を遣し申候同前小位にて何にて 同前小位一東位遣申候

一茶香の事承知いたし候拂物たのみ置可申候テグス南條分程市川氏頼候由承知いたし候是又買候事やかましき物にてみだりに買ふ事成不申候間頼置可申候

一米價段々下落にて嘸々困窮不通用察入候金拾兩松田へ頼可申存候處中風之氣味にて言舌歩行むつか

しく候間御普請役辻民右衛門同道歸府に付是へ相頼可申存候も是は上野車坂近邊の人にて半年在勤中至而心易いたし候間相頼可申岸氏にたのまれ候唐紙一束松田長持へたのみ入申候

一奥原店ちん之事御世話に存是も少々暇かすみ候而寫物等も休居申候とかく天草上白米に鮮魚にてこなれあしく候間水工のあたりのみにもあらずもたれ候故の事なり長藏なども去暮より少々心持あしき故歎食事後大方ねて計居候故大病に成候事と存候五助平助は至て丈夫にて日々出勤歸候へばわら草履出精あがき申候故と存候私なども食後數百歩出役歸りには所々遊行氣を散じ申候故當年は壯健にて食も酒も進み申候此間交替致候村田家來などは去年四人迄死去當人も去秋煩候由松田家來も先日壹人病氣にてとても供は出來不申通し駕籠も高直故船廻しに便船いたし出候跡にて又々松田殿中風に成候扱々すばらしき事にて早く秋末にいたし歸府を待申候私事は着之節煩候而病を取越し候事と存候此度之松田之事など見候へば長藏は身がはりに立候事歎と入殘念に御座候村上清太郎

世話にて十六歳なる小侍神道者之置可申哉と存候
 彼是臨時之雜費入佛事も五兩計にをく又々小侍
 にも少々かゝり可申候財悖而入る者はまた悖而出
 とも申候一升入る袋は一升入とも申候唐紅毛ヲロ
 シヤ人に迄名を書留られ書のごとき山水をまのあ
 たり見書書を澤山得候計りまうけ物にて一刻も早
 く歸府いたし度候阿々

卯月十五日 一昨夜大雨雪も有之近來
 之大雨なり着亦たき申候

直二郎

金次郎様

なほ、米相場引上書附大笑いたし候此土地など
 にては一向わかり不申候二三百貫目位の金自由に
 て市中之者迄大氣なり

向暑之時兩地平安四月五日附之書四月廿九日來二
 月廿六日附之大坂便金子參兩入届候由安堵いたし
 候五月幟之頃にも成候鎌太郎お豊とも丈夫のよし
 大慶いたし候北町清水大久保等無相替愛度存候
 一辻氏跡いか成候哉戸田氏に男子等有之由承候是
 にも繼ぎ候哉扱々可憐事に候長藏跡も君川富作

五月二日

金次郎様

直二郎

四月廿七日之廿二便五月十八日に飛來兩地平安大
 久保清水牛込二軒無恙めせ度候近所内田やへもよ
 ろしく頼入候此間定吉方々も申越候乳母之事にて
 市川氏共御骨折之由市川へも宜く御禮頼入候
 一絹紬之丈之事被仰下とかく持渡少々漸拂物にて調
 候方却而下直に候

○縮

カネ尺幅一尺貳寸五分長三丈七尺

縮ミケンチウ壹端
 會所より除き物にて調候處三十四匁分六リ
 但チケミケンチウ之方は損之由申候貳反計取置
 申候

○へルへト帯にいたして二十には相成不申候由十二
 計に成候由申候

○へルへトワン一反を五ッ割七拾壹匁三分にて羽織
 だけ出来申候壹反にては代銀三百
 五十六匁五分なり

右羽織丈は調置申候

尺 履

と申十六歳なる童おとなしく候而よろしく候是も
 むかしは弓取之島原家之家來にて兄は則勤め居候
 由親は當地へ浪人いたしたし筈にて渡世申候村上清
 太郎世話にて一ヶ月金壹分貳朱に定め申候
 一當地天草米壹石五十三匁位之處此節御用ふち拂候
 へば四十九匁八分八りにて候江戸に較べ候へばよ
 ろしく候

一此節唐船もかへり又々當月末歎來月初來候迄は少
 々静に候交代も濟み候而大風の吹たる跡にて家居
 は廣く夏を凌ぎ候にはよろしく候中々千石二千石
 位之住居にて奇麗に人少く上野之院中存出し候事
 に候此度之藤井至而よき人物にて候上條は學者に
 ておもしろき男に候

一小川町おは様いかよろしく頼入候およねより此
 間之禮丁寧に申來候又々よろしく頼候

一松田中風之氣味にて言舌行歩むつかしく候間内々
 申上置候金子拾兩御普請役辻民右衛門へ頼遣し候
 唐紙一束は松田長持へたのみ入遣し候是は岸彦十
 郎殿かたのまれ候ものに御座候定吉にても持參い
 たし候様に存候早々以上

一トロモンハ多く御座候間コキ鼠花色之類調置可申
 棧留は此方にて奥嶋と申候當夏などヲロシヤ商賣
 御免無之紅毛ヲ持渡可申哉など申候近來至つて少
 なく御座候縮緬是又御用さへ持渡りすくなく候羅
 沙狸々緋類不用之物にて候へども小切れもかはれ
 候由何にても御望候は、尺寸御書付可被遣候へば
 いづれ外々の品よりは毛類は下直之由是は江戸儉
 約にて毛類うれかね候處へ毛類計多く持渡候故の
 事に候當夏船は唐紅毛共に餘程氣をはりよろしき
 もの持渡可申と申候ヲロシヤ商賣無之を唐紅毛共
 満悦之由紅毛にてよろしき鯨など持渡候へば此方
 之身上にもわづか一二本にて大利有之候よし申候
 唯々唐船五艘もわたり候へば物價下直にて代物澤
 山に成て此方のためにあしく候由豊年にて困り候
 と同事に候夏船三艘位に候へば至而よろしく候由
 去年冬船多くあまり代物多く候はあしく候其上
 外に代物はすくなく藥種と毛類計多く候藥種之多
 きは甚此方のために禁句に候大笑之事に御座候
 一長藏事は至而忠臣と可申哉没後之諸拂いたし候處
 勘定用達にて當春中より御扶持拂代錢三拾貫五百

四拾八文銀にて貳百七拾七匁九分八厘拂米十二俵
 四斗入天米壹石に附四拾八九匁歟
 右にて長藏惣入用銀貳百七拾七匁八分壹厘とさし
 引壹分壹厘不足は用違香奠之心にて候哉帳面に
 も不附さて、此様に勘定よく死なれ候もの歟と
 用違方之筆者驚入申候切米も二月渡しも大體遣ひ
 きり候由五月分は不請取右之御扶持米代にて病用
 葬事共皆濟石塔迄出来申候明廿七日は四十九日前
 日故餅米を買ひ牡丹餅にてもいたし候積に候是は
 勘定之外に候

一當六月十九日は淨榮寺にて十三年忌いたし候由三
 月中より書翰到來是は私方々壹封之内へ香奠百疋
 包遣候間別段香奠には及申まじく候本念寺方へは
 相應に米銀にても被遣可被下候淨榮寺へは詩計遣
 し可申候手紙は別に遣し不申宜頼入候

一牛込揚場三河屋酒賣場兵助會所便先壹封參申
 候御序に宜頼入候右之番頭世話にて去冬新川之酒
 壹樽 奈麻存候よく御禮頼入候

一辻氏養子出来築山氏養子も出来候由宜頼入候
 米價廿八兩米金半分のよし定而世上並前などもむ

つかしく可有之候此節在勘計は一生の徳にて右様
 のいやしき嘶一向無之會所銀藏へ立合に此間も參
 候處藏より藏へかりに移し候銀の箱五千貫目とか
 申候此間も惣勘定いたし候處去暮之有金二十七万
 兩餘外可秘事は尤 又々當年も納り候へばふへ申候此地
 のもの口くせに一寸百貫目かりたいの又は六百貫
 目かりれば借金の方がいたしよきなど、申候六百
 貫は万兩也番町邊之歴々など中々其様子借金など
 夢にも見候事成申まじく候夫故口計大言氣計大き
 く金をもちため候ものは少く今日はなくとも明日
 は又出来候心持に候扱々めで度國にて御座候雖も
 此節多く高直と申候所が百三十二文位おしつけ百
 文位の由至而あたらしく候酒も二百文にてよろし
 く猶後便可申入候以上

五月廿七日 直二郎

金次郎様
 松田氏中風故御普請役辻氏右衛門へ銀金十兩遣候
 着の上よろしく頼入候也

一梅雨陰晴暑氣漸催し候兩地平安親眷無恙欣慰々々

當年は過酒無之候故にや健食ことの外氣分爽快も
 はや歸期も四五月に成候而宜候段々申送書附に百
 枚計三通り認めさせ候由に日々他事出来し八月頃
 迄に毎年仕立候事に候乍去皆々會所之ものへ手分
 けいたし頼置候へば無間遠出来候扱々中々一年計
 にてはわからの事のみ多く大造成口々に御座候
 一石井氏くり上御材木石奉行出役之由めづらしき事
 に候久々出精油絞り酒造等むだ骨を折られ心力を
 盡し書物計も千萬枚に可及共外所々よりのたのま
 れもの一々に辨し奔走いたし漸去々々本役に成候
 さへ遅き事と存候に一時に升進いたし候事天道之
 取計は格別成事とおもしろく存候乍去ぬれ手で粟
 をつかみたがる輩此節賑々米直段の小言と石井の
 やきもちにて役所などにては述懐如山面白くなき
 はなしのみ多く可有之と遠察いたし候且又當秋も
 水出候は、米價上り可申など口々に可申と大笑い
 たり候中々米價は上り申まじく候若亦上り候は、
 却而世中六ヶ舗成可申是は米の多きにはあらず金
 をにぎりつめ候もの多き故に候此地は別世界にて
 金銀融通のよろしき事九州大名之家來入込唐紅毛

船來候而大造成金銀出入府中餘銀を以大名へも一
 年限に五朱之利にてか返濟も無滞寺院其外第民
 等へもかし附候金銀夥舖事に候此間も目を驚し候
 は堺町人共唐紅毛貨物買候代銀未納にて此地津出
 候證據のため家屋舖書入候證文を根證文と申候右
 銀五千貫目にて御座候京都さる町人貳百貫目の
 根證文を出候へば會所のもの大笑にてたつた貳百
 貫目計に證文が入るもの歟と申候是にて御推察可
 成候第一よろしき事は土地に金をため候ものは無
 之皆々遣ひ候へば跡々又々湧き申と見へ申候二丁
 町(丸町) などの繁昌賑成る事のよしに候江戸も
 せめて長崎位の賑にいたし度候

一鼈甲漸少々下直成所出可申と存候乍去爪の方却而
 よろしく本鼈甲は一斤三百目餘爪一斤にて五百目
 程と申候本鼈甲に爪を少々ませ右にて漸く四五本
 出来候由手間代一日五匁つゝ但是は粉を拂候へば
 手間代位は出候由二三日かゝりて二本はど出来候
 よし何分高價之ものに候乍去拂物にて買候よりは
 此方下直にあたり候など申候先此位なる事が至而
 下直の沙汰にて又々夏船已後紅毛の品等によりて

相場上り可申とも申候夫に付色々之籠甲類取よせ見候處眞偽色々有之眞の物は至て色よろしく偽物は色こく黄色に御座候此度初而目利を覺申候家内北町などより頼こし候間せめて一本つゝなりとも遣し可申と御普請役など一同細工人を用達方へ招き置候而こしらへさせ候積に相談いたし候先方へ遣し候へば眞物をとるかへ候由申候右之通り之事故吉見方頼の方など他人へはうかと世話いたしても代料等たてかへも迷惑其上先方にては安くかひ候積にては大間違に候よく〜此事仰わけられ可被下候申候町人之名前にて買申候

一茶香テグスの事承知致候是も自身にはかはれ不用達名前にて夏船に買候つもり候トロメン色之儀御書附被下承知いたし候當年はヲロシヤ人商賣やみ候間ヲランダ人大悦ゆへ定而よき代物持渡(奥島も待居申候サントメのことなり)可申と存候久々よき鯨參不申もし參候へば鯨一二本にて大利に成候由申候夏船之權子にて此方身上之大一定吉少々濕瘡のよし家内へうつり不申候様御用心可被成候お豊はいかゝ鎌太郎へはうつり不申候哉

一豊州公事扱々物のよくわかる人にて感心致候私大はむき宜皆々毎日數十通之内よほど評議のつかぬもの仕方なく筆をすて、持出し候へば早速わかり驚入申候其上やましき事一向無之てよろしく候先年初在勤御詰越之節の八朔金七拾貫目土地之役人へくれられ候處土地にてもたゞもらひ候は如何と申して右の金を元代に致候唐船別段商賣いたし右七拾貫目はすへ置右之外に夥鋪別段御備銀と申候銀出来御藏に有之候此間も年寄共拜借願候所右之銀は外物故江戸へ伺に不及三百貫目無利足にて十五年賦にかし被遣候間皆々難有がり申候一人にて五百兩ほど拜借日本國にかゝるめせたき國は承及不申猶後便に可申上候以上

六月七日

大田

島崎様

蒸暑兩地平安親眷無恙兒孫生長の事と存候

此方僕従いつれも達者精勤別而二僕は草履之かせぎ出精し候甚健に御座候奥原眼病もよろしく長谷川無事に御座候扱々質朴には感心致候もはや去年

御用被仰付候時節に成一年のたち候ははやきものにて大方交代名前も來月中には相知れ可申と相樂申候益後に成候は、そろ〜歸支度を催し可申と存候

一五月十五日御認めの御狀六月十二日届き申候とかく米價安く候由御借米書附委細承知致候辻民右衛門へたのみ候十圓大方届き候はん松田はいかがいまだ江戸之左右不承候

一中町無盡跡かけ五月迄にて満會の由承知いたし候一肥前マツ布と申もの色々承り候へ共無之候是は豊前より出候シクハ布とか申て紋からのすかし有之布の由一反壹分位のよし二反計も求め歸り可申候

一長藏一件伯父へいさい御見せのよしせめてもの事と三十五日御取計よろしく候此方にて四十九日に牡丹餅をこしらへ諸家奴僕へ振舞申候藤井氏も家來を寺へ遣し香奠等納め候由に候一夏船又々入津之沙汰にて取込可申候何とぞ三四般にいたし度あまり多く候へば甚此方のためあしく候由に候

一旅宿は甚ひろく風もよく入申候此程は夜分なとむしあつく御座候殘暑などつよく候由乍去蟲の音紅葉の色つき候などは秋の心地致候植木や菊の類引かへ〜取よせかり見申候御奉行も同前なり一盆前に例年之通り大久保清水へ貳朱づゝ小川町おは様へも少々にても宜く頼申候扱々會所銀藏之封印とき候節毎々出役いたし候て何百貫目〜にはあきれ果申候結構なる國にて日本國中にかゝる通用よろしき所は有之まじく候猶後便可申上候以上

六月十六日

直二郎

金次郎様

一六月十六日附之御狀七月朔日着兩地平安此地之暑氣きびしく夜分別而甚鋪御座候僕徒共いづれも無恙精勤に御座候

一辻氏持參之金十兩相届候由安堵致候右にて益前拂等濟成丈十月迄御取續き候よし承知致候いづれ八月の間に米價安く候而は物さびしき秋と被存候世上二統不通用之事と存候夫に付ても當地之繁昌金銀融通には日々驚目申候乍去二季拂之國故益前な

どは拂物等安く出可申と存候すべて物をたくはへ候事は嫌にて明日は明日と過す事の風俗觀樂計工夫いたし候て人氣甚大氣なり

一 大石元菴老大手柄と存候去年長崎へ參候小川吉田同日に被仰付候事ふしきの因縁と存候大久保にて嘸々大悦と存候如仰高嶺は五割増位かゝり可申候何にもいたし候ても大仕合と存候

一 山口氏狀落手いたし候當年舟行定てにぎやかに可有之候此節湊湊有之折々は右見分として御用船に乗出し候へども御用帳に鎗にては一向不面白と存候内々少々辨當酒など用候へば役人共大機嫌にて御座候毎々御普請役登人と大笑いたし候土人氣のつまる事生得嫌にて此方少々和し候と大悦にて却而出精いたし候面白き國にて御座候西御役所成瀬也普請も始り是又見廻申候此普請修復も大積り八百兩餘浚計も五百兩計金銀は湯水のごとく結構成所也其外職人の元手迄かし遣候事也

一 此節夏氣に成候故歎所々なまのろき喧嘩等有之庖丁にて六十所疵付候など時々白洲も有之吟味之體透見致候中々おかしきものにてやはり大阪流の

なまけに御座候叱りてもならみつけても蛙の面に水のごとく一向針のきかぬ男共にてじれつたき事に候

一 最早在勤も百日計に相成候間日々相待申候大方私交代も六月中には被仰附候事と存候奉行衆は彌々成瀬公御出のよし左候へば交代引繼も手間取不申諸事すら〜と參候て大慶に御座候市中などにても大悦に御座候新規の方にては又々點ちがひ當分こまり候由に候

一 食物は大阪を一段珍事に候土用中専らあひるをたべ申候暑中は鯨鱈の吸物第一にてとかく雞ぶたの類を用申候暑中のおんかう扱々氣味わろく御座候西瓜は色うす赤く白くたねは大方赤く御座候鰻は平日酢味噌にてたべ申候此酢もだい〜酢とて橙をすりつぶし候酢なり一口もくへ不申候鯉のさし身もからし酢計なり

一 色とろめん藍鼠 求め申積りに候尤つづきとろめんにて無之候へば不宣候由に御座候價金貳分餘の由へルへト吳羅ふくも羽織丈は調へ置申候紅毛船來候へば又々珍物可有之候奥島サント持參候はば調

可申候近年ちりめんと奥島は拂底にて候唐船方もちりめん又々少〜渡り申候御用にさへ足り不申候絹紬は當夏唐船よほど持渡候間又々調可申と存候

一 瀬戸物四斗樽につめ候而四月廿日過大廻しに出し候いつ頃着候事に候哉無心元ものに候いづれ大阪にて又々廻船問屋舟へうつしかへ日本橋迄着候事と存候いづれ歸府には馬壹疋多く立候而内かけつづら荷物ふへ候由毎々人々申皮の葛籠等二歩計にて拂物有之に逆もの事に二ッ程を求め可申哉と存候明荷も此地にて誂候へば高價にて御座候由に候猶重便萬々可申上候此節唐船荷物之出役多く取込申候早々以上

(長持をかした候は昔の事にて全くはなし)

七月五日

直二郎

金次郎様

六月十六日發之書七月十二日來酷暑中兩地平安家内一統無事親戚無恙目出度存候
一 平助無盡金貳兩御預置候由承知いたし候此方にて

尺 鷹

かはせにいたし遣し可申候盆前入用に候は、遣可申と承り候處いまだ入用無之候由申候歸府之時分調物にてもいたし候事と存候日々五助同様草履出精甚工面宜候去年より兩人共一日も休無之皆勤に付盆前に金壹分つゝ褒美遣し長谷川奥原は休日有之故是又金壹分つゝ遣し候是にて相當と存候新侍へは小菊少々遣し候是又至而靜成性質にて吉見八太郎に似申候一體當地之若き者は江戸と違ひ至而まづかに御座候

一 六月十九日會之事被仰下先便申遣候處間に合候哉行違ひ候事と存候年々平年には貳米遣し候近年は大連に成候間二分遣候是は寺之損金物にてあの方にても法事いたし候心得に候

一 珍書三葉めつらしく皆々にも見せ申候夫に付米價之むだ書やかましく同僚も三人程引込居候由たわいもなき事あまり増長いたし候故の事と存候高橋八なども其中に御座候氣之毒成事に候

一 奥原へ御傳書申通候眼病快成候へとも餘毒をおそれ書物等いたし不申長谷川同様際成事に候
一 夏船唐船四艘參り大取込紅毛はいまた參不申候

猶後便可申上候早々以上

七月十七日

直二郎

金次郎様

七月廿六日附之三十壹便八月廿日到來一兩日已來涼氣に相成候兩地平安○町便にて大阪野村へ御向ヶ相成候大紙包御差立之由押附着可致と相待罷在候

一因州公御發駕は閏八月廿日前後之様成沙汰申候此方交代は何とそ夫々先に立出いたし候へば宜候へどもいまだ相知れ不申此書狀着之頃は定而其地にて相分り可申候いづれにしても最早纔に相成一日も早く歸府いたし度候

一八月十四日頃大雨時々夜中降候而俄に涼氣相成候其地も早魃之由此節は定而雨もふり候事と存候一富原杉衛門殿頼候もの承知致候私方へも申來候人馬平安散

一小川町おば様へも微物遣候處御禮にて痛入候此節濕瘡中は勝手元嘸々御心勞の事と存候宜奉頼候お冬濕瘡全快之由又々定吉少々出來候由何とそ歸府之頃は家内濕氣無之様に存候大久保北町二軒清

水へもよろしく頼入候

一岸彦十郎殿より昨日便有之堀留馬喰町等へも被參候處私に勤先之評判宜候由申來大安塔致候御同慶可被下候

一諸色高直米計下直にて嘸々暮方むつかしき事と存候何分宜頼入候當年は江戸米價にて夏中上方より下し候白砂糖少く砂糖直段引立不申候由申候唐船紅毛船持渡少く候てもやはり下直之由一體之不景氣に響き候由此方收納迄も去年詰合之ものは貳三貫目も減し候由十年已來之不景氣成物哉に御座候御普請役など算盤を入候而泣事計り申し候

一テグス貳米分調置申候茶香も頼置候是は商賣に出不申唐人杯用之品を買候事故六ヶ舖御座候一生形三郎左衛門病死いたし扱々氣之毒に御座候別紙に法號病體記遣候間便次第被遣可被下候屋舖より爲替は遅く相成可申扱々油斷のならぬ世中足もとのあかるき内早く歸府いたし度候

一此節唐紅毛商賣取込申候絹紬此度は少々下直六十匁近くにて生合もよろしく候間又々三反計り取置申候春商ともに五反に成候とろめんも續き之方丈

ヶ有之二反計取申候皿紗下直に付土産もの、直段不知候而可宜哉と存よほど取置可申と存候瀬戸物類も又々取申候是は船廻しに出し可申候萬々後便と早々以上

八月廿四日

直二郎

金次郎様

二白僕共いづれも丈夫にて大安心に御座候以上

一八月六日附之御狀同晦日來朝夕は秋冷罷成庭之紅葉色つき申候兩地平安其御地も月見頃々は定而雨もふり候はんと存候當地は俄に冷氣に成候 暑氣も程には無之大 販位之事に候 承り候

一北町二軒大久保清水いづれも無恙めせ度候
一八月三日曉岳院三十七回忌之由願正寺へ御參詣之由扱々年月如夢御座候絶命之時私も參居候處晝時八時過頃にて井上睡翁中島彦八郎など列座彦八郎殿は落涙啼泣いたされ候事ものあたりに存出し候乍去年忌は二十一年二十三年二十五年二十七年二十九年三十二年三十三年より五十年と覺候處三十七年とは一向宗之流歎かか覺不申候

一唐紅毛船唐四艘 商賣始り候間絹紬(此度けんちうは下直にて其上よろしく御座候)價五拾五反程(四十五匁也)續色とろめん(四十五匁二反つゝ、きなり)貳反さらさ貳十匁を三十匁迄五反計求め候當春は唐方下直に御座候由申候棧留類は近年一向無之鮫も無之紅毛は當年はさんくの代物にてさらさ計澤山有之候是も地合不宜候へとも土産物など可宜と求め申候革もはなしや革壹枚求め候積 是等も入用には無之候へども人のほしがり候もの故切候はいどうらんにも可成哉

閏八月十六日

直二郎

金次郎様

なほ、成瀬公彌閏月十五日出立に候は、九月六日便を長崎便之限とし同月十六日廿六日附等は大阪銅座之野村仲助へむけ御出し可被成候是又御用便にて届申候閏月十五日出立延引に成候は其日割にて御差略可被成候大概廿日程にて候は届候事

一 八月十六日附閏八月十四日來秋冷甚候處兩地平安其地雨はいか、此地は雨も宜く夜分は餘程寒く成候

一 内藤も成瀬公御一同閏月十五日頃立之由江戸を兩度大阪も申來今日頃は箱根歟と相樂申候もはや來月九日を諏訪祭禮取込其上暇乞人を込合可申と今日などは奥原と具足櫃等へ書物をつめ申候書物を入候葛籠二つ掛物書書類入候柳ごり一程馬にて運候積大概之品瀬戸物類は船廻しにいたし候

一 御用長持は着類と反物にて大方ふさがり申候絹袖風八疋十六疋になるとろめん細風三疋ほど黒吳羅一反吳ろふくヘルへとも羽織丈位は取置候縮緬無之絞ちりめん計サラサ土産に可宜と四五反も求め申候
一 大久保清水北町二軒無恙大慶仕候家内とかく濕瘡

之餘毒別而七月中鎌太郎少々は出來有之候由乍去此節は全快故爲御知之旨大慶致候早速犀角會所を求め下し候様に可致候先柳屋を有合候ま、封し込遣し候吳々も遠方を往來致候水屋と相見申候
一 くれ、も鎌太郎事御心添可被下候とかく追込不申候様可致事猶々濕瘡平癒のため當十五日の廿一日迄七日禁酒いたし自得院様へ祈り申候幸酒も餘り續候間養生之爲にも可宜と存候猶又壹兩日中之便に左右を相待申候而禁酒之限も延し可申およね殿へも能々頼入候
一 先々一ヶ年無滞相勤もはや在勤も一ヶ月計に成食事至而進み宜く去年の一日も引不申僕共も丈夫にて大慶いたし候霜月十五日前には歸府可致候早々以上
閏八月十九日 直次郎
金次郎様
閏八月十六日附三十 九月十九日届同廿六日附三十 七便九月廿日に相達兩地平安
一 吉見儀助議閏八月廿二日同役仰付候由誠に希代之事にて大悦いたし候賑々清水御姉様御悦之事と存

候如仰大久保大石氏共に兩御姉様御悦と遙想致候

ことに外場所と違ひ同僚被仰付候事於私別而難有己身の出世いたし候よりは難有覺申候石井氏之事を大幸と存候へども是は將基なれば角道の歩を明置候而出たるごとく吉見事は手に持候歩を打て

〔〕に成候様の事にて別而當年米價六ヶ舖世中に新恩に霑候事内外之悦不過と被存候與力なと減祿候而さへ出役いたし御徒よりも出役きりかへに逢候事此述懐は何卒築山に一升振舞候而一夕承り度と存候定而出役仲間なと色々こまごと可有之と大笑いたし候系圖御用首尾能相濟役所へ歸り候は、雨天之傘一僕のひつばり等申合も可宜と是計は大悦に御座候

一 在勤も廿日計に相成用事如山御座候得其他國へ出立と違ひ大阪への土産物計手近く出し置跡は持歸りさへいたし候へば濟候事故左のみ構不申唯々書物之たのまれ計は例の通困り入申候
一 先月末又々瀬戸物入櫛一ッ書物入箱に一包長藏物一包船廻し出し候其外調物等大體片附諸勘定も内調いたし候處不景氣之年にても外々御用よりは格

別之事にて難有、御座候萬々後便可申上候以上

九月廿日

直次郎

金次郎様

尙々九月十六日便は大阪銅座へ御出しの由承知いたし候

第四拾便四十壹便共大阪にて披見冷氣に至り候得共兩地平安

一 去月十日長崎出立道中無滞當月朔日大阪着いたし候小倉之渡海風に而一日小倉へ逗留先遣而遣し候日割一日延引當月十九日江戸着に相成候東海道川支等はもはや有之間舖候

一 江戸着之日左之通日備御やとひ可被成候かんばんは品川にてかして着せ可申候

侍登人

駕籠の者四人

右之通御座候大取込早々以上

大田直次郎

十一月三日

島崎金次郎様

大田定吉殿

二白

明四日大坂出立いたし候以上

尺牘終

甲驛新話

夫人間有鼻穴兩下大有穿掘埋共埋共不理
 御坐候者湯島先生連之文句是比而以人間
 有毒穴兩故大成有頂天止共留連不止者息
 子他果親仁線言例言馬耳風持來轉音思出
 四谷果其船軍今早小冊成滑稽書爲梓書林
 乞故隨言出放題叙ス

馬糞中咲菖蒲述

序

いたこ出鳥のまこもにはあらで四谷新宿馬糞の中に
 あやめもまらぬ一卷をひろひ得たり朝返りの朝な朝
 な茶づる如くによみ流せば力をもいれずしてあらか
 ねの地廻りをうごかし目の見えぬ按摩針の聲きく如
 く問屋場をとほすして四ツ手のはやしきおそきをま
 大木戸をいでずして倡家のあしきよきをまればあさ
 ぎ染あいたらぬ情もてんふらの味噌ごき中となりぬ
 べしたとひ時うつり客去りむかひの提灯行かふとも
 いさゝかまはずいさらごの品川と肩をならべて驛路
 の鈴の音たえず玉川の流れつきせすして柳新葉のか
 るゝまでこの櫻木の朽まじきにこそ

安永四ツのとし文月の比

風鈴山人水茶屋に書す

目録

- 大木戸附り馬士のはなし
- 友の出會
- 茶屋の體
- 座舖のまやれ
- 床の内
- 隣座敷の様子
- きぬくのころ
- 畢



四百八十四

甲驛新話

大木戸の塵は水賣の雫にまめり天龍寺の鐘は鯛聲にひやくノツツちやんらん馬士二人歌おくれへと上なア引いかぬウカソレそうだになア引アトノ馬士かみ村のウ江五右衛門がアよめ女ナア産月だアといつけがどふだアまだひり出さねへかなアサキノ馬士(大キナ聲ニテ)あんだかハアよんべも夜ふてへ疝癪のウいてへとつておれらアも張番のしたががうら出そくねたアよ何がはお蚊にはおぞめられるしたいもいらねへからおめ小めのウしてひどヲ引いやつを二本とられた事よアト四文錢でかサキおよアトそりやアはあたけへかん病のしたナア又歌おうらのウせえどへなアまのび上なあ小ヲぎくらの枝おくりになあア、さへ引、谷粹(藍さびちいみのかたびら紅麻に白ぬめゑりのまゆばん帯は黒びろうどにあさぎ小伯を合せたちうや帯呂の山まひ染に桐の三ツ紋付た羽折ひもは駿河打のほそ色はむらさきなれどもさめて藤色かとうたがふ茶つかの少しよこれた脇ざし一本おと

し指にしかまほこ形のすけ笠に白き麻のひもを付てかむり笠の裏に小サキ風車二本さしたり)金七ナレドテ金公(もぐさ島さらしのかたびら白あさのゑりをかけたあみまゆばん島ちりめんの帯をめかたびらの切レと見へて同じ島のひもを付たすげ笠に茶かへし小紋のちりめんの羽織を一處にして手にさげ(但羽折はかくれ鼠色のたびをはきもちろん丸こしなり)谷粹金公なんときつい馬じあねへか金公いつそもふ引切がごせんせんねへ思へば道があんまり悪く成りやせん谷商へへ屋が出来てから石をいけへこと入れたからちつとは直つたのさ金それでもふる時はおへやすめへわたし共か方なんざあふればふるほどよく成りやす谷道はそつちの事だよまかしふればふるほどいへはあんまり味噌だぞ金ハ、谷なんと金公どけへぞ上らふか金どふも内がつまりやせん谷ナゼよかろうせへ金堀の内にもつたともいわれやすめへ谷おれが處へとまつたといやれな張御符せへ持てけへればおやじはあやなされるハナ金イ、エサおやじよりやアおふくろがやかましくつて成りやせん(かれこれはなしの内にはどなく女郎屋の前にさしか)

る)谷さあ是からは日かげものだ(とあせ手ぬぐひを出して笠ひもへはさみ鼻から口をおひかくし人目を去のぶといふ身をする)金なせそふなせんす谷こいらぢうの女郎共がみんな知て居から見付るとやかましくつてならねへアノ今のやつが見つけやアしなんだか金イ、エあれは何屋へ谷いづみやさ金わたし共が友達が和泉屋へ往たといひやしたつけ谷それは小いづみだろ和泉屋も大見せと小みせと二軒あるよ金大見せと小みせはどうして知れやすねへ谷めえら戸が大みせから紙が小見せさ金何處がへ谷見せの後がさ金ひとまきりさびれたと聞やしたがそふもごせんせんね谷ナニサせんてい初中がさびれはまねへけれども初ては普請が悪かつたからどの内も大かた普請を仕直して引越してその跡が明店で有た物だから知らねへやつらが見て悪く評判をしたのさホンニ上總屋の普請を見なすつたか金ナニサついぞこつちの方へはめへりやせん谷聞ねへ階子が黒ぬりだあナ金とんだ事たね何處から出た内でごせんすへ谷氷川から来たよ金どれがそだね谷ソレその左りのさ金ホンニえへ二階だねソシテあの寺は何ンとい

ひやす大きな物でごせんすねへ谷あれが大宗寺庭が又とんだ大そうじだよ金泉水でもあるかね谷泉水もあるが畑もあるおそろしく廣いよ金見られやすかへ谷随分見られるとも二分いたむと女郎をつれていられるは金それはおつだね谷せんどもつれて往て笠をぬすんだり何かしてとんだおもしろかつたよマア何ンにしろ一盃のんで往ふじやアねへか(と坂見屋といふ茶屋へはいり)谷か、さんどふしなすつた(坂見屋は後家持の茶屋なり谷粹はあまり物にもならぬ客ゆへさのみとりはやしもせすたるがいのあしらいに見へる)坂見屋の後家キラズこれは谷粹さんどふなさりましたねつからお見へなさりませんねあなたよふりお出なさりましたサアおあがりなさりません金アイ御るしなせんしナント谷粹さん足をあらいてへ物だね後家あい(立んとする處を)谷どれ、おれが(とまこなしぶりにたらひを出して水をくみこむ)後ちつとお待なさりませし一寸とわかつて上ませう金ナニ水がよふごせんす後それでおつめとふ御座りませふ(とい、ながらどうこのふたを取りゆびを入て)是も同じ事た谷ナニよしさ、金手ぬぐひをあげ

ふか谷ウ、かしなせへおれのは汗手ぬぐひで役にた、ねへ(二人とも足をあらひあがる内に盃だいなど用意して二人が前へ直し置となりの女房らしきをよびよせ耳へ口をあて何やらさ、やく)谷か、さんかめへなさんなよ後アイけふはあやにく五郎をばおやしきへ遣しました金御亭主はへ谷ナニサまんこう御前だよホンニなせ入なさん後どうも氣に入た男が御座りませんハ、、(坂見屋様も)外トよりかけ来り)か、さんや、後ナンダ御客があるぞおまぎをしろ谷むすめどうした大きく成たの後イ、エもふどうも形ばつかりでいたづらにはこまりきりますも(谷粹が持来りし風車を見付て)か、さんあれがほしい後ナニサあれはおみやげになるのだ(金風車を取て)此事か谷サアやろう、後ナニおよしなさりまし直に悪くいたします谷悪くしてもよしサア、後ハイ是は有難ふござりますいたいきや、エ、仕合な(此内に酒のかん出来肴もとなりより持来り則出す後サアお一ツお上りませう谷マアはじめなせへ後ハイ左様ならお畑を見て上ませうへエあなた金あい後憚ながら谷金公お先へ金は後お肴をお取

なさりませし谷あいサア金公さそふ金ちつとあげやせうか谷まづさ後サアお上りなさりませし金愛へくんな後さあ、お出しなさりませし金は憚りつぎなさんなよ後ナゼ上りませんかへ谷宗旨ちげへさ後それでもお連立なすつて堀の内へお出なさつたじやアござりませんか谷是は一言もねへわい 三人ハ、、(ホ、、後さあいたいきませう金そんならサア後 是はもふけつくおむづかまう御座りませふ(此間暫く盃事あり)後こよひは何處へお出なさりませ谷おらア何處へでも往く氣だかぬしがまだきまらねへよ後なせで御座ります金どふも内がやかましくごせんす後それでもどうせ今からお歸りはなさりませへお宿はへ金下町でごせんすホンニ何時だねへと椽へ出てそらを見る後モウおつつけ暮ます谷サアもふどふで埒はあかねへお覺悟、後何とおつちやつてもモウお返し申事では御座りませんソシテもふお遅ふ御座ります(金十町がこわいろにて)モウせひに及ばぬ谷どふでもか、さんのすゝめはきゝめがあるわいきま、トキニ何處にまよふの金カノ上總屋はどふだね谷普請ばかりで玉が能ねへ後橋本はへ谷ま

つびら御免だ後ナゼエあれほどうつくしるものを谷
 是は御挨拶痛入りました後ハ、ハ、ハ、何處がよふ御
 座りませう山城かね谷是も同じくだ後成ほど谷粹さ
 んは性悪だぞ(暫し考へて)ホンニ紀州に落札(一
 金ゑへのがあるかの後女郎衆は揃てよふ御座ります
 金そんなら夫(一谷まだ早かろうの後アイ暮てから
 がよふ御座ります谷モウ床は仕廻たかの後もふ仕廻
 ましたらう金ナアニまだ結なさらすとよふごせんす
 せへ谷見ともなくはねへか後ナニサさん(一で御座
 ります又たとへお髪は悪しともさ(一と谷粹を尻目に
 かけてあやなす)谷又か(一さんの上手も久しいもの
 だ道理でもつさん若死だ(いろ(一むだをはなして
 居る内に)坂見(一屋敷よりかへり)是はどなたも
 よふお出なせんした金あい谷どふだ色男久しいの橋
 本以來だらう五郎ホンニ何と思召てお出なせんした
 花あふぎへばかりお出なんすね谷(花あふぎへいつ
 た事はなけれども金公への見へにとふかいつた事の
 あるよふな顔をして)嘘ばつかり五郎ナニサさんし
 ておりやす谷へエ悪い所を見られた後ひもじかろう
 マアめしをくわつせへ五郎イ、エおやしきで給てか

へりやした後トウダよこしたか五郎アイ三分取て來
 やした跡はぬしが明後日持て來なざる筈でこせんす
 後久しい物さソシテ何は文どもはみんな屈ひたか
 五郎アイみんな御返事を取てめへりやした縁志さん
 はお留守でこせんす後外のはゑが龜本から二三度
 返事を聞に來たからちつと休んだら一寸と出して來
 さつせへ五郎アレハどれだつけね後ソレ丸の内さ
 五郎へエ平さんかへ又無心だらう後油は買て來さし
 つたか五郎アイかうじ町の仲藏(一かひやしたサア後
 フイよし(一もなんだ見せな後ばかめ油だ喰ふ物
 じやアねへ(一とか(一さんねん寝しよふ谷もふ寝るの
 か床いそぎだの金サア構はずと寝せなく(一後ハイ左
 様ならおゆるしなさりまし(まくらかやを出し娘を
 ねせ付るまばらく有て)後御ろうじましモウふせり
 ました金おとなしいねへ後あがき草臥て夜はよふふ
 せります(日もくれあんど(一ともす)谷モウいかふか
 の金あい後五郎どんつけて下せへ谷か(一さんはいき
 なさらんか後まいるはわたくしがまいります(谷金
 二人とも帯を直しなどして身ごしらへする内に後
 もゆかたを出してきかへこしのものすげ笠をも戸た

へな仕廻錠をびんとおろして)後五郎どんたのむよ
 馬幸さんがござつたら待せもふしておかつせへ直に
 歸るから五郎龜本への返事を一寸とさん出しておく
 んなんしな(一と出してわたす谷金たがるに何か耳そ
 うだんして金ふところより二分出してわたす(谷取
 て紙にのせ)か(一さんサア後はい(一といた(一き紙に
 ひねり)お預り申す(前さんちやくへ入て帯には
 さむ)金サアめへりやせう(五郎庭へおりはき物直す)
 後(同じくおりてうちんさげ)さあお出なさりまし
 五郎左様なら御きげんよふ後五郎どん門の明りがま
 だつかねへによ金とんだくらい晩だね谷その筈さ(一
 ウト四ツ八分の月だもの後モシいよ(一紀の國かね
 谷あれし(一後お見立なさりますかへ谷金公どふぞ
 ようの金どふでもよふごせんすか(一さんどふするが
 よかろう後ナンナラゑへ引女郎衆を出し申ませふか
 夫とお見立なさらばお見立なさりまし谷ソノゑへ
 といふのはとしまか新ぞうか後二人とも中としま衆
 でどんだ氣どりのゑへ女郎衆でこせんす金そんなら
 夫にまよふかの谷まかし呼出し遊びはするなと指南
 集にもあるせへソシテ手にはの悪い物だよ後そんな

らお見立になさりまし谷(いきな聲して)見立られた
 が嬉しさに(一紀の國屋にいたる)若(一お出なさり
 まし後半兵衛どんお見立だよ半兵衛あい(一とかげみせ
 の方へ行て)お見立がごせんすよ(谷金二人は張みせ
 に居る女郎をまじり目に見ながら上る後もはき物取て
 ながら)谷(聲をひそめどふだ金公見たか金耳を出し
 な谷ウ、ハ、ハ、後どふで御座ります谷アノ藤色と
 の後今かんざしでつむりを搔て居なさるのかへ谷イ
 、ニヤサこつちから三番目のさ後アイそしてへ谷ア
 ノ團扇を持て居るあさぎた後アイ是半兵衛どん三澤
 さんと綱木さんだよ半ハイよふ御座りますサアお上
 りなさりまし(一と先へ立て二かへ谷金もついで後
 てうちんけし同じくあがる)半(表ざしきのせうじを
 あけあんど(一とぼし)さあ是へおはひりなさりま
 し子供お茶を持て來いよ(一といひながらいそがしそ
 ふに下りて行)金ゑへ内だね後去年の夏か普請をい
 たしました谷普請の内はとなり居たつけの後アイ
 左様で御座ります(子供(一茶を三つばんにのせて持來
 り)あいお茶アおあんなし後置いていきやドウタ眠
 そふな顔だのはるの寝ておりゐした谷押付見せへ出よ

ふがそのよふに眠がつちやア客衆がいやがるせへはる。まつたかへ後ホンニあなたへ水あげをお頼申まや。はるおがみるすおめへまでおんなじよふになぶんなんすにくいぞ。半(女郎のたばこぼんきやくたばこぼんも持来る)又何をさわぐ谷イ、ニヤサみづあげの約束よ半ナニサ水あげはわたくしがとふにいたして置ました。はる又半兵衛どんよさつせへすかねへぞよ引(と半兵衛がせなかをたゝゐてにげる)半遊たとつてにがす物かと(つゝゐて下へ行)金女郎の名はどうくだつけの後藤色が綱木さんあさが三澤さんで御座ります。谷ぬしの注文の二人はあの内じやアねへか後あい三澤さんはわたくしが申たので御座ります。谷金公きまりだせへ金なんなら取替やせうか。谷ゆふもんのふんどしだぞ。半(てうし硯ぶた持出あんどうのおき處を直しろうかへむかひ)さあお出なせんし綱木、三澤(二人來り口を揃へ)どなたもよふお出なさんし三おかさんどふしなんした後はる綱なせおもとさんを運て來なんせん。後もうふせりました三おとなしいねへ半は、いかりながらあなたへ上ませう。金谷粹さん谷まあ吞ねへ金(半兵衛が耳へ口をよせて)あさ

ぎへ半はる三ちつとあけ申しんしよふ金まづ(三のみてさかづきを臺へのせる半心得て谷粹か前へ)谷おさわりもふしやせうか三まあお取あげなんし(谷のみておく半又こゝろへて綱木か前へ)綱(さかづき取あげのみて)おかさんあけんしよふ後チツトおさへもふしやせう綱まあ吞なんし後アイ左様なら半サア出しなせへ後つぎなさんな半なせへ後まだお約束のお客がごせんす三夫でも一つや二つはよふおせんせう後あゐ(とうけてのみひかへて居る)半ソナラおばさんお頼申やす後ナゼ吞でいきなせへな半イ、エ後にいたいきやせう今夜は下がいそがしうごせんす後清介どんはへ半風を引て寝て居やす後ホンニ夫じやア聞しかろう半ハイ左様ならどなたも緩りとあがりましたおばさんよろしくお頼申やす(此間にすぬ物はち吞も出る)後サアお吸なさりましモシ谷粹さんお久しぶりてちつと憚申ませう谷そんならおれも久しぶりておせへよふ後是は悪い事を申ましたつけのホ、ホ、金おさかなをしようか(と硯ぶたを引よせて)何がよかろう是かの谷ナニサ後家が玉子を喰てどうするもんだ後谷粹さん又わる口をお

つせんすよ金そんならくわぬかの後左様ならソノびわを下さりまし金おつナ望たの後ハイ谷びわといふ物はめんよふ女の好ものだのおらもびわになりてへ物だ綱(谷粹が方をじろりと見て口の内にて)すかねへ三サアおかさんのみなんしつぎんせう後イ、エ爰へ下さりまし三澤さんのお酌にはこりました三ホンニ此ちうはよくのみなんしたの後その代にモウ漸かへりましてあすの朝迄何もしらずにト寝入にふせりましたからほうくの御客さん方に叱れました夫にあくる日は一日頭痛がいたしますね大きなめに合ました覺へてお出なせんし綱ホンニあの時はわつちもいつぞ酔いしたよ三そんならちつとつぎんしようから出しなんし後是は憚でござります。ト、ハイ谷粹さんおさへを給ます谷どふだ丁どあるかね味方見くるしい酌だぞ三ナニサ一盃つぎんした後アイ左様なら谷もふ一ツかの後とんだ事をおつしやるぞ谷お前にやアわつちが酌をしやせう谷こつちはこつちどうしたの三ひるきをしなんすと聞いせんよ谷ラツトあり(後お肴をあげませう何が有望へなんでもよし)後そんなら是をあがつて御ろうじま

しイッソよふござります。谷例のびわがびわ突出しのその日よりだ金ひより(ひより二人三人谷むにんだノむにん)とむにん夏の蟲とんで火に入金にいら(く)にいらのつらへ水さ、く、綱とんだゑへね谷ナントゑへ口だろう半口乗て無盡を買なせへ無盡とは何の事かぞんしいせん谷なむさん雪のあくる日だ綱それも知りいせん谷てれたといふ事さサア金州さそう金こりやアちつと上やせう谷夫かいやだからぬしにさしたのだアなそんなら一寸とお頼申やす三おあゐかへお手元ともふしんせうか谷そりやアむこいマア(三そんならおかさんつゐでおくんなんしアイおせんす谷モシエあゐは手本とやらわたしも灰吹にのませやすせへ三ナニサみんな給んした谷何かは知らずありがてへか、さんおれにもつゐでくんな後サアお出しなさりまし谷ラツトよしさあ金公金か、さんは、いかりながらイト谷金公はどふもらちやアあかねへ三ナゼ吞なんせんかへ後アイねつから上りません綱客衆はのみなんせんがよふおせんすよ谷こりやアおらも止ねへけりやアならねへわい綱ぬしのこつちやアおせんせん谷ア、それで安堵

した金おめへお近付のためあげんせう網アイあがらんそふだからあげんすめへ谷水いらすにおれがつごうか網よしなし給んせん谷それでもおめへ今此ぢうは酔たといひなすつたじやアねへか網つぎてによりいす(是よりだん)盃廻り時をうつす内に膳出る(はるのどなたもおめしをおあんなんし谷めしには氣なしたす後お茶漬になすつてあがりまし牛兵衛何も御座りませんよふあがりましお氣に入れた物をおかへなさりましはるのソレお汁でもかへてなげろよ(といひすて、行)三サアどなたもおあんなんし金アイ谷粹さんどうでござんす谷そんならつき合てちつと喰ふかかゝさんはどふだ後イ、エいたいまますまる三ホンニ給べなんせんか後アイいへへ網わたし共が内のまんまもちつと喰ひ見なんし後ナニお時宜でも何でもござりません御酒を給るとどうもいけませんホンニ金公さんは御酒はあがらすたんと上りましお汁はへ金アイござんす(暫く有てめしすみ膳さげり)谷コレあつちへいつたらの水を一盃持て来てく

ある三そんなら往てめへりやせふ(三、網着かへに下へ)後わたくしもお暇にいたしませう谷モウ一ツ呑ていきなせへ後いへもふ大に酔ました金エ、ハナもふ寝なさう後イ、エサまだお約束のお客が有はづで御座りますそしてまだ龜本へもよりますあすの朝は何時へ谷おらアいつでもえへ金州何時金七ツ半さ後ハイさよふなら御きげんよふ二人おさらば(金アノか、あもよく呑やすね谷ウ、せんでへ勤をした女だどうだ氣があるか金どふも色が黒いね谷大木戸のわらやのか、あは見なすつたか金いへ谷今度見なせへとんだうつくしいよ金今夜のとはどうだね谷ホンニおれかやつもうつくしさあ美しいがちつとけんてへふるよふだのぬしのはおとなしそうだ金成ほど網木とやはわつち共が齒には合やせん谷あ、ゆふやつを買こなすとおもしろへもんだよ牛兵衛チトあちらへお出なさりまし谷床といふ所かサア何處だ(牛廊下さしきて御座ります金一處か半イ、エおまへは下で御座ります金それはわるいの半イエその代り涼しいよい處で御座ります先是にお出なさりまし(すいりぶたてうしたはこぼんとはこぶ)

はるの(ゆかた持来り)アイお召なんし谷そけへおきやきよく水を呉ねへの(はる今にあげいすよゴウ半兵衛どん下でよばつしやるよ半それでもからだだが二ツいねへものヲ(とい)ながら下へ(はるもつゝゝゝ行)谷サア着けへよふしわになつちやアいてへ金どれがそだね谷どれでもえへハナぬしむきみしぼりにしやおれが仲藏島にしようコレ見や此袖のちいさサそしてでへぶ汗くせへ(ふたりともゆかたに着かへる)金ドレおめへのきせるをお見せなせんしるへなりだね谷ナントよかろうそしてとんだ目があるよさくら張を二本一處にした上に角蔭の女郎にかんざしを貰て足たものヲ金ホンニよつぼとござんせう谷いつでも二ぶつつの早玉さ三(ろうかにて)網木さん(網(奥ざしきの方にて)アイ今いきいすよ三ヲヤぬしたちやアいつの間に爰へ來なんした谷先おとてへから来ておりやす三そりやアほんにぞんじおせんでおかまるも申しせんサア下へお出なんし(と金公が手をとる)金今にいきやす谷畜類めつれていきたがるの三ぬしのおまやまに成るせふかとおもつてさ谷いらぬお心遣ひさまだかんじんの相手が來ねへ

もの三今にお出なんすのさ金おめへ下へお出なせんし谷そんなら往て見よふか(三)金公が帷子羽折を持て)何かをわすれずに持ていきなんし金こうとよし(さあ)三人ともおりる)金何處だ(三)爰でおせんすよ谷是はエ、おすめへだしかしへつつかがねへの三おがみいすよしなんし谷へつつかの代にきり(す籠が二ツあるが中には何も居ねへの三此ちう客衆に貰ひしたがつい逃した金どうして三ナニサはるの草を取てへてやるとつて二ツながら逃しわしたいつを悔しくつてわつちやア泣いたよホ、、谷エ、サその代りおめへが又はやく受出されるはな(三)きせるを取て谷粹をた(く)谷アイタ、(網)來りあんどのかげへすわりかんざしにてあんどをむせうにつ、きやぶりて)じれつてへぞよ引金何がそんなにじれつてへエ網なんでもさ谷色事かたし盆の仕廻かぼんの工面なら案じなさんおれがうけ込は網それはモウおかたじけなふおせんすお禮から先へもふしんす谷是はお禮でいたみ入やす網ホンニおめへもえへかげんにしやべりなんしひとりで口をきなんすね谷今までおめへが來ねへから

二人めへの口をきいて居たのさ綱それは御苦勞さホ
ンニ三澤さんお前の何さんは富さんに似て居なんす
ね三アイしづかな處なんざあいつそよく似て居いす
よ谷似た者は烏瓜かぶらと拳丸けんたまの梅漬だ綱まだアむだアい
んなすよサア往ておよりぬし達の邪魔になりい
すサアお出なんし谷是は大の不首尾だ御意にまかせ
てサアめへりやせう金もふちつと咄してお出なせん
し谷どふもか、あがやかましいよ綱エ、あつがまし
いのふ三そんならお出なんすかお休なんし綱ハイあ
なたおやすみなんし金ある御きげんよふ綱三澤さん
三アイもふめへりやすめへ金谷粹さん明日ホンニ
寝忘たらどふぞ起しておくんせんし谷サアおさら
ばく三モシくたばこ入が有いすよ谷ツトあり
がく三谷綱二かゝるへ金三はかやに入三手をたたくは
る來る三三はるのか是エ、子だからのよふく火をい
けてのそして茶も一ツ持て来てくりやはるあい金跡
のほうをよく押付なせへ蚊がへへろうよ三じよさい
はおせんせんよふくしわした金今夜もあついのふ三
それでもいつち愛の座敷が涼しうおせんすよはる火
入茶持來る三三、よくしたくはるぬるうおせんす

三ヨイよしく往て寝やはるアイお休なんし三茶を
呑なんせんか金いやく三たばこへ金たばこもい
や三ヲヤきついあゐるぞがしきそんならおらも呑め
へ(とうちわを取て遣ひながら金公が方へ風の行よ
ふにする)金ア、急へ風た三是ばつかりお氣に入
したの金まだ氣に入た事が有のさ三なんだへ金なん
でもさ三サアいひなんせんとつめりいすよ金ア、い
てへいをふく三サアいひなんし金外でもねへ
美しい處が氣に入だ三ナゼそんな事をいひなんす
(とこころる)金ア、お免だくどふもそれでもう
つくしい物を三まだいひなんすか金ア、あやま
つたく三そんならだまつて寝なんすか金寝るとも
く三ぬしやア年はいくつへ金をて、見な三あてん
まようか二か三でおせんせう金三十か三ナニサ二十
のうへがさ金こりやアありがてへ酒でもかをふ三ヲ
ヤそれよりうへかへ金六さ三とんだ若いねわつちが
年をあて、見なんし金コツト二度目の厄年が過たる
う三ばかりしいよしておくんなんし又くすぐりいす
よ金ア、そんならほんにいをふ二十三か四だるう三
よく見なんした二でおせんす女といふものはふける

物だねへ谷粹さんとやらはへ金いくつだか知らねへ
三ヲ連衆の年を知りなせんかへ金ナニサそんなに
心やすかあねへ一座は今夜が初だもの三ほんにかへ
いつそよく口をきいなんすね金こうまんばつかりい
ふよ三新やしきかへ金う、三ぬしやあ何處だへ金わ
つちも新やしきさ三嘘をつきなんし今度からひとり
で來なんしよといふ事もねへさおさげすみも知らね
へで金來ねへでどうするもんだなまかし十日ほども
前から仕廻を付すばいつでもさしだらう三又てうし
なんすか金あ、あつく成た三うちわを上んせうか金
ウ、かしな三手水に往て來いすよ金そんならどふぞ
茶を一盃持て来てくん三ソレ見なんし人の呑なん
せんかといふ時は呑もしなせんで(といひながらか
やを出てびようぶ引あけろうかをばたくあとは金
公一人成世間も物おとまづまりてとなりの咄手に取
ることく折江せえあのぬしやアあすも居なんすかへ田舎
右衛門まだ三晩げばかりもちづけのヲすべへさ折そ
んなに居なんして首尾が悪くはおせんせんか孫アニ
サ今度もうらはお地頭さまの御用事出たアに依て
あせ町宿へさがらすとおやしきにとりようのしろ

とつてせちにおとめなさつたアけれどもお御屋敷
にとまつたア時にやア御門がげへにやかましくつて
出べへにも入べへにもやれ切手だあ事の引手だあの
とつておつくうだアから君に逢事がならねへと思や
んのしてあんで町宿へさがらねへじやア御用事が
辨じもふさねふとちくのヲふん抜て町宿さあに居る
もんだアからアニはあ三ばんげや四ばんげいちづけ
のヲしたアとつてあせふすべへ折夫でもひよつとお
やしきの御用が有たらどうしなんす孫そのよふなア
ぐんもして置たアよ折どうしてへ孫定づけへの與太
郎を宿さあに置たアから御用事があればふとつばし
り注進をする申かわしたアよしハアちんじちうや
うで間にあわねへとつても御家老さまでもあんで
ひでんの入るもなアねへあせといつて見なさるこ
いつちやアどふかはあみそをあげるよふだあけれど
もうらが曾父祖の代からでけへ御用金の出して置も
んだからあにハア寝せべへとおこすべへとうらが心
儘だあよ折へエそんなら田舎でもさぞみんながこわ
がりいせうね孫そりやアはあ申にくいこんだが新田
のヲ孫右衛門といつちやア誰えらねへ者もねへ分限

の内でも一といつて二たアさがらねへよ折わつちやアねぬしが此月はじめに來なんす筈で來なんせんからいつそ案しいしたよ孫ア、ちくだんべへ折せんなら誰にでも聞て見なんし法印さんを頼んで八卦置たり待人をしたりまのしたものを孫いかさまハア縁ぞくといふもなアあじなあもんだよ去年の正ぐわち御年頭に出府のヲしてけゑりがけにふと晩とまつてからたげへに根性ばねのぶちまけるよふに成たアも前世のゑんにんぞくだんべへよ折なんでもわつちやアぬしの處へいきぬすによ又いなかで性惡をしなんすなよ孫でへせんもんお身さまにゐにを見けへへ折なんぼぬしがそふいひなんしても先からまかけられなんしたら只は置なんすめへ孫それに付て咄しがあるよ去々年うらが國の生土の祭りが有てかぶきのヲした時にうらも役者に成てなかやの勘平のヲしたらゐにがばあ江戸役者のよふだあとつてぢよなめいたアほどに隣村の庄屋アどんのおまんぞようががらうつぼれてのおめへまいらせざるべへ候の惣證文のよこしたア事よそれからあおき名が立て村中取ておつけへしたアよ折それ見なんし孫イ、ニヤサそれも

はあ今じやアおつばなれたアからあせりん氣する事はあざんねへ折ほんにかへ眞實わつちをかわいゝと思ひなんすならさつきの事を忘れなんすなへ孫ア、わすれべへかたびらふたあつとふとへ物だのモウあにもいらねへか折どふもそんなにぬしに計はいひにくふおせんす孫アせそんなきやく心だアあんでもいひなさろ折そんならいひすよアノネ小遣にしいすからね孫金か折アい孫いくらへ入な折二兩ばかりおくんなんし孫あしたやるべへよ折遅くつてもよふおせんすいつそわつちやア氣の毒でおせんすけれども外に客衆がおせんせんから孫アニサお身さまがいふ事ははあおでへかんさまのお觸だアとおもふもの折おんにかへいつそ嬉しうおせんすよ座二階 谷是つと起ねへ網ウ、谷是さ用があらアな目をさましなせへコウ、網おがみいす寝かしておくんなんし谷マアちよつとこつちよつむきなせへよ網エ、モウうるせへよしなんしよ谷エ、何だ此ふんばりやアゑへかとおもやあがつてあめへことばを懸りやアつきあがりのしたびらうどべりのぼんごさに寝ると思てめつたに大きな面アしやアがるなんぼ高くとまつ

てもたかい飯もりだ此よふな貧乏屋てへでやすくされるよふなやろうじやアねへよ惣てへいめへましい(とたばこぼんをほうり出す火はなし)網(おき上り)もしへ何のこつておせんすおつせんす事があるならまづかにおつせんしたかよふおせんす新ぞう衆じやアおせんすめへしこわがりもまゐすめへ各くそをくらやアがれまづかにいおふが高くいおふがおれが錢でおれが買た座敷でおれが口でおれがいふに何の願着があるもんだそれが悪かアいわれねへよふにしやあかつたがゑへは細わつちも勤る處はつとめて置ゐした谷何だ勤たあんまり蟲がゑへ百合若大臣の娘だかまらねへがあしかから五節句を取るほどよさりやあがつて人間のゑへ第一うぬが名からして氣にいらねへ蕎麥切へ入る温鈍の粉じやアあるめへしつなぎだのなんだのおしのつゑへつなぎよりやアつばきをなめてゑへ風だ(金、三も來る)金谷粹さんこりやアどふでござせんす谷まあ聞てくんねへ背から今までふさりやあかつてちつと起したとつてそつちこつちいやあがるからあんまりいめへましい金それでもおめへでもござせんすめへまづかにおつせんしな三

アイサお腹のたつ事がおせんしてもまづかにおつせんすりやアよおせんす各なんだなのおめへ方まであじに並びを付ておればつかりつき出すのか金どうしておめへを突出すもんでござせんす網ナニサおかめへなんすなわたしもそうおふにはつとめいした谷又口を出しやアがる三綱木さんおめへはマアあつちへいきなんし網アイそんならゑへよふにお頼もふしんす(と立てとなりのざしきへはいり)歌松さんおやかましうおせんせう歌松アイなんだかむづかしねへ網ナニサもふいつそすきいせんよ歌たばこを呑なんせんか綱まあ往て來いせう三成ほどお腹を立事もおせんせうけれどもどふぞきげんを直しておくんなんしわつちがどのよふにもあやまりいせう谷そりやアもふ思しめしおかたじけなふござせんすがあんまり安くするからのこつてござせんすしてマアおめへの前じやアいひにくうござせんすがこゝれへ來てあつかわれたといつちやアどうもげへぶんか悪ふござせんす大きな聲をしていふがみめでもねへけれどもあんまりでござせんさあナニほんに綱木さんも悪ふおせんすがあの子も若ふおせんすから氣が付なんせんそしてぬ

しも金公きげんよく居なんす事でおせんすからちつとは御不肖もなんしてマアお休なんしよ谷ナニサ今からけへろうの何のとおやしき者かなんぞのよふにいやみからみをいふのじやアごせんせん三をりやアもふ何おめへを悪く思ひす物でおせんす堪忍せへしでおくんなんせば何も申事はおせんせん金モウ夜があけるそふだ坂見屋も来やせふからきげんを直しなせんし谷ナニサきげんを直すの直さねふのと寝起のやゝさまじやアあるめへし三コソサぞんな事をおつせんしちやアふしが立て悪ふおせんすなんでもわつちにおくんなんし五郎八（ろうかより）はいお迎でござります三五郎どんかとんだ早いねサア這入てたばこを呑なんし谷よし遅いくれへだぞサア金公けへろうゝ金ぞんなら着けへて来やせふ（と下へ三も一處におりて）三あんなにいひぢらけにして置ちやアおかしゐもんだね金ナニサうつちやつて置なせへ三そんならぬしやアかならずちけへ内に来なんしよ谷粹さんとやらはどふでもウ来なんすめへ金廿七八日時分に来よう三けふは三日三だねぞんなら待て居いすよ（金着かへる内を待かね谷二階方おる）谷ど

ふだゝきついで感通かんつうだの人のこゝろも知らねへで金サアもふよふごせんす五郎モウひとりの女郎衆はへ谷よしさゝ三どなたも憚りもふしんした（金公がせなかをつゝきて）ほんにへ引金アイさらば谷三さわさんおやかまじうごせんしたろう三アイぞんならとうぞまた此頃にお出なんし谷正月の十二三ある時に来やせふ三きついであいそうさおさらばへ牛兵衛御きげんよふ又おちかい内に金お世話ゝ（くゞり戸がぐわらゝ）五郎夕アはとふでごせんした谷ナニモウいめへましいふんばりよ寝てばかり居やあがつたからいざこざをいつたら怖がつて下たつけがよゝゝおそろしいそうでけへるまでつらも出しゑへねへ金公なんざあとなだ事よ五郎みさわさんのほんにへ引か氣に入やせんよ金ナニサ谷粹さんをなんでも運もふして来いとつてさ谷おれをばよつぽどおそれて居よふよ（いろゝゝはなしの内にかみやの門ト）後おはよふござりますサアお上りなさりまし金イ、エもふ遅く成やした谷モウ直にいきやせう後そんなら煮ばなを一ツあがりまし（脇ざし笠など出して）夕アの残りを上げませう（と前きんちやくへ

手をかけるを金（おさへて）何よし取て置な後それにはありがとうござります谷ぞんならおさらば後ハイ左様なら又とうぞおちかい内にお出なさりまし金アイおせわに成りやした五郎どなたも御きげんよふ後モシお羽折のお袷がまだおれません金アイさあおさらばゝ〇夏の夜はまた宵ながら明ぬるを知らせよふとて鳥がかあゝ鐘がごんゝ春米屋ががつたりゝ

跋

粹とは梅干、野父のやとは鶏の名かと、きくやうな新宿田舎に、あやめ咲とはまほらしとぞめきの聲有頂天にひいき、ヤツアサコラサの息吹いきふき坤軸こんじくにこたへて、茶屋はどんゝ拍子木ひょうしきかちゝ草鞋わらじうる老父らふもいきはりを覺へ、團子商だんじやうふ賤女せんじやもよしなんしとはねかけ、桑田さうだ變じて海道かいだうの繁昌はんじやうを唯一冊いちさくに書ゑるせしもの、二日酔ふたひ酔のちらゝ目に見れば甲驛新話かういせきしんわとあり、嗚呼吾黨わがとういきちよんの君子くんしをしてこれにあそはしめば、則其尻そくしつまらざるにちかゝらん、隨行散人ずいぎやうさんじん隨歸ずいきの枕上に跋す

安永乙未秋

新甲館藏書

甲驛新話終

粹町甲聞

序
 大士さんの御厨に曰。驛は。變驛なり。あたるもふしぎ。あたらぬも亦ふしぎなる哉。こゝに山手馬鹿人が甲驛新話の一卷、ふしぎのあたりをとりしより。書林文屋安雄なるもの。好い味をみてになりて、床の内にひめ置たる。粹町甲聞の文枕。世に並べ行はんとし。来て例の序をせがむ。予書林の爲に序をかゝ事。凡三千三百三十三度、三橋亭と高をあらそひ、新不二山をも張ぬくべし。多くの中でこなさんの。本に度々序する事。義理一片のあだつきならず。そのあだつきのつきくにはやり。日には何度泣らめや。



自序

自序
 齋とろゝと鳴は天氣と知。鳥かあゝと啼ば。揚場へ米がこぼれたと悟る。爰といへは向處。安けらといふとこんけらと。先走る通の世の中。洒落とはあつかま敷島の歌人ならぬむだ人は。居ながら飯をくふく寂く。宏やくも香交の作者顔。がをとの外題を持たながら又も後編あるべきにと。進められたる此一冊。甲驛新話の其あとへ。まくら並べし。粹町甲聞。久しいものと笑は。否。

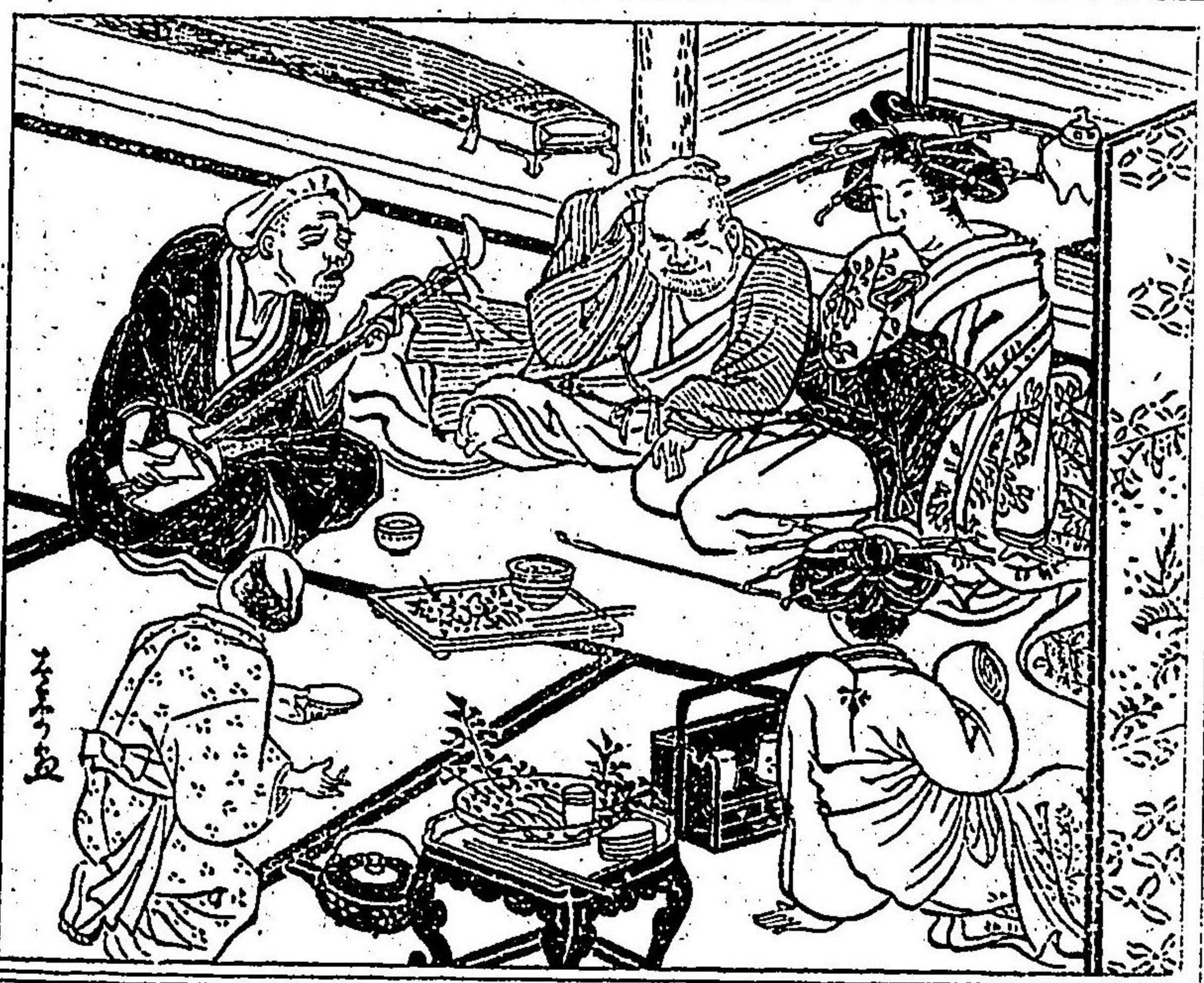
山手の馬鹿人

小便桶のうらの

灰小屋に序す

粹町甲聞

魚田の火の影は寒うして何をかやゝ驛路の鈴の聲は夜山の手から下町かけて名にしおふ逢坂ならで大木戸のせきこんだのか身せたか知も去らぬも通ひ帳てうどめたる其敷は八十軒餘の茶屋大みせ鶴呑にしたる粹な客まだ給つけぬ野暮な奴意氣な人柄いかぬ風みなそれくの樂しみに飲めや調べや一寸先はやみくもにさはぐとなりはまつぼりと客渡車手めへ食を喰ねへか瀬川わつちやアいや。遊車せつかく大吉がおゐて往たせへ。瀬川それでもいやだものをほんに松野さんがのちにくをふといひ、したつヶ遊せんならよびやナ川松野さんく。遊大きな松野さんく。松野なんでごせいす名のかどが丸くなりいとわらひな川お前お食を給なんせんか松わつちひとりやアいや川わつちもたべいす遊手めへはいやだといふじやアねへか川連があれば喰すのさ松わつちイの付ゑへにネ遊そうだらうと思つたよ。いつも五六盃くふもの川よしなんシ。外聞の悪い遊それでも嘘じやアねへ川



また云なんすよと口のはた 淀ヲ、いてへ〜。誤まつた
 松そんなら茶を取寄ようのと手を子供お文あむ引
 川お文や〜文あむ引松エもふ此子アさつきから
 呼あナ丈夫でもお部屋の用をして居いた川ナゼお
 針さんハ文まだ歸りなんせん松さうだらうよ。何か
 もめる沙汰だつけ川を出して是をばつき出すのかの松
 そうだそうよ。どうでもこつちのかが。かのだから
 の文アイ何の御用でおせんすへ川エ、はせしねへ子
 だ。アレあすこにの。薬鐘が有からあれへ茶アくん
 できや文あむ引を 淀お針さんとはアノ丈の高へ
 のか松ナニサ丈はひくいハナ川ソレ此ぢうお前が廊
 下で呼かけなんしたのさ 淀ウ、あの密夫本田か松嘘
 アねへ文アイお茶ア持てめへりゐした松よく来たま
 た。サア川さん盛いすよ川待ちなんし茶碗を出しい
 せう。モシお前もおあんなんすかへ 淀喰ねへじやア
 さ川ヲヤノ、又かへ 淀ナニさつきやアちつと外ア喰
 ねへものを川あれでもちつとかへ蟲のゑへサアそん
 なら箸う上んまよう松いつも五六杯とはぬしの事た
 らう 淀アイ五六杯たアわつちが事。ぞろつべへとは
 お前の事さ、コレさつきの物を出さねへか川ほんに

そうだつけのなだらめい物の松ヲヤなんだへ川粕に漬
 けた小梅さ松わつちやア又持遊びにしたあまいたの
 桶かと思ひしたまホ、〜川こりやあネ升屋の
 御亭さんが湯治のみやげさ給て見なんしいつそよう
 おせんす松淀車さん取ておくんなんし 淀ナニもふね
 へそうだ糟でもなめなせへ松エ、憎らしいの川ドレ
 わつちが見て上んせう。コレ是程あるものヲ 淀松
 野さんにやるは惜しむからさ松よし〜覺へて居な
 んしよ此間しはらく若イ者伊八はしごの瀧川さん〜といへ
 へのゆへ座しきの口まで来瀧川さんサア〜さつきから
 たり少しはらちごゑにて 淀川さんサア〜さつきから
 呼やすはナ一寸御出なんし川どうも隣の騒きで聞へ
 ねへものを立て 淀誰か来たといふ注文だの松氣を
 もむやつさ本んにとなりは達者に騒ぐのヲ 淀屋敷も
 のか 淀ナニサ二人ながらめく〜さ 淀ねぶ一挺とい
 ぶ奴だのあれが本のめくら騒だ女郎衆は松その癖さ
 ん〜さ清見さん折江さん 淀とんだ事たの馴染か松
 ナニサ引付さ 淀お前は松わつちやあ色男 淀又喜太さ
 んか松ナアニ喜太さんはもう来やせん 淀嘘ばつかり
 松本の事さ新造の整典さし喜太さんへおがみいすよ
 しなんし松野さんにさういひすよアレエ松野さんへ

松聞つけ口へ袖をあてわら 淀とらへヲツト待な〜今
 の喜太さん〜はなんだへ松ありやア外の喜太さん
 でございす 淀まだ隠すか〜松ア、誤りいしたお
 かみいすそんなら正直にいひいせう一昨日の儘さ 淀
 それ見なせへほんによくするけなさるの松とつさん
 がなくつてか〜さんばかりだからようございすよ 淀
 うら山しいの川より 何が浦山敷へ 淀今来た客がさ
 川なせへ 淀金まん〜の色男たから川へへ加減さう
 に好をいひなんすね松誰が来た川武さんさ松そして
 どうした歸りなんしたか川ナニサ耳を出しな松ウ、
 、それじやアの川どうもいつそ詰らねへよ 淀車が見
 ながら ほんにどうしたらよかろうやら松どうともゑへ
 ようにさし向へで相談しなんしおさらばへ 淀ナゼい
 きなさるか松又後にめへりやせう 淀能後に来さうな
 事た松なせへ 淀喜太さの〜だもの松ゑ、
 せなかをた 淀なんだか濟ねへ顔色ツしてゐるの川
 めて出て行く 淀なつたかあおれたがゑる物
 もいらねへ事た川い〜にへネどうせお前にいはねへ
 けりやア濟ねへ事だがネ。あのね 淀客が来たから貰
 てへといふ事かきり〜いへばゑへこつちがえれつ

てへ川い〜にへサ其客がネ 淀その客もあの客もいら
 ねゑあつちイ出たがゑへ貰たがゑる女郎衆を終にやる
 めへといつた事のねへ男だ川さういひなんしちやア
 どうもあつちイもいかれやせん 淀ナゼいく氣で云出
 したものが行れねへ理屈アねへ川ソレそんなにおか
 しいのサア何もいはねへから行たがゑへ川そふして
 おくんなんすかへお前又腹ア立ちやアまなんせんか
 淀ナニ得心でやるものを川そしてお前ひとり居てお
 くんなんすかへ 淀知た事さ川そんならわつちやアあ
 つちイ行ぬすよ大吉や〜子供あむ引川コレ大吉や
 ゑへ子だからの爰の茶碗や何かをかたづけでのそし
 てあつちのたばこ益イよく消ねへやうに火をいけて
 持て来ての此烟草盆はあつちイ持て往てくりや 大吉
 あいとつける 川おめへ茶ア呑なんせんか 淀いや〜
 只せへ茶にされた物を川又そんな事をいひなんすよ
 と身もたへ 淀そんならいふめへ〜まかし座敷や床は
 やる事アならねへせへ川そりやアなあにそんなら往
 て来いすよ 淀ウ、いきや〜コレ大吉おれと寝ね
 へか大いや〜川ホ、あひそこのねへいひよう

すと今までのを廻しに遣ひす武として何がよいの川
ふとんは縮緬夜着はふうつうでもようおせんするり
をばびろうどにおくんなんし武そんなら翌直に
松坂で積らそう川ほん引かへわつちやアいつそう嬉
おざんすよ武のみぶちつと寝ようか川アイわつちやア
此ごろじやアどうかしたそうでもねむくつて成
いせんよそれでも氣のまねねへ客人じやアねられい
せんがお前のように心やすひ客衆だと氣のおかれね
へせへか猶ねむうおせんすよ武それでもあちらへ行
じやある川ナアニ行すとようおせんす武それじや悪
いぞや川そんなら一寝入ねていきあせうマアちつと
ねかしておくんなんしよ武寝忘れよふぞや川ナニサ
お前もねなんしわつちやア寝みすよと云よりはやく武
はまじくして居たれどその松野喜太さんくコレちつと
淋しきと同じくとろく隣
こつちようきむなんし喜太エ、やかましいだまつて
寝かして呉るよ松まあ用が有からこつちイむきなよ
喜こうして居ても聞えるから用があらばいつたが
へ松いゝにへ夫じやアはなされいせん是さく喜太
さんく喜エ、小むづかしい何だよとふり 松お前ま
あ何を腹ア立なすつた喜何も腹アたちやアまねへ松

そんならナゼわつちが来るとそつちらアむめて寝な
んした喜そりやアわれがむねに覺が有う松いゝへ何
もわつちがおめへにア腹アたゝせるやうな事アま
せん喜そんならナゼ宵から己ひとりねせて置てど
けへかいつてわあゝとさわめていた松あの時ア瀧
川さんのさしきでお食をたべて居いた喜食もこつ
ちでくへばるへ事よ松夫でも一昨日からねてばつか
り居てあの子たちが呼にもいかねへじやあ悪ふおせ
んさあナ喜そんなら食をくつたら直にきたがゑへは
サ松わつちも直にくる氣だつけが其うちに武さんが
来て瀧川さんが座布に居ねへ物だから勤めて居たも
のを喜夫なら又閑に咄てもして居ればゑへわあゝ
と騒ぐ事アねへ松夫もあつちの客衆がお前の事をい
つてなぶるからの事さ夫をいをふならお前も吉彌様
をきやつゝといはせなんしたまやアねへかへ喜あ
りやア又とあとい 松ありやア又なんだへサアいひな
んしゝとゆす喜ハ、ゝゝゝ誤たゝ松それ見なん
し手前の事ア棚イ上て置てからにほんにお前は除程
腹たちつほいよその様じやアこまつた物だすわつち
が往ても喧嘩ばかりして居るだらう喜ナニ其とき

やア中よくするのさ今しやア何といつても疑が有
から松それが悪ふおせんすあんな堅へ事までしたも
の疑なんす事アおせんせん喜夫でもうたがふめへ物
じやアねへ毎晩かはる枕だものそしてまた相模女に
はりま鍋とつて尻の早へにたとへてあるはサ松そり
やアはや外の女アまらねへがなんばさかみでもそん
なじやアおせんせん喜ほんに相模で思ひ出した今年
アまだとつさんが来ねへ松アイいつも鮎のとれる
時分でなくつちやア来やせん喜来たらかの事を聞て
置よコレ此手をとりの松まくらあて まあ待なんし何
處にかいざがあるよ喜何處だの松ありやアたしか瀧
川さんの客衆だよ川さんく瀧川さんく川エウ、
く松瀧川さんくといふ 伊八きたりる 瀧川様一寸御
出なさんし川ねむそうなんだな伊マア爰へ顔を出し
なせんし川おきて どうぞしたか 伊小こゑ 歸らうといひ
やす川いけねへの伊なんでも一寸いきなんし川エ、
いめへましいの とふせう 表坐敷、遊車 支度して羽
川なんでおせんすなと羽をりをぬ 遊よしやあがれ羽織
がたまらねへハイ川お前又なんの事でおせんす遊手
前が何の事たかまねへまねつてへのどうまようの

とつて露味喰をなめた姑ばゝあをみるやうなつらア
まやアがるから不便なこつたと思て何もいわすにあ
つちイやつたせへ夫に今迄覗きもまやあがらねへ川
わつちも来る氣だつけがつの寝た物を遊それ見ろ
夫アうぬが氣儘から起した事たお大名の御前様でも殿
様お目覺で御座りますと申上れば起さつしやる夜
發でも馴染になるとそこにやア犬の糞があるつて
手を取て教へるハイそこが人情公界といふもんだな
んぼおらがやうなまがねへ客だつて竹椽の蝸牛
を見るやうに潰されてだまつて居る物じやアねへ川
ナニお前をつぶす物でおざんす夫だから床をばお貫
ひ申しせん遊くそをくらへ坪皿が高蔭繪だつて
塞がなくつて調半がくまれる物か川夫でもお前ひと
りで寝ようとおとなしくいひなんしたじやアおせん
せんか遊だれも一人で寝てへ事アねへけれども凡夫
の淺ましさにやアちつとでもよくおもはれてへ思ひ
つかれてへで安目を賣たのだ安目といつたら又鶏眼
のくすりに食ふ鱧の事だと思ふがそうじやアねへよ
川それも何の事かぞんじいせんか何を申もわつちが
寝忘れたが悪うおせんすから堪忍しておくんなんし

寢忘れちやア悪いといふ氣があればたかだか寢忘も
 去ねへけれどもいかさま師が綱の伯母に化たやうに
 口さきでたます事ア知つても肝心の魂に情がねへの
 だ今までいやアしねへが立引をみれば今夜だつて
 も貫はれた義理じやアねへはさ川夫でもあつちの
 客人は成それも知つて居るよなんぼ勤の習だつて
 襟元に計かちり付くが見めでも有めへたかだつきま
 へも赤ゑへも知た手合じやアねへとまくしかけたる川少
 立ら相應に知て居る赤ゑへたア骨の和な肴でお
 せんすせんと寢夫でもつき合はしるめへ川それを知てをり
 いす寢そんならナせ宵からつらも出さねへ川ねむい
 から寢たがどうしむしたへせきつとなんだといさま
 へるゆ川アレ伊八どんやといながら立て伊居下に立きして
 入りか 最後はどうした事てござります寢どうしたじやア
 ねへお身さまにも云た通りだア宵からひとり寢て居
 て淋しいから歸らうと云のだ夫に四の五のとぬかす
 に依て理害をといて聞れば一國ウいやあがるからの
 事よ伊それだつてもお前口でおつせんすは兎も角
 もひよつとあの子に疵でも付たらどうなせんす寢な
 んだ御太造らしいたかでおれがかぶうをなげようと

思へば此屋へは塵葉も置やアしねへ伊それとも又あ
 んまり御短氣で御座りますマア一寸譯をうけ玉はり
 ました所がお歸りなさらうとおつせんすのをあの子
 が何のかの云なすつたに依てお腹アお立なすつた
 のでござりますね寢初ははさうだか夫につるちやア
 伊イエまあ憚ながら跡の事は申さば枝葉と申もので
 初にお歸りなさらうとおつせんした時あの子が直に
 お歸し申なんせば何のおはらの立事もないと申もの
 でござりますから爰はひとつ私がお願ひでござりま
 すまづ今夜は御きげんよくお歸りなさりまして又明
 晩でもお出なすつて下さりませその時アどのやうに
 もお腹のいるやうに致しませう〜お氣にいら
 ぬ事がござりましてもお馴染がひにおとなしく何に
 もおつまやらすにお歸りなさるものを何のかのとい
 ひなさるはあの子が悪いのでござりますお前さんの
 お言葉の立ますやうに今晚はお歸り被成なましてあす
 の晩かならず御出なすつたし憚ながら理非のお聞分
 がよう御座りますから是は私がお願ひでござります
 へ〜、とのおぼせりいひ出した處か拍子に乗り出るまいのたい
 へいを云過しおの外に成た處へ伊八が出ての〜そんならお身
 上手こかしにいよ〜おじななものに成てぜびなく

さまにめんじて何にもいはずに歸るあすの晩迄預る
 せへ伊アイサ明晩はどうともお顔のたつやうに致し
 ませう是はモウ有がたうござります寢サア歸る伊
 イ左様なら必明晩お出なさりませし御きげんよう寢お
 せわ〜とらうかへ出てあたりをに伊もついる はお静に
といひならおもてなあり川はしのヨ、能して下すつた
て出し又二かいへあかる川はしのヨ、能して下すつた
 あすの晩來たらどうぞよの伊そりやアその時の事
 さマア今夜歸しせへすればゑへはなさあ〜行て寢
 なんし川武さんをこつちイ連て來よう伊ナニもうす
 ぐにあつちに寢なんし押付おけやす川そんならそう
 去やうかのおかたじけなと典さしき表座敷客坐頭 若へ衆
 何時だの伊モウおつつけ六ツでござりますお目が覺
 てならお隣でさぞおやかましうござりましたらう
 借部何んだか無性に云ならべたの伊アイサどうも人
 の悪いには困り果ます借ぬしのきめ處は感心だぞ
ツレ座 頭困 ほんに仲間へ入れて催促にあるかせてへの借
 部、手前寢て居ると思つたら 困ナニお前あの
 騒にどうして寢られる物でござんす借夫でもおらが
 かみさんなんざア夜中だ困こつちの女郎衆もよく寢
 てさ伊皆起し申なんせんし 困ナニゑへ〜なんと

借さん一杯呑で歸らうじやアござんせんか借ウ、是
 若へ衆一銚子働てくれねへか伊アイまだお燭が致し
 にくうござります困ナニサ冷でよし〜伊ハイ左様
 なら今に上ませうとてうしな借コレ起なせ〜清見
 エあいウ、〜、また早ふおせんす借ナニ早かあね
 へ困からずかあ〜借わらひ アレ鳥がなく清ヲヤそけ
 へ來て鳴いすよ折江よし鳥のこはいろでおさんす
 上清ほんにかへわつちやア又本の鳥だと思ひしたよ
 困お前目が覺たか折今のからすですホ、〜、伊てうし
 さあ御酒ウ上ませう借ヲツト有難〜伊何もお肴ア
 ござりませんから味噌を焼てめへりやした借おそろ
 へ〜伊左様なら置てめへります借ヲイよし〜さあ
 困坊起や〜困犬のわん〜折おや〜清とんだ
 るへネ借物まねはきつい物さどうた仙臺淨瑠璃は困
 ありやアふくサ清せんたい上るりとは借仙臺の上る
 りの事さとんだゑへよ此間に四人と 折さあせんたいと
 やらせんべいとやらかたりなんし清さあ〜困マア
 一ツ呑でさ借ほんに茶碗はどこだ清茶碗でかへアイ
 さあ折わつちがつぎいせう借ヲツト憚り〜折一盃
 おせんすよ清ソレこぼれぬすハナ借此女郎衆は座頭

の酌ウまた事がねへさうだ 折清ホ、、、借サア
 和尚さそふ困アイどこだ、清爰でおせんす困サア
 つんでくんな折つゝで上んすから上るりヨをかたり
 なんしよ困かたるとも、清味噌を上んせうか困ち
 つとくんな清さあ困ほをかエ、灰吹、清なんぞ有
 たかへどう老やうのサア灰吹困ほをかエ、お前む
 ごひぞ消炭をくはせなすつた清ヲヤ、堪忍してお
 くんなんしホ、、さあゑへ處を上んせう困ウ、こ
 いつはみそだ折サアきり、吞でかたりなんし困は
 てせはしねへぞ、茶碗を下におきさみせんをひぞ、
 借サア、初申上ます是よりせんたい上るり、
 初りさやうにとさうざい、引、
 扱もその後相馬の次郎將門殿の謀叛せうぶの荒増の
 ヲ云べへなら下總の國いわ井の郷にでかばちない家
 サアぶつ立それにはア有べへ事か敷居かもへ柱サア
 へも丸樂のヲ見る様に金銀の衣サかけそこら中がふ
 かり、と只はあ夜も晝もまぼしいよふだつちう合
 あんでもおれさあハ王さまだアとつて自鬢に平親王
 と改名のおまやつてまだその時分にやア三ツべへに
 成る息子殿をば將軍太郎殿とてんこちもねへ名をつ
 け一家一門郎等まで權兵衛彌五右衛門のヲふつちや

つて百官名とやらをくつ付けひとへにハア王位をぶ
 つたくるべへ下心だあといふ事を公連といふ利發な
 家老殿がらんづきあせハア昔から謀叛のヲたくらん
 だ者が勝を見る事ア扱おきまざりにしたのもおざ
 んねハヤレよしめされ、とせちに異見のヲおしや
 つたがなにがハア性のこわいわるだめに依てあせう
 聞入へへ忠言耳さアに逆ふとやらで後にやアその家
 老殿を押込たあといふ悪事千里をおつばしるとたと
 へへのふしにみちんも違ひはおざんねへ朝敵だアの半
 てきたアのとガラ都へも聞へたとおぼしめせヤレは
 あ討手をさし向べへとつて大將のヲ撰れた先一番に
 六孫王經基殿だもさ抑此經もと殿の由来をくわしく
 たづね申にちよぼ一のヲおぶちやる時とかくにてう
 目べへ好だめに依て六ではでつかく損のヲおしやる
 ゆへ六孫王とは申とかやそれでも不思議に勝負づよ
 くいつもまざりて仕廻るから常に元だあといふ心で
 經もと殿と申なり此人をばはじめとして貞盛秀郷なん
 どといふ大將達が討手にはる、下つたアけれども
 何をいふにも將門殿が七人一座でかけ廻りそれに
 アふじ身だといふもんだアからすべへよふもなかつ

たとおぼしめ合せそのとき貞盛といふ人はげへにこ
 みづなアわろであんでもまきやつはきんたまか米かみ
 のを射べへとおもつてねらつたあけれどもくら前輪
 が邪魔に成きんたまア射づれへとつて米かみサぐま
 やりと射たとおぼしめせアニはあたまるべへ馬から
 さらひ落る處を秀郷が取て押へたヤレよくしたアと
 つてきせん上下をしなべてそなかりけり、
 借やんや、折清ホ、、、清とんだ面白へ
 ネ折もつと何ぞいひなんし困又今度、さあ借さん
 モウ一ツ借まの重ねや困さうまようかねお前がたと
 うだ清わつち共ア朝はなほ給のせん折サアつぎいし
 たよ困どれ、しぐつとのみア、えへアサ借さん借モ
 ウよしかそんならおらももう一盃呑うか清サアつき
 むせう借そんなら半分清なせへ借今朝歸つて大分用
 があるコレ困坊けふは幡丁の拾兩の口が日切だせ
 へ困アイ又延金だらうあすこもおかしな物だス借
 い、にやまた頼もしい事にやアお乾ア怖がるよいか
 ねへは小日向のやつさ困ありやアは折もつのみな
 んせんかへ借モウいや、困サアいきやせう借さあ
 折まだ竹屋が來のせんよ借來すともるへのさ清

あい羽織借ヲイよし、折お前羽折が裏返しだはな
 ととき困おれとした事が旨のやうだ借手前も又目を明
 かへる困おれとした事が旨のやうだ借手前も又目を明
 てみればえへ清折ホ、、、困そこらに手拭があ
 らう見てくんな折是かハヲ馬のやうに鈴が付てあ
 るネ困落ても知れるやうにさ折おつたね借何もわす
 れはまなんせんかへ借い、にへよし、困そんなら
 おさらばよ、と二人とも、折待なんし階子が知れいすめへ
 と二人も立、折どなたも憚り申しした清とぞおちけへ
 てなれる、折おさらば、折又今度面白へ事を云なん
 内に借アイおさらば、折又今度面白へ事を云なん
 しよ困まだ色々のまやれがあるけれども後編、伊
 是はお歸なざりますかまだ暗うござります困よしよ
 し一年中間に居つたから伊ハ、、、はい
 左様なら御きげんよう借おせわ、伊アイおつむり
 が危うござります困ヲツト出た、伊見ながら、水
 が溜つておりますモウちつと杖の方イ借ヲイ、お
 さらばさらば、折めくにしちやア飛だ氣どり
 がゑへネ清目の見へねへのを口イ出して見へがねへ
 の折をしてあんまりひつ、こくもねへネ清わつちな
 んざアぐい寝にしたよ折わつちもさ清又寝なんせん
 が折お前の方イ一處にねんせう、いびきのかけ合、○はや

明渡るまのゝめに馬追蟲も音を留め表には櫛の音勝
手の方には居風呂へ水さす音のみ残らん

粹町甲閨終

市川江戸花海老



序
めでたくの若松さまよ、枝も榮て葉もまげる、そ
の千代の子のめでたき顔見世、名もあらためて海老
藏と、尾ひれをふつてふりしきる、時雨のあめのは
れ間もまたで、登蓮ならぬ東牛子と、四方山の手の

かた隅から、住吉町の成田屋をとひ侍しに、あるじ
は盃とりあへず、折からの酒、みさかなに何よ
けん、あつ蕎麥のあつきもてなしにて、天地一大
戯場の外に、又四疊半日の閑を得たり、いでや最良
の腕をこく、吾黨の連中の、はなしの種ともなれか
しと、此たびおくれる狂歌の請取、自筆をとつて粹
にちりばめ、世に傳ふる事左の如し、

天明壬寅周の春

四方山人

海老藏方へ狂歌被遣儀に受取申候例之御連中様おもしろき御事に御座候折節顔見世前取込早々以上
十月廿六日
成田屋七左衛門

四方御連中様

市川江戸花海老

東夷南蠻北狄西戎四夷八荒天地乾坤のその外に、龍宮城といふ繁昌の地あり、この國ちはやふる神代のむかしは、彦火々出見の尊の御縁家つゝきに於て、大日本とは格別の御山緒正しき地なりしが、雄略帝のおほん時、浦島太郎玉手箱の取違をして、神奈川へ隠居し、大職冠鎌足公、海士をかたらひ玉をとらせ、人々よろこび引あげても、龍宮にては月夜に玉物した物を物されしとはいひながら、あんまりななされ方と、龍神いささごの波をおこし、あれ出さんとはえたれとも、さすか神國の威勢におそれ、青うなはらをおしさすり、堪忍して居られる内に、藤原の秀郷といふわろ、唾で矢をはぐ様な仕事をうけ合、むかで退治の三上山事、その禮物の大そうなる事、一生つきぬ五斗儀に、三井寺の釣鐘などはつふしにしても大きなかね、其上珊瑚琥珀まやこ馬腦、

尻くらひ観音經の目錄に引あはせて、七珍萬寶ぞめこのうさぎ、耳より爪の長い人しやとの評議、中なか百足のあぶらの百壺位とつた分ては、割にも算用にも引あはすと、こりやまた難陀龍王はりこみにて逆鱗ばり、龍宮船の往來もたえ、何となく疎遠にして、久しく海陸道なしとなつたる所、時なる哉當天明壬寅のとし、市川海老藏といふ子役のあら事、顔みせ番付の表かくれなき大評判、殊に上下にてまばらくの出はと、とりくくの風聞、兩國橋にて放し龜が聞出し、錠口番の海月にかたれば、例の口まめお中居のおほそ、お末のこはだちよほくさはなし、龍宮の奥向一統の評判、久しい娘の乙姫君、御父八大通龍王へたつての御願ひ、正直の戲場といふものは、つるに見ました事はなけれど、魚交りの素人狂言にて見てさへおもしろい事、その中に市川の親玉海老藏といふ名は、ちか比たえて居たりしに、今度徳藏天然と藝道に妙を得べき瑞相ありて、此顔見せから改めて海老藏と名のるよし、龍宮の縁を壽きて、母の名もたしか龜とか申て、誹諧狂歌も心がくるときけば、なんぞ祝ふて遣したいが、かけ鯛ばか

りもすががない、歌なりと發句なりと御趣向をとの願ひ、娘にあまいはて、御のならひにて、それはよくぞ心づきやつた、一體あの市川といふ伎藝の家は、あの子でてうど六代の名家、元祖團十郎幼名を海老藏とよびしより、二代目の柏筵、四代目の三升ともに海老藏と名のりたり、今三升海老藏の名を子に名のらせ、我は團十郎を立る志、全く本系を重んじたる仕方、日比の氣象ほどありて、面白き事なり、傳へ聞かの三升は、伎藝に秀しのみならず、朋友の信を守り、強きにおそれ弱きをたすくる勇氣ありて、古今無雙の大家傑、日本國中ひいきのせざる者なれば、申もおそれあら磯の、なみのこなたの龍の都、是まで日本へ中絶して、今改めて端向たくても、小魚ともの評判もあるものなれば、なんぞの時節と思ふたが、幸の事なり、ことにいにしへ周の泰伯、からだを文身とて親和染の様にして、朕が子分と披瀝せしより、周の代の正月を此國でも祝ふて、十一月朔日は毎年かゝさぬ一同の出仕なれば、諸大魚のこらす評議して、よきにはからひあさせんとの勅錠、乙姫大さによろこびて、義太夫なれば帳臺ふかくと、

大三重の幕場にて、はやまの、めも程ちかく、下波先のにぎはしき、三ツ道具の先拂ひ、威風りんく尾ひれをふり出来る、鯛老職まん上のかげ尾の紙、跡についで龍門の城主こいの壺のぼる、すゝ木のひろ口、平目のかた黒、鯨の金ざし、蛸の入道八足齋、其外小魚は数えらす、鱗を正して相つむる、通龍王紗ではつたる團扇をあげ、朔旦の出仕吉例か、さす、目出たいひらめこちもよろこぶ、さて此度姫が願ひにつき、音にきこへし大日本國、江戸さかい町中村座、市川海老藏方へ進物の思ひつき、さしづめ太儀ながらつとめてたも、外にむすめが何なりとやさしき趣向をそへたしとの事、此比師鯉かことばをきけば、日本大きに狂歌はやり、別て東都に上手多く、かりにも落書などいふ様な、鄙劣な歌をよむ事なき、正風體の狂歌連中、てには遠ひのことばのある、屁玉の様な狂歌な事は、落栗庵とすつぽん體程の相違、なかんづくもこの木あみ此道に執心ふかく、ちるのないしこれをたすけて、狂歌四方に盛んなり、先山の手にはあから菅江、その流をくむ人々には松風、竹鏡、よみ人しれた、雲樂齋、馬貫、ま

ん丸、紀定丸、四ッ谷に桶洲、へづゝ入道、かつほ、まん作、あめん房、麴町に栗圃、麻布にみさうづ、芝は名におふ濱邊黒人、隣海法師、丹青洞、品川に大木戸の黒牛あれば、目黒に好田の清好あり、築地の海地にト養が、やしきの跡のト川つくはね、洲崎の升屋に一氣行なり、深川にかきのぬけ殻、本所に無錢、蟹子丸、日本橋には酒盛入道、鬼守、むき躬、あたりには句ふ三十一文字、一ッ盃のみの直寐の類、本町に腹からの商人、大屋の裏住、住吉町には三升が名をつけたりし風早のふり出し、薬研堀にはきねやのせん旨、柳はしにはおも棍似足、神田に今富久、貸本人和流、板木ほり安、さくらのはね炭、小川町に地口有武、子の子の孫彦、ふし原の中貫、澤邊帆足の連、下谷に名高き卯雲先生素庭はやがき、つく／＼法師、淺草に末廣、朝手、藪のいと成、藏前に梅の花笠、吉原にゑい夫人橋場の庵に婆阿上人、わけて此道すきやがし算木有政、物事明すけ、秦黒つら、まかつ部眞顔、油のとうじねり方、あせ道、晝おき、もちつとこつちへよりかけい、川井物梁、酒茂成保、もとてなき大連、其外大井のむさとした、白人のま

らぬ玉たれの小龜は、いつれやんごとなき輕少ならぬ方多し、されば十代の作者戀川はる町も酒の上のふらちと名のり、喜三二も手がらの岡もちとなりて、狂歌をよんで見たい記をあらはし、森羅萬象も竹つゑ爲輕の翁と改て、猶此道にわけいらん事を思ふ、かゝる時に生れあはし、曉月房も禁酒をし、雄長老も寺をひらき、長頭丸もあたまをそり付、ト養も匙をすて、行風が古今後撰にもせ盡すべからず、さふいふ江戸の腹合とは、もう詩でもなく歌でもなく、誹諧などは西の海へ、さらりと流行した跡で、川柳點とも出られまい、幸なるかな市川三升も、自から花道のつらねと名のり、伎藝の餘力ある時は、滑稽の道をたしむとき、故に、その門に遊ぶせんじやは通小紋のいき人と稱し、その聲をまなぶ誰やらも、菊の聲色など、つきたるよし、四方の評判とり／＼なり、今を日の出の狂言狂歌、おの／＼一首よますんばあるべからずと、仰の下より尾をふりひれを動して、さいはい新場は市川びいき、ながるゝ泉や金澤山、本牧ほんにかいたよりに、各よみて遣しませふ、御使者はすなはちめで鯛さん、祝ふて一番ちめ

ませう、むかし范蠡魚の腹へ密書を入れ、越王にさげしは運を開きの鯉相なり、おの／＼腹に一首をはらみ旬新場の幕の進物の、たよりをたのんで貢の振袖、かきあはせての勅答に、龍顔ことにうるはしく、その顔見せの間にあふ様に、片時も早くおしおくりと、繪言あせをぬくひつ／＼せいきうに仰せつけられければ、みな／＼きほをるびの顔見せ鏡の天下、市川の一陽來の福牡丹、たもとにくるふ獅子の子の、獅子奮迅のまはらくは、たぐひもあらじ荒海の、波もうち手のひいき連中、あ／＼つかもない、

周春日賀海老藏夷歌

八大通龍王御製

六代の海老は千代までおはしませ

われらも千秋八大龍王

乙 姫 君

まら波の内みすふかくみるふさの

おいさきまゐるきわさをきの道

進上のかけ鯛

見物もわくがごときうしほ羨は

にごらぬ汁のすみかづら哉

いとよりのないん
ひく人はたえずより来る絲よりの

いとおしらしき子役荒事

鯉の亟のぼる

龍門の上下素袍家の紋

ほめますみすはや出世鯉

ひらめのかた黒

また／＼ひ波のあら事親玉の

光つたへてにらむこひらめ

すゞきのひろ口

大太刀をさしもきみよきふるまひは

お家のあらひすゞきとぞみる

かつほのさし躬

こは色の高ねもまけぬ魚なれば

かつほ／＼とたれもみはやす

さけの上のはら／＼子

親よりもうまい仕内やあぢさけの

みは一ふくのひとつはら／＼子

ひいきの鱈人

見物は日／＼にみますのうほなれや

紋さへ江戸のおさに入海
 なよしのすはしり
 ひいらぎのひいきも多き徳ありて
 高きなよしの末は座頭
 平の かれい
 吸物はかれいのほしをいたきて
 くるはにどめの匂ふ顔見世
 大原の あん公
 あんかうのはらは何より大入を
 祝ふちとせのつるしきり幕
 たこの入道八足齋
 ひとりでも八つの手うちの相場たこ
 祝ふてちよつと玄めませうが酢
 せいごのふくこ
 座かしらにせいごの子せんだんの
 ふたばより先みますなるべし
 さよりのはし長
 名びろめのめでたさよりの口上も
 ながいためしや魚のくちばし
 大こちのもどき

そのまゝの親に煮たてのたて者は
 そつちより又こちのかはむき
 白うをのちよぼひと
 玄らうをや二筋みすぢすぢぐまの
 そのいきほひをみよ四つ手あみ
 無鹽の石もち
 小粒でもからい山椒の吸口や
 ちびき御ひいきおもき石もち
 太刀花の魚丸
 みな様がおとりたてとてあたらしき
 あら事はじめ大太刀のうを
 畑二郎ひれ有
 花道をばつたはた白荒事の
 くまどる顔も親に煮肴
 沖の赤魚
 うなはらや素袍の袖も末廣に
 かほはあからの波のあら事
 丹後の椽めいぶり
 名物は丹後丹波の鬼とくむ
 つよみは祖父の名も久しぶり

あはびの岩根
 市川の若おとこぶしひとこぶし
 時にあはびの名もこだまかぶ
 黒太夫齒しろ
 齒ばかりはちと白吉のかいづより
 まつくろ鯛に位きたまる
 中川のきす子
 せびらきし連もけふよりきすの子の
 このかほみせは外に中川
 めなだのこぼね
 顔みせに開く花みち木のめなだ
 けふより周の口口もたて物
 さばの早鮓
 顔みせの切幕さつとさばのすし
 おされてひらく大入の木戸
 あかゑひのこくしやう
 まなばしをたつる間もなき切落し
 入はその名のゑいとゑいとう
 さめ洲のすりみ
 あけ鳥はや顔見世のつみいれや

やぐらたいこに目はさめのうを
 ねぎまの中將
 生さきをいのる心の本まぐろ
 ねぎははなれぬうぶすなの神
 なまづ入道長髯
 吉例のなます坊主の顔みせは
 末ひろ袖の色もかばやき
 ふぐの北むき
 こればかりあたり給へといのるなり
 われらがてうもひいき連中
 いはしのむらじ
 よい／＼とひいきひきまく上をきた
 たれもいはしのもれぬ大あみ
 ひしこのますもり
 かたつばしひつしひまこのあら事は
 げにはかりよき升つなきかな
 さゝえがらの五郎
 三國にその名市川りう宮の
 みやこをこしてさゝえからまで
 龜の尾の浮木

よるづ代も島だいごくの上々と

なるやその名の寶龜の子

わにの廣口

棧敷から落間を掛けて一ばいに

のみこむ許やわにの口く

かはらのまやちほこ

どんくとおしくる波のよせたいこ

まやちほこつたる木戸の大入

鯨の金ざし

せつ汁の鯨の威勢ふるき名に

かへてあがれや魚の親玉

千鶴萬龜

大叶

跋

拙者親方と申は、御江戸を立て千尋の海底、蒼天海はら一色町、珊瑚琥珀の欄干橋を、御のぼりなさると直むかふに見へまする、門は唐門、屏は練屏、馬腦の瓦の八棟作り、篆字を以て龍宮城と、かやうに記しましたが、本家金銀琉璃は庭のすみ、はきだめの中にも澤山にて、東海の吉國ともいふべき黒極上の部ながら、いまだ芝居といふものなく、いとおしけにおと姫君、いまに二八の娘盛、火繩くさい匂ひさへ、かぎ玉ひし事もなく、何とそわたしも日本へいて、評判のある親玉や、門之助を見たいものじやと願はるれど、萬里の波濤銜うちの乗物通はねは、たまぐ一枚繪か流れて来て、波のうねぬれしほたれ、鎧の渡や親父橋から楊枝さしの落た時、自筆の發句をみるより外、心を感むる事もなく、とうぞ便を求めしに、中村座の當顔みせ、名も市川の龍の駒、つけ紐から大はねとは、水府にもためしなしと、鱗のひろもの名びろめの、狂歌あすかと朔日を、海松の干とせとも思ひ付の此小冊子、此歌を見て御心を、おやわらさやつといふう子道ふ子に至るま

で、御存ないと申されまい、まいくつぶろも角仲間、のたくり出たる跋難、他家の株なる此跋を、一番ほめてくんざりませと、チト高はつて申す。

へいけんや東作

櫻木に縁て魚を求めとちよつと進上孟子が開放だいい川のたてものとはいふもくたらこま新羅から天竺龍宮城の高やぐら百の鱗の顔見勢にその名びろめの六評判耳にぎくらげ目にみるくひの春海原八十島臺の長さよるこびにいさゝか筆をそむるのみ

壬寅仲冬朔旦

一文字述

市川 江戸花海老終

通詩選笑知

叙
 觚不觚五德爲四角尺有所短三尺棒何
 減六尺棒故不入大門者不知人倫之
 附合不觀芝居者惡識天地之大入膠柱
 易三線之調刻舟探花火之玉測海以業平之
 規貝割鷄用牛鳥之庖丁則殆見笑大通
 之家予嘗作通詩以授梓屋仙女五絕歌行
 會席人口三度目馬鞍馳不及舌嗚呼地獄非
 遠滄海變爲新地極樂在近卽席忽出料
 理方是之時問巷之士定二七三八之日與區
 區坊主撫付之天窓好語陳喬翰不亦不通
 之至乎

天明丁未春正月

四方山人書于巴人亭新宅



戲言
 一全體の詩通に盡すとは馬鹿をつくすの謂にして
 李不盡選より善はなし李不盡は則四方山人なり又
 通詩をよく誦讀する者南郭子選にあらず梓屋の阿
 仙なり故に通詩は李不盡選より善はなくさね屋の
 おせんより精はなし
 一人或はいへらく李不盡選過刻なりとそれはそのは
 づ四方山人子息の髮置祝儀の日書肆何がしか居催
 促に迫て滿坐の客を後になし例の硯を左にして醉
 中寐ぼけす選し故なりされども往々諸家の萬八又
 はいけない毛唐人豈この右に出へけんや
 一李不盡選を滄溟選よりもよしとするは大佛の鼻の
 穴へ傘さして這入ば人間の鼻の穴へやかた船を蹴
 込又大井川の水も時に寄ては馮河すれど吉原の大
 溝平生丈がたす諸事皆こんな物なるべしされど
 唐詩に鉛菓をくはへて當時笑を獻することはおさ
 げすみもあらんなれどそこがもとより李不盡選お

通詩選笑知

臍でわかせし茶のことなれば大目に御覽下されか
 しとこつちは鼠眞の蓋かいるの面へ若水をわつさ
 りかけて蒸臍艾葉ほか外に御座るまいと無體に
 馬をさしてまかいふ

朱樂菅江

盛男里繁昌安全

御見節句
 ○御見 男女歡をつくす事をいふくわしく
 はごげんのふしに見へたり
 節句 一年のふし／＼にてこれにふるゝと
 きはいたし
 題變士別遊 無馳走
 美人不相答 一坐爲金錢 莫 謾愁 吞 酒
 閨中自有傳
 ○變士 いはゆるへんちきなり郡内しまあ
 さぎの浦に住す
 閨中傳 いひがたし浩然のきまやあないが
 こゝにもらす
 夜送長右 兩契
 長子連理柵於半脊中懸送君參伊勢浮名
 滿桂川

○長右 おびや長右衛門事

於半 玄なのやのむすめなり

連理柵 三卷菅專介かあらはす所なり今

世に傳ふる瀬川のあだなみは三日かはりの大

入の時左交連之萬十か板をもつて富本の正

本とす

伊勢 おいせ参りの歸るさにとうたふ是也

借粹惣別 樂貧翁

彼地別魂膽親父俊振冠暫時金已没今日

身猶寒

○樂貧翁 いき人とすひのはてはそうへつ

くわすひんらくなり周の諺にいわくすいが身

をくふとむべなるかな

魂膽 五尺からだか四尺九寸五分ほどとけ

て跡の五分のたましいをいふ

贈俠地廻 金子豪

俠亭逆高慢雲突變知己可憐相手者惡態

爲誰恃

○俠亭 米やの冠をかぶりうらはんるりの

衣を着せし人の住居なり

高慢 玄ほやの事、又曰うぬぼ

變知己 一名へんてこ、高まん齋行脚日記

にへんてこ庵といふ名醫うたかふらくはこれ

ならん

寢也爲乎 比丘新

百銅楊柳腰已被春風歌妾髮已斷絶君

髮那得多

○春風歌 いとさくららのうたをいふ

君發云々 やつこなるべし

南樓坊 品川

去國薩麻遠登樓八山春娛心和尙客

不是在家人

○薩麻遠 これはさつま芋の笛を吹とき來

た人にてぶたや猪をたべてゐなんすよそこで

床にふす猪をいそきかはは紅葉かちりやすこ

れはてうちあはもりの徳なり

登樓八山春 七力やかとくの二階でしやれ

のめし東海地の七分で花のちるのをきもをで

客眞爭一夜大象預期橫執心不相待門外
及落城

○大象 馬馬ぢんかう記に曰、舟にのせて

大象のおしのおもさをしるべしと云々

門 あげばなしなるもあり戸をたてたるも

あり、老子經に曰、玄之又玄衆妙之門

落城 梅川忠兵衛懸飛脚に曰、廿日あまり

に四十兩つかひはたして貳分のこる、愚按こ

ゝにいへるは門禮の事なるべし

照眼鏡見虱 朝寒冷

昨夕疝氣志寒冷格別年誰知眼鏡裏取

虱自相憐

○疝氣 病名無解にいはいく、せんきはせぬ

きなり糞中へすつこんでかんきのせつは貌を

出さぬなり

同急用文使觀漸掃除入郭

片時榮花少袖破不覺新非人御富落願

動始應春

んぐりかへし雁木から船にのつてかへりやす
和尙客 すみ染をすつとながしてヒ加減を
いたします
不是在家人 山の客人は鬼のこぶし袋たび
といふものをたべなんすよ
糞舟驚人 舍弟
北風吹萬西萬里運河糞掃除逢漂泊臭香
不可聞

○吹萬西 本草鳥目曰、以大根百本換萬西

しほから聲は此所へやればとんだ直がする

萬里運河糞 こいとろくときいろな聲の

そうした黄菊と白きくの不孝な聲を聞に歩行

逢漂泊 へうはくととはへうひやくのるひ

か

臭香不可聞 千金法の名薬、曰ちやわんに

水を一はいくんでゑんばなに置べし、薬研堀

のお民か曰、楓江が唄は必可聞臭香はかたき

の末にも聞べからずといふ

色道後氣

口説

○掃除 非人郭中へ入てそうぢす
御富 千枚より七千枚にいたる二米一分を
もつて百兩となるなり萬一小家におちるとは
なはださはがし

買也處

小酌

常任買龍甲疑是御娘瑕舉頭折勾匙低頭
落髮差

○龍甲 黄色にしてふのまれなるをたつとし
とすくろきをもつていやしとす一黒といふは
非なり

折勾匙 かんしやくの所意なり
落髮差 忠臣藏巻七おかるが事

艶情

中街捲珠簾雛妓翠蛾眉但見名倡坐不知
心待誰

○中街珠簾 早朝竹をもつてつゝばるきや
くいたつてまく

翠蛾眉 西施が翠にならふにあらす朝から腹
へさけをのみむしがかぶりづつうがすれば梅

ぼしをはる
名倡 妹数人あつて一軒のあるじたるをい
ふ足を八の字にふむひとき時は七の字にもふ
む

祝儀歌

白髮三千丈縁肩似子長不知親類裏何處
得衣裳

○祝儀 髪おきの御しうぎなり比は霜月九
日の夜四方の作者のよりあいて此書をやうや
うこぢつけしが三人て夜ひと夜かゝつたから
そこではくはつ三千丈といふがくやおちさ

獨坐閨中床

秃子高飛盡傾城獨去閑相看雨不語只
有名代顏

○獨坐 おりあしくこんやもなじみの客人
ありいつそむつかしいぬんきよさんすきんせ
んなどいふ實は色男なり

秃子 新ぞうちどりやくと呼ところへ目
をこすりながら来るちとりやさつきからよふ

呼不來

○貧困臺 宵から六百四ツから四百里にあり
或は五百らかんにかし

半小用

怪來 例刻閉筒下水道鳴總向格
子裏美人笑語聲

○格子 出かうしなりある付合にけふは又
いつものまどにきりくす

雜器

已見鹽梅通復開庖丁買欲心視大黒畏
出直腕取

○雜器 淺草市にうるをいふ

鹽梅 あんばいよしの吉兵衛かうる所のも
のなり

大黒 七福神の一なり或はおてらのかみさ
んといふは非なり

筑齋

丸散人不吞但聞藥研櫻晚景步慶菴復責

のに耳をどけへつけてゐるとみゝをひけばお
いらんの用があつて次の間でねぶつてゐんし
た

名代 おきのどくでおざんと名代をつれ
きたり一二ふくのみあとを吸つけて出しけい
せいひとらさるしかも名代を小町ときてう
つくしいかゝつたらそうではなく何やらな
し

見開帳觀世音表具堂上

手水還流鉢龍人却上燈相逢問心願
歩盡日參僧

○觀世音 武州豊島郡淺草に安置す

龍神燈 とほるくといつたへけれど水
にまぢりし油なればばちばちねてとぼらす
龍宮魚燈おほしといへどもぼさつ魚とうにて
はうけさせ給はず

日參 千日參り也

貧困臺

王維坐

連立臨屋臺散散醉何回小言客衆起若者

藥代上

○筑齋 やぶにすむ醫者也

慶菴 敷いしやの表徳なりこん禮養子のせ
わをこのむ裾のされる事がんぎやすりなり

直利簡

一坐遊興裏金銀復少少呼共人不到傾城
來相照

○直利簡 なま爪をはなし爪の先へ火をと

ぼす靈人なり

金銀 きんぎん元とほしきにあらすつかう

ことのとほしきなり淨閑しやうぎの弟子也

動真小

大黒養

動真床 上糞散散臭氣生時拭屁眼跡不使
二階行

○動真床 とはおいらん國阿林洲といふ所

の詞なりそのかみ五郎十郎が大いそかよいの
時よりして工藤もくと云ことをかきはしめ

たり

糞 とは儒者のかたきをいふうんことはお

かゝさんモウよし又お袋のくそはばとい

ふ

散散 三月庭訓にさんざんくの手ばさみな

ど、花ばさみの戯言をもちひたり

臭氣 すいきの事すい行とはちつとちがい

やす

尻眼跡 尻くらい観音經のしんごん也

二階行 二階なみしづかといふ文句を唄

ふやうになりさがりて封られたやつなりほん

の三階むにんあざなは與次郎兵衛といふ

少年行

遺却團子錢借馬驕不往矢代射楊弓上總

木綿文

○團子錢 十五文に極る是は十五夜の月と

すつぼんのぼんと出もまつたことなり

借馬 是を借奴をはくらくといふどうらく

ものそこで白樂天もはぐればかびを曲て邪魔

のこしをめぐるといゝやした

楊弓 とんだうつくしい娘か尻を射られて

春前

證文不知數處處步掛鳥野郎風氣時行殘

知多少

○證文不知數 仍而如件と書も久しい物か

今は惣體するける奴は證文の出しおくれとい

ふ作者も作をするけたら本やに證文をとられ

て大門へはいるであらふ

掛鳥 そのすみではぶつくとこの隅で

はわつくと小言をいふ鳥なり名づけてふく

ろうともぶつたろうともいふ

野郎風氣時 野郎用人物頭も頭みんなふ

り出しを用ひやす

行殘知多少 みんな東西南北へ遊びに行と

跡で仕方かねへからまむし様へとけることさ

ゝれてやかましいから大屋様もよして五人組

をたのんで寝やす

藥用訪貧女子不遇

昨朝訪産婦月水作流人聞説御食少何如

此乳春

いつそはらをたつことさ

上總木綿 手ぬぐい二尺五寸三十八文とな

りてあいたらぬあさぎうらより情なしの直段

を定ける

送世帯入貧

孟今年

空人五兩借借金忽千金分手禮相贈南錄

一片心

○五兩借 五兩で帯買ふて三兩てくけてく

けめくとにちやらくらさげる娘のわる知悉

也

借金忽千金 千金はせんきのきん玉大きく

やくわんとばけた事なりすへは八疊敷の家も

ぶんさんしやす

禮相贈 一わりの五分のといふはずつとむ

かしの事今は五わりくと上下の音をさせて

取やす

南錄一片 なんりやうとは何兩だかまらず

そこでなつやの孔子さんのながれの書つけ

になんりやうのままときなるかな

○産婦 十月めに腹の中てとんぼがゑりを
去ておきやアがれと云ながら生れて出るそれ
からとうらく者になるゆへ今川丁俊といふ石
部金吉かさんふのぢうおんぼうきやくせしめ
と云々

月水流人 俠妻ついろうそ八百枚めに「○
朔日丸」女醫者とおかしのれんをかけて内
はお先まつくらさ

御食少 まんまがたべられやせぬまんまり
どうよくだとのよまひごとか

此乳春 春章一こくあたへ八文とむせうに
似づらをかひて八文にうらせやすつぼの印は
乳のはつたやうなことなり

甲陽道

杓子上妓

大關直如髪眞實牧草多御領荷附馬牝牝
鳴玉珂

○牧草 古樂府に曰、四ッ谷新宿まぐさの
中にあやめさくとはつゆえらぬ
荷附馬 せうゆで煮つけたやうな馬にて一

○坐禪心 是は世上の通をかべと見たおき
やアがれ小法師がごけを見そめたるなり

隨良馬 人の尻馬に乗ることを心ざすそこ
できやん退之が千兩のどうらくはあれど千住
へ行尻馬はなしとの長だんぎさ

艶紅 とんだうつくしひ女が物思ひ姿で獨
で寝て居ることなり古樂府に曰、娘何をする
なんどのかげでと云々

答五兩急催促

仗杖行千里醫人敢一言會出大枚利不負
三兩恩

○急催促 毎月廿日なりぼんくれの二季は
もつともはなはだし川柳傳に曰目はなひか耳
をそろへてもつて居る

封状用

拜見

結封御狀中時見御狀上御狀無別條中
間自來往

○御狀中 十七屋を以て最上とすといへり
又千里飛行の法にはあづまひきやくを頼べし

せんめしのさいとす

牝々 ひん／＼とさびしい事にあらず綿間
屋の弓の音なり

玉珂 此土地の客はやみちよりせにを出す
おとなるべし

松庵老

名辨見殊勝編綴遊病門昨晩汐時盡合差
無片言

○松庵 姓南都或曰中島三甫藏其先出ニ山

下二郎三一本作ニ松柏一未詳

安産月

熱爛過生醉夜伽頼兄嫂嫁嫁在何處半夜
起血道

○安産 委は見俊寛島物語

血道 龍王湯をのむべし

恐客欲奸

動昌能

向門經水漲留氣坐禪心毎月隨良馬艶
紅夜夜深

と中はえれた益御機嫌よくなり

時見御狀上 なんだかゑえぬ用を左様然
者と云てよこすやつさ

無別條 おかはりなんすこともねへかとい
ふ所を別條なしと火打石に上下を着せるね

中間 夜鷹小用集に字は折介一度大部屋の
住となり而後二合半に住す、草履なげ居とげ
て身退くとてう目きらいのはんれいが通言な
り

屁臭

遺矢跡
一夕飲爛曝便爲腹脹客不知透屁音但有

○屁臭 酉の町のかへりとうの芋でかんさ
ましをのみ途中の勝負少々利運をえて壹分の
女郎を買ひ二米ほどの飯をくひ腹のいゝあま
りにうら心がありかいばなしにはせんきのせ
いやら一すかしすかしければどうせうねうん
この跡あり

腹愁

反吐

先刻尙生醉今夜又若何昨歸相識少
早已座鋪多

○腹愁 かも川の水ぞうすいといふ腹を云
座敷多 げいしやのたくいなるべし

悦喜

襟 碧 顔 逾 白 袖 長 裾 欲 踏 春 章 看
又 滿 何 子 是 目 好

○春章 つばやの人也但のは雪とは同名異
物なり

一説いづれの子とはどこのおひめ様といふ事
然らばいろ事ではねへじやアねへじやアねへ
か

長竿行

早行

君家住何郎妾住永久橋停船暫問
答或恐是閃腰

○住何郎 赤いわしの二本ざし也役所は移
をうち違ひにつける身どもなどいふ奴なり
永久橋 下總かつしか郡にあり意久か兄弟

の火の見やぐら計也

無金氣 つかひはたしてむかしは二分残る
今は半切の紙くすか二枚屏風をはるほどのこ
る

一坐頭 古錢目錄に曰坐頭貧解は今の高利
の車の輪めぐりののはやき事三寸の舌をも
つて遊里の道を遊行すが如し

留主終日思中村狂言

針妙

強欲登棧鋪無人連供陪遙憐濱村
菊應傍薪車開

○濱村 路考大明神の跡たれ給ふところや
いともすればばちの大あたりあり
薪車 神社といふをかきかへて薪車と書な
り色男の氏神にして神木は四ツもみちだとい
ふ

見遺精思深川

遺精東流去何時到土橋憑乘兩國舫寄
向棧橋招

通詩選笑知

ぶんの永久がかけはじめ

暫問答 それがし佐佐木になりかはり一問
答仕らんといふ所へわたしは口ぶてうはうの
千鳥がさしで口よりの諺なり

是閃腰 この女子にふられたものか水の中
へぼちやくとおちよくといふゆへ通り名
となりやした跡は諺解欠文多くふがくとな
る

命酒

豪適

尙有蒸籠贈應憐棒衝塞不知噴噴
茶猶直不意爛

○噴噴 棒ちぎり記に曰、太平らくを奏す
中酌なんぞさい人の心を去らんといへり

田畝春望

出大門何見春色滿屏溝可歎無金氣高
利一座頭

○何見 めしはいつきなんすとえたらくな
なりて送つて出ると野郎かぐつとのぼせやす
滿屏溝 見へるものはながひ羽織と水道尻

○東流去 革羽織を着て人のかな棒をひい
てあるくやつさ

到土橋 志んたがすけしな客をばおまつり
すぎにぐつといびきとおめにかけるその客目
をさまし初手はコレくと云ながらおこす後
は名をよびやす三段目の切か様といふ字をか
きのめすね

乘兩國船 ふねかくのつかうど聲に火な
は箱を枕に去てうすいふとんのもうせんをか
ぶりの

棧橋招 此所の霜をたんとふんだやつをよ
く書くさくら田といふ所をこじやア相生や
とも申せんすさ

登掠鳥樓

王素見

蜀黍食開盡鐵漿入溝流欲廻二丁目
更上一丁樓

○蜀黍 からのくひ物也からつけつだから
ぼろこしともいふか
鐵漿入溝 西河岸が江戸町右がはの後に流

五百三十三

る道はめぐつて居つゝの腹たちに似たり
二丁目 細見集に曰、丁山といふ名山峩峩
とそびへるといふ
一丁樓 瀬川のながれきよくおほすの入江
うつくし

急難顛餘雪 祖想
終日年禮出折節不運端遠方精精歩泥中
陷暮寒

○終日年禮 上戸は五六軒にすぎず下戸は
百けんにあまる御ぞうにはおあづけ申御さか
づきは永日とあしをはかりにかけてあるけは
供の者のひようちんも十奴ちがふへしあくせ
く十夕徳をせしめおもはず泥の中へほかんと
ふみこむたちまち草のくつ足袋一足ぼうにふ
りければさしひいて持たるべし

罷妾 作 里色子
振權初罷妾樂費猶銜杯爲問
小便組今朝幾口來
○罷妾 おはらい箱をせをせせらるゝ事ば

冷多利上

急用

番頭至争質餘計忽入衣貧乏且無暇曲乗
辻觀飛

○冷多 どうかおもしろそな名なれと質
は空すごいことなり

番頭 七ツやのまつけんまよくなり小袖や
うやく二分となるこれもつかひはたしての手
段なり一分の女郎をもとめて一分茶やへやり
駕ちんは茶やからまづはらはせてと二分出來
るとせひ五六百が智慧はふるふ也

曲 十の字の尻ひつた方へつんまげる也
辻駕 四ツ手があり中にははたして手なし
がのるそのくせ駕かきに一こう酒代もやらぬ
也

休日誘新五左廻北州分別底武士

便便土手迢遙大門深淺黃情不淺臨廊
動氣心

○土手迢 駕をよけたり見すともいゝ西が

んでんこくへ左遷せらるゝなり
振權 殿様を笠に着ておく様を尻にまくな
りゑゝかげんなまぶん香ぐちをぬけば闇中た
ちまちうきまが原となるふじにおいとまそ
しらぬかほにてもとこん立にたちもとり衆人
にどぞやう汁をすはせる二分つゝとつて所所
をめぐれば娘のつけまわしといふ

奉送屋鋪居屏兼寄御坊様
抱守負眞實奏樂此何時欲吞坊様乳
無暇見舞獅

○抱守 平生おぼう様をこまやうだいに
いだくといへども太神樂のたいこにそうりか
たちんばにはいてかけ出すをとしざしに一本
きめたる笛ふきのもん所を銀ながしのかんざ
しにほりて折ふしかなくきのをれたをおくる
ぼう様ちゝをのみたかつておむつかればゆす
ぶりくゝましをみるまゝをしんそここのめる
はおのがまゝつはななれば同氣相もとむるな
るべし

しのれんじを見上てあるき角左どの一ふくつ
かまつるふなどゝまやれる
遙遙 はるゝゝゑもん坂まで来て御高札を
よんで見る
淺黃情 御門四ツ切にてそなたのくれたく
れないの楊枝さしをかたみに持て交代する長
刀なりのわらぞうり也

動氣心 松の木やはうわうをせなかに居候
にまてゐるふり袖をおむすはいくつまやなど
といらざる年をさく

平生曲 定九郎
渺渺屋敷廣茫茫月代荒刀刀那用曲
大海手不防

○屋鋪廣 半分はうけぢで賣れたたる植木
をまつかりと垣根を結はせるをかすりにかし
て置其あまりが芋畑
茫茫 中さかやき也よくちりからをもちひ
猫の皮をかぢる
那用曲 元より小柄はなし色はこけ茶かこ
けちやかまらぬか金氣はなつめかしらなり

手不防 世上のことをまつたりふり也又併
名はつけどもほつ句はお下手にて唄はむたと
こき交てまゆばんでのとではせかゝみはね
へ所でごせへす

逢香車

心氣

一丁飛車手相逢角行家助言言不盡思案
首將斜

○香車 一名鑓やりての下りやく也それゆ
へさいけんのすみつこにゐる

飛車 なる時はなり飛車とも高ひしやとも
いふ

角行 尻目にひたいから人を見るせつゐん
つめに月をくをみるなる時龍目となつてやう
やう四方をほんとうにみれ共遠目きかぬなり

舟行無體

殿牌愁怨愠公等不可踐祗疑天甫役猶有
六大選

○舟行 やね舟なり

無體 いかさまにて取らるゝことなり

殿牌 人の土袋になるやつなり

天甫役 仲赤下三上三なり

六大選 二百十日の大風に十日の雨をふら
せて二とく二十月となる

忘食時送生事無

遠聴按摩笛臨窓呼風鐸還愁在宿夜
皿盛不正嚼

○按摩 つらつきさつま芋のごとくびいび
いをふき来る

風鐸 そばこをつなぎにいたるそばなり
窓をひらいて手をたゝけともすつばんきうじ
には来らぬなり

搔髮

吳殿渺何處下女方通哉不忍風雨日五
榮聞雁來

○吳殿 吳王宮裏人

雁來 白鳥の場なれど字かあまるから雁と
いふ尤雁もおらぬてはござらぬ

答於金

船中飲酒罷向島對鯉閑土俗多挑者何
怨最往還

○於金 大坂新渡のはらからに去てやげん
堀に名たかし

向島 中田やむさしやの類
怨 さるがく丁から来やしねへか

晝夜宴

菓子出進上着替立小陽茶番極奢者全盛
幾許長

○菓子 もなかの月なり折に地口有武と書
し札あり

小陽 普通小用

茶番 過言經曰、馬馬大王始之となりには
りぬきの名水あり仍て井戸のはたに茶番と云

題竹林麥

鹽梅至極好旨味格別多殷勤竹林麥腹得
幾杯過

○竹林麥 河内國後山產物寄楠子曰横川麥

飯津飽河邊にて麥飯の見世を出す二日るひの
はらをなをす上戸平生くらふべし

別御新造

酒功者

知有錢氣在難遣戲場中無將御殿髮不及
當世風

○御新造 夫人

戲場 剛氣亭曰、異茶附一體戲場也

御殿髮 御しゆでんのかみのやうあふむけ
にねておきたやうなたぶのなりにて春心をう
ごかすこと當世ふうにまさる

常住

無域

平日在相談年年工面叛現金惡賽路此
去向長半

○相談 常に下馬にまくさかふ

工面 八面大王に一わりまし十めんの下拵
也

惡賽 江戸鹿子曰、番丁を以て手本とす

長半 曹操が高つはり趙雲かかちにげをせ
し所

產後病 大食人
現妻孕不絶物入又何深朝暮男女起平産
三兩金

○産 鼠産のごとく子のふへるをいふ
現妻 浪華人呼妻曰現妻

男女 川柳傳に曰、しうとば、しんちう色の目かひかり

三兩 龍王湯のかけなり

師匠恩 例古具

少女噫怕歇入門寵愛多眼看花又活定
連不會過

○師匠 住所は柳ごしあたらしばらけぬ
もうお師匠さん

入門 弟子師匠の門に入るにあらず師匠弟子の門にいれるなり

定連 氣を通して門口よりかへるなり

彌上州坊山 住僧變

坊山終日恭左上獨浮浮如何強性處推量

懷有際 二分以上は借りるはら也至四條近付なし

奴別離 若是

欲別牽奴衣奴今爲何躬不恨草鞋
遲莫逢門留窮

○奴 赤坂に住すかみは絲びん耳のわきに
いなつまのごときものあり

國風に曰、折介どのはなせおそひわらじが
できぬか門どめか

尋茶廓不遇 茶道

山下問格子遊士贅言去只在此原中顏白
不知女

○山下 鬼門の方なり丑の角をはちがさしたやうながんしよく也寅の皮のふんどしはど
らの皮のあつひ人なり

贅言 たはことなりむだやちよくらで夜
をあかすと三味線集に見ゆ

此原中 ゆこうといふはらなり

是上州

○坊山 じやうじうすいとく寺住職性善基
印に柳を以てす常に印基をうつ

左 俗上戸曰左利

性強 じやうこわきことせげんしまの如し
急用印 利高借

才覺急用至早早認證文町代逢亭主沽
券最先聞

○急用 二季其外物まへさためて此急用あり
諸人心をいたましむごふんをもつて書時は
百三十二文のそんなり

證文 唐詩街徳遊證文

沽券 金かできるとすつとこれるつもりゆ
へこけんといふ

京都參會

鷄啼白人去酒醒寒氣來我懷乏有際
四條空徘徊

○白人 ぎぞん町の名産なり

不知女 梅か枝がひしやくおつとりそのよ
まいごとにつけこうざす所は一年切と又外へで
いしに出る

口中題

松井高弟

戀路生淺草柳屋滿楊枝廻螺加減意無復
丁稚知

不風雅

○三國一體 淺草門跡前の名産なり下戸飲
之かん氣を煮のいでむ時はむね大にやける
されどもやけはこりなといふてまけおし
をいつてせうもこりもなく又のむ氣なりおた
ふくこれにふるときはげんなかほをす

題工面塔

會俗

見徳山寺在人情慾皆深摺雲千枚裏無附
不掛心

工面塔

○工面塔 くめんつきてのちとうをみてう

んふてんふにくめんのくめんをする事なり
見徳 諺曰一富士二鷹三茄子此夢をみる度
一分ツ、そんなをする義なり

桐雲 雲中に百兩あり千人にすぐれたる里
の者つかみあてゐるなり三四人は少々のたのし
み有四十六人おぶないめにあつてかへる九百
五十人みな雲ばかりつかんでかへるなり

夷風歌

不拍氏

聞説狂歌師近年秀句歌可茶會頭月偏集
栗下庵

○夷風 及びす歌なり

近年狂歌大にひろまりて思ひくの狂名をつ
く連中相たがひに狂名のみ覺へて本名を忘ら
すその友をたづねて行ときはむかしのそ
しやも今のりんもあきれた顔してひつこむな
り
栗下 くりのもととて狂歌の宗匠もとのも
くのみ歎

氣象歌

性美人

しい

不知寒 まだ早ふをいすとおびをかくした
りはおりを出してくれぬなと手のあることは
かへすくもみなく様御きけんよくくはし
くひやうばんは氣を唐詩てそのこじつけを見
てくんなんし

通詩選笑知終

北里質種忙氣象夜曲被至寢覆蒲團不
敢及雜妓

○北里 くるはなり

去ちくさいそがしとはいつたん去ちにきた
るをちよつとかりて用をたし二重に外の去ち
やへつかはすをいふきせうにまかせてよぎや
りて上のふとんをきてねる也尤色ことより
ことおこる也一面しきのきやくの目にはす
ごく見ゆれと氣せう實はあはれむべきことな
り

誘人

大通隠居

偶來松葉屋雙枕三蒲團閑中無他事夜明
不知寒

○松葉屋 北遊廓曰左丁右側なりまことに
客をまつばのかんざしをなげてきやく人の來
なんすことをいのる

三蒲團 名代のまんぞうよくとち絲をほぐ
して見たりはしをあげて見たりする
閑中 枕より外に去る人のなひといふも久

北廓全盛名代

不許乘物
遊里一興

李不盡通詩選

東都鷄

日本房趣行

序
去年所著通詩五絕者書肆在前筆耕在後門
人代作率屬萬八名代雖妓徒傳寢言幸
因最良之引倒而未作切炎之包紙也今此通
詩七言古詩者四方瀧水一本氣而未嘗一合
難惡酒之割也屬者狂歌如花見虱狂詩如犬
齒蚤所謂陽春鏡餅其味彌堅其嚼彌
寡嗚呼銅脈先生飛脚塗遠梓屋仙女怨鶴

不下就知通詩之所以爲通詩矣

天明甲辰正月有二的歲

四方山人書于滄洲樓



通詩選

七言古 東方客
東方通客臨遊所
船頭飛新地雲
仲町橋下切悠悠
三十三間堂何在
畫三座鋪連二間
若妓縱橫過茶亭
佛開斗帳承朝日
兩側茶屋爭張簾
遊女禿兒大門側
連子窓中作合歡
天水桶棟天中起
素見相望不相知

四方山人編選
門人紀定九校
羽織醉亂始歌舞
暖簾幕捲土橋雨
山開祭度幾春秋
如矢光陰空自流
衣桁篋筒七寶環
雛妓絡繹向中町
神越鳥居稱正一
一群遊女共插梅
象牙珠珮萬種色
桂衣松上垂鳳翼
水道尻櫓雲外直
初會相逢詎相識

借問吹烟倚床柱
得成色客何辭貧
色客金持眞可羨
生憎枕元鳴笛筒
三線三下如口舌
片片草履過廊下
深夜顏白閨中出
通人脂下鐵煙管
淺茅原中鳥夜啼
隱隱朱門六鄉邸
發聲飛鴛東叡北
俱遊船宿挑燈火
篋輪芋賣地廻群
田町夜人如穗
段畝田町連山宿
衣紋坂裾拂地垂
全盛大盡三度來

會經切年度辛苦
願成金持不羨
橫去代來君不見
燕者隔壁調三線
河東長歌豐後節
鎮鎮鐵棒入深夜
書文頼客情非一
造手笑顏金百匹
大音寺前雀欲栖
遙遙土手八町堤
借舟入堀聖天西
俱往篋輪金衫蹊
鼻歌一轉口紛紛
段畝朝朝駕似雲
五十間道控三谷
夜見世燈映天煜
牽頭頓作若者盃

內證痛事爲君獻。別有屋形稱淺黃。濕深由來欺麴室。千金漫漫是豪傑。自言二度詔明月。節句物日不相待。昔時紀文奈良茂。寂寂寥寥宗匠居。獨有連中評物開。燕行。

歷家美酒鶴步香。升日中洲遊生篋。此可憐柳橋繫舟涯。銀棟瑤瑤玉爲者。三絃會合稽古外。樂研堀下陽春水。

座鋪惣花爲君開。約裏極日不相忘。夜中決不寐女郎。居績悠悠坐入湯。自謂敷初遣衣裳。花見燈籠俄頃改。只今惟見高名在。年年歲歲歲旦書。卷去卷來待二人儲。

立花町邊繁華子。參詣繁昌不動裏。風俗吾妻錦作雅。可憐草履細絲花。此時洲崎入升家。飲去飲來銚子傍。婆娑年增紅粉粧。

萬西徘徊武藏屋。傾首傾心平相國。古來酒宴皆所用。願作相繼結細腰。願君相繼轉相親。願作相繼壯一年轉。百人同憶色男氣。

羅漢願步榮螺堂。爲春爲秋佛妓王。況復明日芝居見。願爲貓皮中撥面。願君雙棲養兩親。誰論棋枕一度新。一德一損紙屑塵。

人去人來問誰家。各當日向長旬。明年穴開勝何在。更開屋鋪變成原。今人還當御年番。歲歲年年役自繁。可憐半死行倒者。伊昔高慢御用人。遊山見物兩國濱。

高祿相番召御前。一朝臥病無用捨。便草鞋打幾時。但看古來友達者。

知行檢見摺金錢。三春御暇在此邊。須央中貫切如絲。惟有道心坊主衰。

轉下手今步遲遲。十三七分復何時。至甲州驛一見新三光院日暮里山。去年今日十月會式題壁同前成。

獨被篋房淚如雨。繼三線箱渡船頭。入婦隨波任自由。醉客無心隨泥餉。業平都鳥空白鷗。歌成一曲凌蘭洲。鐵石亦應北國流。

君不見勘當帳面子。翻手按摩覆手爬。船中七福歌。

大黑三斗儀積前。恨不持槌打一拳。長如薯蕷半爲鱸。總而滿濕辨財天。

二日居艦寶船眠。常通隱里金流泉。福祿月代兀天邊。愛鶴樂鹿稱至仙。把撥琵琶彈便連。

畜生背附荷物。豈意宿中無馬芻。藝來新揚各酒筵。處處言分同堀內。

七箇八山鳥欲還。夜中着錦品川女。

還飛嗔嗔御殿山。陰鄙如星隔窓語。

透到追分每相屈。千軒萬屋咲當蒲。鄭潤緣長本陣連。自許能得不遊旋。

還飛嗔嗔御殿山。陰鄙如星隔窓語。

皎如硝子為倒懸
 醉中往往細物塵
 西宮市上肴店眠
 自稱我是海中仙
 著兜穿鏡百足前
 壽老神殿亦神仙
 今年稻似去年好
 始知嫁老渡杓子
 君家爐邊不可當
 外歸婆樣恒飲茗
 勝春章圖屏風
 賦得市川太刀
 市川腰間佩太刀
 公家惡驚餘坊主
 執之引立誰能前
 逆用東夷南蠻語
 布袋長齋坊主前
 蛭子一日釣百扁
 天子三男被乘船
 毘沙門形當世傳
 揮矛持塔如武邊
 浪乘船音響酒筵
 去年嫁到今年老
 飯上青蠅君莫掃
 孫彥玄孫三太郎
 煤滿罐子煮花香
 暫可拭汗栴為袍
 切幕颯開角前髦
 氣凜花道連禪邊
 更及四夷八荒天

靈屋似顏寫奇狀
 運筆為畫時一枚
 去年上木不惜名
 美君有酒能催會
 美君無錢不食着
 如今四角文不聞
 如今八文字本棄
 定會會應有名歌
 信州對飯作
 夜食不厭山盛飯
 眼前飯櫃又長滿
 主人有祿鉢坊主
 即今相對不食盡
 二月二日歸國除
 來年若此人不置
 三江花火夜
 天地乾坤儼相向
 使人心在棧敷上
 今年戲作仍流行
 美君不作四角文
 美君不讀八文字
 即席飛入何足記
 壹飯不厭五六杯
 腹中滿滿如懷胎
 報謝米程應不取
 飯後相思復何補
 願君且宿檀那家
 新粉進上蕎麥花
 浮樂興

三叉引潮連海平
 花火隨波千萬兩
 三絃嘯嘯遠酒宴
 醉裏流星不覺飛
 花火一色費金銀
 今晚何人見花火
 枝豆食無窮已
 不知新地樂何人
 南鏡一片去悠悠
 誰家今夜船州子
 可上生簀客徘徊
 樽三庖丁割不盡
 此時相笑不相聞
 玉屋長飛光不滅
 昨夜御袋夢落花
 通人流質去欲盡
 身代貧貧隱皆無
 兩國見物共日傾
 何處遊山如大名
 風吹虎尾又似電
 十二挑灯看不見
 皎皎白玉孤月輪
 花火何年初慰人
 本熟年年總相似
 但見茶屋掛階子
 青銅二本不勝愁
 何處拳酒四季樓
 應向樂巷卓子燕
 角屋勘定拂還來
 願逐雲者轉抱君
 鑰屋空鎖閣自分
 可憐今晚不還家
 土藏落城復斜西
 吉原品川無限途

更乘土猪牙幾人去
 君不見土弓諸客因娘聚
 天氣晴來山下間
 香煎山中非煎茶
 祇今惟有松樓鐵
 矢倉太鼓響
 不視芝居壯
 森田市村中村亭
 役者連名集三座
 顏見積物八百八
 手打連對最員
 式三番叟付千才
 花道斜通見付柱
 與樣內簾入
 暫聲冠素袍
 家虎木戶門
 安知江戶會
 茸屋堺町木挽町
 茶屋分軒橫二丁
 挑燈蠟燭數千挺
 番附扇賣正銘
 引幕口上平旦開
 引船直指羅漢臺
 女郎北國來
 割込象二年市

毛毼敷東側。火繩應風煙。校文世界定。足利組時代。時代日記鉢木新。工藤氣象三莊主。近江八幡平敵役。鬼王愁歎古今映。會我兄弟在鎌倉。具足借金將入質。景清重忠免。三方九十春已頹。俠客尺八八町遠。會我祭禮自千秋。例年土用時候入。女形紫帽子。不破桂木傘三本。

進上運菓子。札錢如雨墜。習藝歌舞戲。伊豆通日記。掃雪炊粟待明春。大望約東五月旬。鬼王團三忠節臣。老母困窮會我貧。朝遊大磯暮鶴岡。小林引鏡尙留郎。少將與虎粧。阿七吉三二替催。娼婦總角意休罷。俄興趣向事風流。歌舞諸君三座休。役黃金籠。信田葛葉狐九尾。

鳴神上人獨祈。且論三百兩金是。古來名人如慶子。始見友切丸紛失。未投手裏劍。浪華無復五人男。相顧出世皆有待。訥子和事既流傳。馬去馬來跡足馳。久觀芝居終難止。當時一旦遊芳町。倏忽搏風著振袖。黃金遺果二分殘。五井徒費驕。留場仕切喧嘩頻。貴人有見物。粉灰與家老。

白雲黑雲自相依。寧知四十七人非。道成寺藝真難視。俄聞範賴公出仕。放三羽矢。禁庭誰長假勅使。居然姓名咸應改。柏筵氣象今何在。爭名爭位徒出爲。空遣聲色誰見知。自言線香長一時。須臾食年爲白首。一服一錢交情厚。淡雪途食豆。惡口雜言輕貴人。女中無檢身。追從末社神。

已矣哉。第一回。路次爭先觀樂屋。稻荷町乘幾平伏。給金高逾積。誰知見功者。夜應鼻歌贈折助様。

狂言入夜多新規。三階自矜誠足登。評判封未開。獨負頭取才。平原芝。本莊鮫橋鷹。不向壘上登。面體新發楊梅樹。當夜發春色立川端。女悅春心長命丸。還將島田盡君歡。

跋 滄洲樓四方先生著通詩五絕而其名無隱。于世今所著之七言古詩亦復妙々謔浪之魁。當世之僑不啻使通人感概野夫亦復其。腹皮矣是自四方之一本氣就。不稱其味哉。近世之費書皆此糟粕而不足味焉。嗚呼。衆人叩願小鬟流行所謂雀千聲豈勝於鶴一聲哉。門人貞九樓。

腹唐穉人撰

通詩選終

叙
 觚不觚。五德爲四角。尺有所短。三尺棒何減六尺棒。故不入大門者。不知人倫之附合。不觀芝居者。惡識天地之大入。膠柱易三線之調。刻舟探花火之玉。測海以業平之蜆貝。割雞用牛島之庖丁。則殆見笑於大通之家。予嘗作通詩以授杵屋仙女。五絕歌行會席人口。三度目馬鞍。駟不及舌。嗚呼。地獄非遠。滄海變爲新地。極樂在近。卽席忽出料理。方是之時。閨巷之士。定二七三八之日。與區々坊主撫付之天窓。好語陳喬翰。一不亦不通之至乎。

天明丁未春正月

四方山人書于巴人亭新宅

狂詩諺解

四方山人編選

七言絕句

郭中禮日

大門

正月二日酒盃臺

茶席茶筵勸客杯

人情已厭舊冬苦

高慢那從北里回

【河東松の内】に云二日は茶屋にのりてと云々茶席茶筵とは茶屋の事である客に盃をすゝめておめでたうおざんすといふ所なり【諺草】女郎買のぬかみそ汁とて舊冬の苦はえれし御事されどすけん

の一徳に松はやの古風はありがてへあふぎやのあげ巻もきれい／＼など、高慢らしくかたるを云

至松葉

御祝言

三日翠籬樂三席遊

今春諸客作群集

獨憐傾國人繁昌

不似親仁顏腹立

【吉見細見五葉松序】に云若みどり春立をむる松のうちより松や／＼の年くる、まで古今の色も中の

町よしはらにたとへんもの松にあらすして何ぞやと云々げにもときはの松葉屋のおいらん瀬川のがれたへせずして松人の言の葉かけどもつきすうた姫松のいく千代かけてあらたにはれるこしぱりをみし玉だれの内ぞゆかしき繁昌の里なるべし【松の内】に云三日は客のきそはじめと云々又【四方山人集】かよひくる客をたのみし水莖の跡着ぞ春のにしきなりけるとよめりかゝる美人の百の媚と親父が顔の十面とは日をおなじくしてかたるべからず

贈朱椀朱器

知君茶器本翩翩。爲許開爐赴席邊。

高慢會中應計直。根來山下有經年。

おてまへにもみごとな茶器があるゆへらびらきをして會席をひらくのであるこの朱わん朱をしきはよほどかうまんなもので根來わんのふるきなればちや／＼むちやくにしてをくもしいから御料理のちや席におくるちや

戲贈三子君美人

狂詩諺解

紅粉青娥映素顏。野夫獨向閨房去。

櫻花坐上二丁間。讀學釋迦入涅槃。

【金羅傳】姉女郎に顔の二丁目トまことに二丁目のてうちんは芝居の板べいから出るものとおぼえてうしや内てう山とはくわんをんのてうちんの相印かと思ふいなかの大じんもこのさとにきたる思ひ出にひとりね玄やかの名代とつてねはんの床に入りしふせい三ツふとんのにしき戸にひなつるのすごもりは千山萬山大に叶といふ字のかんざし新ぞうかぶろにいたるまでいづれおろかはないはづとせつをうさんの直ばなしなり

櫻花生上とはさくらの花のはりつけをいふ

長壽臺 悠亭主

長臺便緩掃風塵。亭主圓窓泉水濱。

即今安坐尻堪痛。況復九年面壁人。

【長壽臺能書】第一あけんの長坐遊君のはり見世きん番のたいくつ下略一名延壽臺ともいふよく／＼ひまな男の作とみへたり、九年面壁【傳燈錄】にみへたるふんだんたるま夜もひるも赤い衣きて壁を

にらみわたる故事

坊様

真元氣

北越山中列角兵。饅頭煎餅對羊羹。庭中七尺蜻蛉返。門外唯聞太鼓聲。角兵とは角兵獅子の事であるまんちうせんべいはあまいものじや

【川柳傳】越後獅子五百がまはし立ぐらみ 按に角兵すら猶かくのごとしいはんや九一にをいてをや

送奥道者遊順禮

宋之陪

御客賞歡此地遠。木賃數處青蠅飛。補陀落下長相憶。秩父山中去不歸。千里の客はあれども伯樂はつねにあらすとかや、木賃とはきざうとはなはだいやしむ事ぞわれこ

れを宿屋めし盛にきけり

【秩父詠歌】ふだらくやきしうつなみのをのれのみ くだけてものをとは同行百人一首の歌である

振雙六

重井

大津一望禁庭秋。日見子供壘上遊。

聞道島田不可渡。

心隨洪水共悠悠。

【道中雙六】に云ひとつあまれば大津へかへる 下略 又【戀女房染分手綱】に云これく御らんせうたまやんせこれこそ五十三次のと云々【道中雙六島田之條下】に云大水にて三日のとうりう按に土塚の居風呂大磯の力持箱根の手形をわすれ吉田のと

まらんせ荒井のちんぼう龜山の大雨水口の虚無僧等一々筆につくしかたし異本

【夷歌連中雙六】ありこれ後人のなすところ一向わかりがたし

奥州詞

大瘤

座頭茶菓茶碗盃。欲飲三線夢中催。醉唱仙臺君莫笑。

古來音曲幾人哀。

【諺草】に云座頭の茶菓をくふたやうなと云々あんなるこんだか未詳【基太平記七ツ目】にみへたる宮城野志のふの仙臺ことばも此事なり按甲辰のとし【森田座顔見世大帳】第一ばん目二ばん目の間【蜘蛛絲幼稚問答】を引てふきや町太夫元スケとなり狂名橋太夫元家にて仙臺座頭の藝ありみな人感歎

せざる事なしまこと名人でムリ升
この詩もたゞ仙臺座頭の淨るりをのべて結句にむかしの人をなかせたる心持にて幾人か哀とつくれるかたしは韻字にてこされるかとういふもんだ
光とく寺の門か

二丁町詞

限想衣裳髮想容。春風拂檻棧鋪重。若非東側棧鋪見。會向三階樂屋逢。

其二

牡丹紅葉菊凝香。最負澤山宗十郎。借問三升誰得似。可憐海老倚威光。

牡丹紅葉を一説に吸物の事とす甚非なり牡丹は福牡丹にて三升のかへ紋紅葉は四ツもみちにて新車のかへ紋 菊は名代の瀬川帽子はまむらや大明神さまくの其中に名はかくれなき宗十郎澤山の字は澤村のこちつけ東夷南嶺北狄西戎天地乾坤第市川五代目の親玉花道つらねときてはたれかは肩をならふべきその嫡流をうけつぎしづみやの

むすこさん七才とかく寶珠のたま威光かやくおいたちはかあいのものやなア、つがもない

其三

立花銀杏兩相歡。各得町中帶笑看。拜借市村無限座。桐長桐櫓倚關干。

【川柳點】に云左近のたちは右近の銀杏なり【顔見世看板口上】に云御町中様ますく御きげんよく下略

【桐氏家譜】に云元祖幸若與太夫中略女子長桐一犬桐一坂桐一桐大内藏一千桐一犬内藏一桐長桐元祖より天明四年にいたつて二百四十五年

【同志ばらくのつらね】に云東夷南山の花橋北州にうへてそのはばくたり時なるかな西山の桐長桐が初志はると云々

客僧行

棚經坊主清明香。持佛拜來金箔光。但使主人能與百。不知何處是西方。

蘭堂先生孟蘭盆の詩あり左に在るす

孟蘭盆夜月如霜。我輩悲秋半疊床。
 素麵汁隨三猪口冷。棚經錢雜雁頭長。
 燈籠深映三尊像。爐氣輕浮五種香。
 共說明朝齋日好。可參淺草閻魔堂。
 うら盆のていこの詩につくせり そのことのはの
 句ひせん香清明香あま茶なことではゆかねどもこ
 うにはたひ百の錢さへとれば西はとつちともまら
 めまもつまのお所化のたよりがござるのみ

岡邊山屋歌
 影入熱湯豆腐浮
 夜發大門向三谷
 山屋は新吉原にあり名豆腐を出す岡邊は豆腐の異
 名朝かへりの客茶屋にて湯豆腐を食ひ三谷堀の舟
 宿まで來ても猶其味をおもふ心をぶ 船州は船
 頭なり

上戸醉巡南閨歌一朱
 誰道南樓行路分
 地轉八山爲御殿
 天廻九耀一作相紋

秀鶴樓送三路考丈出樂屋
 美人上辭中二階
 矢倉遠影碧空出
 中二階は樂屋のうち女形のゐる所をいふ櫻花とは
 【辰年桐座番附】重重人重小町櫻といふ名題なり此
 顔見世新芝居大あたりなり
 望大門口
 衣紋坂曲大門開
 兩側青簾相對出
 【吉原細見】に云衣紋坂此所往來路三曲にしてくる
 はをあらはさす又【娼妃地理記】にみへたり兩側青
 簾とは中の町茶屋のすだれをいふ水邊とは向島か
 まつさきかなんでもすみだ川邊
 早發惡態言
 朝衝惡態障人間
 兩町俠聲鳴不住
 あしたにとは肴うり買だしに行こうなり【惡態卷
 物】に云おまへさまの御むりはごもつともと云々

こうろわかるとは札の辻の事である【童謡】に云な
 づ八山ごてん山と云々星宿とは京傳が【天けい
 和句文】にもみへす五星七星十星のかたちを以て
 倡妓のあたへを定るをいふ

其二

醉客往還寺柵門
 品川本宿開新宿
 生醉あかばねのほとりを往還しあるいは駕にのり
 てゆくじや 本宿は新宿にまかず橋てまへより橋
 ひかふまで茶屋のあんどう晝のごとくおさるのか
 ほのあかきをてらすじや國猿は四國邊淺黃浦より
 いづるくはしくは【南客文集】にみえたり

聞菅原受二傳授
 櫻花落盡女房啼
 我讀菅原受二傳授
 櫻花落盡とは櫻丸はらきりの事松王いはく女房よ
 るこせがればおやくにたつたはやいと云々これ
 忠義のまゐるしなり梅花は梅王が事くはしくは【菅
 原傳授手習鑑】にみへたり

【太平樂卷物】又【俠中俠惡劍俠骨】に出たり【諺
 草】に云喧嘩過ての棒ちぎり木按に馬鹿なつら
 いふとはなのしたの【童子格子】にみへたり

霜落水門松樹同
 此行不爲鯉魚味
 霜ふれば柳はしの柳はちれども首尾の松はいつも
 おなじことちや秋風にはしるとは猪牙舟のはやき
 こと鐵砲玉に帆をかけたるときをいふいふこ
 ろはけふでかけたのはむかふ島のこいといふはつ
 けたりまことは堀からあがりのよしはらといふ世
 界なり一説に名君の字は名山のあやまりなりしか
 らば名山の客か未詳
 所帶賃粉
 吸飲切煙草香
 只今惟有定紋枕
 新家世帯不堪張
 會照三怨怒比翼房
 あら世帯はとかくたばこやが多いものじや女房は
 大かた川竹のながれの身よるべさためぬ二ツまく
 らにむかしをしるふなるべし

越中番子

越中 嶺鼻 破尻 頻頻
 番士 還家 搔總身
 木虱 如花 滿縫目
 只今 惟有 懷中紐
 【史記】司馬相如越中ふんどし一ツにて酒家のみせ
 さきにはたらくと云々按帆かけ舟の如きふとしを
 いふ長さ三尺と云々番士は番太郎の事木虱【木艸
 縫目】虱の條下に云花見虱むづがゆく味香し有毒
 貧士好んでこれを喰ふと懷中紐は東都芝金杉より
 出る鍋屋の何某の秘方なり詩の心はあきらかなり
 龍宮曲 園城 靈きんじやう寺のれいほうと
 昨夜 射歸 三上 蛭
 龍宮 前殿 水波 重
 田原 藤太 新承 寵
 案外 功高 賜釣 鐘
 三上山は近江にあり田原藤太むかひをみて龍宮で
 落をとしし事は【前太平記】又【龍都係系圖】に詳な
 り
 西驛 春 艶 西驛とは四
 西樓 夜 靜 菖蒲 香
 欲入 三桃 園 道路 長
 斜抱 蒲團 一時 見 札
 龍騰 月色 院 三光

春の詩にあやめさくとは露しらぬとかや桃園は中
 野の西二里にあり時札は夜九時七時六時ありさそ
 ひあはせて下にゆく八時ばかりはなし三光院四谷
 にあり新日くらしといふ稻荷神社あり初午にぎや
 かなり雲樂の別荘より近したぬき熊などのすむ所
 なり

西驛秋艶

御封 不及 美人 張
 止動 風來 牧草 香
 却恨 投錢 祈堀 内
 空懸 四谷 待天 王
 御封堀内より出るはり御封の事をいふ柱にはりを
 き七日めくりに上へあげてはる三七二十一日にい
 たりてその病いゆるといふそのあいた樂等を禁す
 止動【風來山人天狗鬪縁起】しいとどうとの文字
 はあふても馬めが合點いたさねばと下略ほりの内
 るしきのうちくるくといひてその暮のたのみを
 いとひてきたる客また夏あたり立かへりて六月
 四谷天王のまつりのころくれども又盆前は心もと
 なき七夕客をいふ
 欲心祝詞

眞成 見得 久 尋 思
 火照 行燈 知 妄 想
 見得【損思博千金方】に云五臟の煩は夢をなす一富
 士二應三茄子をみる時は千二百三十番と考ふこれ
 を見得といふ其病治しかたし名づけてもつたが疾
 といふ按かん應寺水いなり第六天などは事ふりた
 り
 今日に至ては何人目くも出来たり又【一ノ富見
 得秘傳書】にくはし
 夢得 黃金 金 覺 後 疑
 分明 富札 立 錐 時

蒸籠曲

白馬 金鞍 從 賴 光
 童兒 十五 燒 衣 裳
 棧敷 少婦 飾 花 坐
 遙見 飛塵 上 覽 場
 せいろうはつみ物しん上のせいろうなり詩の心は
 神田祭とみへたり【風土記】韓田神社とあり【江戸
 砂子】神田明神は平親王將門の靈をまつり祭禮九
 月十五日と云々賴光【神田御祭禮番附】七番すだ町
 一丁目の條下に云鬼のかしらの萬度附祭賴光山入
 かいちんむしや六きらい光ほうせうさだみつすへ
 たけつなきんとき馬上はなぞのひめくにたるひめ

はなかごにのり六尺六人ツ、おきななたし云々
 按又唐來參和があらはす所の【賴光邪魔入】菱川春
 童が【大通山入】喜三二丈の【鬼窟大通話】など少
 々異同あり一決しがたし童兒十五【同書番附】に
 出たる十五童子のねりこのことをいふか八木高直
 が本に見へす猶たづぬべし

橋艶橋は

橋中 少婦 不 知 愁
 帽子 凝視 列 比 丘
 忽見 三銅 丸 太 色
 梅合 折助 覓 梳 油
 【梵網經】に云比丘丘尼は二百五十戒と云々按未
 世に及んでわづか百戒の通用となる帽子は花帽子
 をいふ丸太【和名抄】比丘尼一名丸太【風來山人志
 道軒傳】に云大橋の丸太はたてやうとふせやうと
 錢まだいはこのことなり梳油芝の大好菴兩國の
 五十嵐を始とすと【世事談】にみへたりいふ心は大
 橋のびくに花の帽子にべにかねつけて何心なくみ
 せにいたりしにたちまち百銅のせにをみてをのが
 あさましき世わたりゆへ坊主あたまのはへさがり
 にすきあぶらをつけて折助といふお客の足をつな

ぎとめたるいとさくららの花ぞの色のさめやすき身の上をいふ尤あはれふかし

出精行

建部源藏望草紙。大方懸水無乾時。店賃高直門人絶。扇子到來知是誰。

建部源藏は手習師匠の名【菅原傳授手習鑑】にみゆ古歌にてならひはさかにくるまをおすとくゆだんをすればあとへもどるぞとあるに大かたさうしに水をかけてならはぬ子供をいふ扇子は弟子入のえるしなり

【論語】にもそれみづから束脩

以上を行へばとありやす

敗軍行入たることなつくり

火見面高百尺樓。荒言獨坐屏風秋。更吹口笛蒲團上。無那野郎根付愁。

火見とは面の高き人に比していへり秋の長き夜屏風の内でひとりねざめのあふらつば口をして口ふるをふきごうはらまされにつくりたる詩なり野郎根付とはひとりふとんの上にあるかたちをいへり

【神靈矢口渡】入道道誓云うれぬ根付をみるやうにふとんのうへにおればかりとみへたり

五明樓贈雛妓

花扇連襟夜入床。五明送客大門傍。樂遊雛妓如相問。一片執心在玉章。

五明樓墨河の西燕都街にあり木地臘色の惣格子にて棟上の高き家なり花扇は二代の名家にして能書の名ありたき川たけのなかれきよくかたらひつたふとをちの人々中の町の夕ばへに花か人かあやめもわかぬかたちのは外にたぐひもなこしといふせりふなり樂遊【手毬歌】みなさま子供たちはらくあそびと云々

一片【新内節の曲】に云義理一へんのあだつきはけつく心のもめるたね下略

柳太夫稱豊前會歌柳太夫は柳稱

富本承流西滿東。最初先奏是齋宮。女子預開櫻草待。祗今誰並太夫功。富本は淨瑠璃の一流なり齋宮は太夫の名高名なり

櫻艸は豊前太夫のかへ紋いてう鶴さくら草みな人のえる所なり富本豊前大夫門弟富本の字をおかす娘八百八町の出格子にみちたりくはしくは【柳橋櫻艸】にみへたりさて講釋なかばにちよと御ことはり申上まする富本流の板元は江戸通油町耕書堂でござります御用の節はおもとめなされませとなんのいはすともよいことをいふぞ

二

鳥落里長調子鳴。

拂吹兼太夫迎座。

鳥落とは飛鳥もおちるといふ事里長姓は鳥羽屋故

にかくいふ式佐姓は岸澤ともに三絃の名家なり常磐津兼太夫の名は注するに及ばず世の人あまねくまゐる所なり小松川のながれつきせすしてときはの松のひとしほにみどりの色のまされることいふはむだなり

將基玉のこじつけなり

玉角徘徊望三桂香。飛車走去不稱王。盤上靜時無一戰。

歩兵翻作不成金光。

【三才圖會】將基は信長公の時より起る【將基經】にくはし玉は玉王なり角は角行桂は桂馬香は香車王と稱するは龍王の事飛車歩兵は玄れた事これほど駒をならべたて、金銀のこまのみへざるはいづれにしてもふつていなものと身につまされておもひ侍り

番夜作

藥鏹寒天獨不氷。

小僧今夜廻町内。

自身番のていをつくれりくわしくは大屋裏住【年中行事】にみへたり町入用の多きをなげく詩也

くわしくは白子屋にたづぬべしシラアン

音淨風鈴蕎麥還。

借問按摩何處去。

風鈴蕎麥【食物本草】に云夜たかそばと似て非なるものなり大平にもり上おきありて毒なし按摩の笛を吹く事近比の事なりいにしへ薩摩いも笛をふきし事あり此玄關はいづくをさせるや上に横町もの

ほしの間とあれば町いしやか名主さまか但山師の
げんくわかあとの中番てきいたまへ

漁舟詞

漁師遠上本船端。一片棒株萬伊淵。
今日何須怨無獵。暴風不度相模灘。

漁舟は沖釣の舟なり、棒株は海上の地名帯さゝみ
よあひのすなどの類【漁人道しるべ】に出たり相模
灘は御濱の沖にあり石尤風のうれへあり

壯年行

無勝負
舉扇谷風小野川。分關常少快晴天。
一擲千金渾最眞。柱徒四本不知旋。

谷風名は梶之助奥州の人なり小野川名は喜三郎大
津の人なりそもく相撲のはじまりは【日本記】垂
仁天皇七年七月當麻蹶速野見宿彌といへる狂歌師
の名の如き男角力をとりし事あり又【相撲大全】或
は【四十八手戀諸分】等にくはし關【秋の寝覺】に東
谷風の關西小野川のせきとあつたやうなりよし
うそだにへ一擲千金とは花をやるをいふ土俵ぎは
につめ居てうち出しのたいこがなり四本柱とかけ

むかひになるまでかへる事をしらざるはよくく
のすまふすきとみへたり少快晴天とは晴天十日の
うちとかく雨のふるをいふいにしへより晴天八日
のさだめなりしが安永七年戊戌三月二十八日より
深川八幡にて角行興行ありし時より十日となりし
とをばゆ

柳原何事引連歸。眉碧月明雨國圻。
二十四錢沽昨夜發。不堪清左共浮飛。

古詩云二十四文明月夜と云々夜發【したがる和名
抄】夜を待て發するを夜發といふ【庭訓往來】遊女
夜發之輩云々清左【せんぼう集】酒異名

郭中無處不繁華。於職毛毼新造斜。
茶屋挑燈傳蠟燭。三絃散滿五町家。

【其角十牛贊】やみの夜もよしはらばかり月夜かな
といひしことく繁花ならざる所なし詩の心はいは
すとまれし御事

送客茶石州

芋魁熊手拂錢堆。無三客不言花又回。
土堤近所遠千壽。盡是女郎寢後來。

一向千家樂自分。薄茶點說紛紛。
手前今日誰相見。遠石州中有拔群。

千家【茶人系譜】千利休遠州は小堀遠州石州は片桐
石州をのく流義をなしかからず【川柳傳】酒盞半麥
酢をまはし〜のみ又すまふとりかこひへいれて
あはれなりも出來たり

永久夜泊

鼻落聲鳴。饅頭下戸拔錢緝。
味噌山樂寒冷酒。夜半小船醉客人。

【英一蝶朝妻舟替】あだしあだなみよせてはかへる
波枕といへるもこの類にしてひんのよき物なり

楊枝劇詞

矢大臣門淺草濱。數株寒木自生春。
晚來豆散鳩如雪。飛入本堂不恐人。

矢大臣門は淺草寺の東門をいふかん木は楊枝なり
【柳橙】やうじみせせんたいむりな鳥をおひ
自北州至西戲呈之花又村諸君

狂詩詠解

【諺草】一升いるふくべは一升いる又男は裸百貫と云々古酒と新酒に七分三分の割やうありと折助が口傳なり【萬葉集】太宰帥大伴が歌にしるしなき物を思はずはひとつきの濁れる酒を飲べくあらしといへるも此の詩と同腹中なり

服鹿葉益そはな香は 應客

秋染龍王葉半紅。 甲州西望草平空。

誰知狼犬河原意。 服部蕭蕭國府中。

龍王煙草名甲州又同【川柳點】しうとば、甲州月に二斤のみ西望とは馬につけてくるをいふ草平空とはたばこのけふりをいふ【河東廓家櫻】たばこもけふる花の雲おいぬ河原近年はやり物なり萬象亭が

【新女意題馬鹿集】神明の妓仙臺の客に對して曰ナニおいのがはらだへヲヤいとこのかはらがきひてあきれる服部國府みな烟草名蕭々とは少々といふ事かさうはきこへず烟草舖障子に云諸國名葉色々書院

時圭珍客引相過。 演禮雙方盡綺羅。

無限廣間行欲盡。 圍居深處數奇多。

時圭【名物六帖】自鳴鐘トケイ演禮【中庸】禮儀三百威儀三千委は【小笠原駝方】にみへたり圍居【茶湯秘傳】にくはし數奇は物すきの多きをいふおざしきのきれいさおかこいのお物すき御茶の服加減お料理のあんばい珍客と亭主と双方ともに機嫌よくめでたくの若松さアまアよるへだもさかアへて葉もしゆうげるおめでたやちよのう子おめでたやせんしうばんせいくばんせいく萬々歳

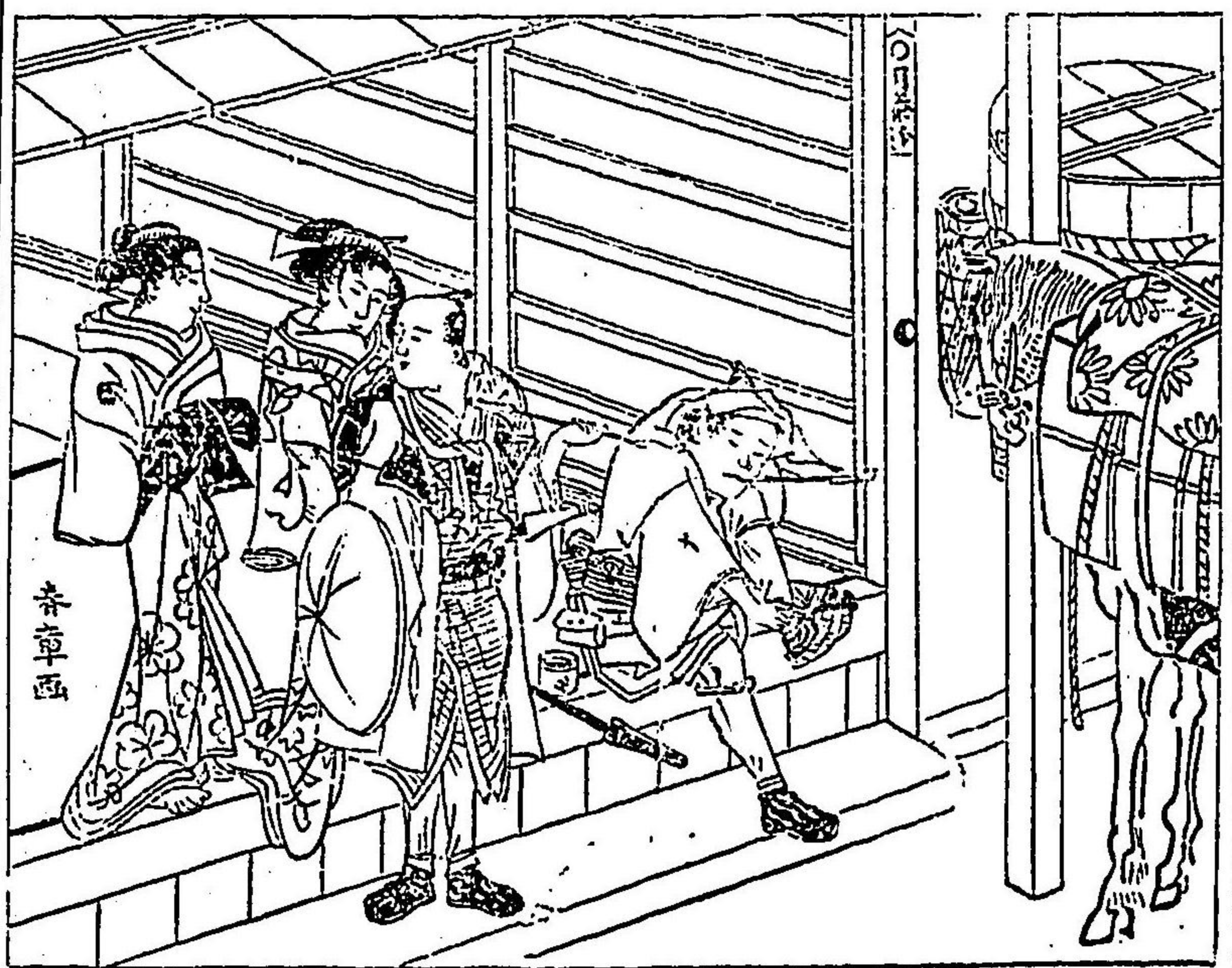
狂詩諺解終

輕井道中粹語錄

序

學者の足下。藩中の貴殿。俠者のおみさん。通のぬし。何れもきさまはきさまなり。その返報に不佞といひ。身どもといひ。おれがといひ。わつちといふ。いづれも拙者は拙者なり。べい〜詞がやむべいなら借りても三百つん出すべいと古よりの諺なり。夫輕井澤の地たるや。川柳傳にあらはれたる。一方の色里也。今雪國の肌を探り。飯櫃の底をはたき。大通變じて變通にいたる。淺黄の裏の裏のうら。紺の布子に白あがり五所紋あり〜と。かきしるしたる此一巻。あまねく世上にうり詞として。その買ことばをまつはたそ。山の手の馬鹿人なり

姨捨山人書



たちつと咄してもまなさらんかい【かる】始めてといふ物ナあじなアもんでこれぞといつて語るべし事もおさんねへものさそれにはアお前がたの様な江戸衆にやア何をいつてもわらわれへと思つて語るべへと思ふ事もかたらねへちやあノウウきさん【うき】さうだア〜それにハアわし共がやうに年のすけねへ者ア猶さら笑われべへとおもつて口さアきかれねへ何だか怖いと思ふせへかげへにさふいようだア【伊】ナニ江戸者だとして何もそんなにこはがりな事アねへはな【嘉】さむいのは窓の明て居るせへだたてよう【かる】窓たアあんの事だかおもやアさまの事だもし【うき】何をいふにもでかく違へ申すよんべもお客がてうちんがめつからねへとつてさがさつしやるから何だと思つたら火俗の事【さ】勝を二勝 持て来る あいお吸物が出来ました【伊】是はお世話ノ〜サア旦那【嘉】取てこれは變のコレ見や 内を見せる【伊】あれが爰の卵か江戸じやあばた餅といふせへ【さ】ホ、〜あなたア御酒をあがらんさうだからそれ【伊】そんならゑへたをとつてウ、是は正眞のたまごだ【かる】なにハア玉子に精進なアござらねへ皆

なまぐさへもし【伊】いゝにやよし〜【嘉】コレ此箸を見や【伊】なんでも今夜アへんちきさ【うき】ヲヤ寒竹の事をお江戸じやアへんちきといふげだの【初】お客さんがた湯あびさつしやりませんか【さ】ほんに今の内風呂へおはわりなさりまじな【伊】あい旦那サア【嘉】そんならさうまようかいの【初】サア来さつまやりましと先へたては【うき】【伊】サア一盃呑なさらんか【さ】いゝハア後でいたゞきませう【伊】後といはずと呑なせへナ【かる】ナニよさつまやりましまだいそがしかんべい【さ】アイ又今におまんまを出しますからいそがさうござります【伊】そんなら行てきな【さ】はい左様なら水いらすに御咄しなさりましと立て【伊】お前のみなさらんか【かる】いゝヘサちつとでも呑とハア面が猿のように成申よ【伊】それでも今夜アさむいからよからう【かる】何ハアさふい折に呑と一倍さぶくなり申すよ【伊】さむかアもつとこつちイ寄なさへ【かる】最前からさうは思ひますすがわしらが様な者アさぞいやだんべいと思つて遠慮のヲまます【伊】ナニいやな事があるもんだすつと爰へよりな【嘉】湯より上 サア伊スはいらんかい

【伊】エあい【かる】サアいきますべへうきさんほどうしままた【嘉】今そこへ所へ【うき】サア茶ア進ませせう【嘉】あい【かる】そんならサア【伊】いかうと立【かる】所へ【うき】コレかるさん浴衣ウバ竿サアイかけておわたによ【かる】おい〜【嘉】湯へはいつたさかゐいかう腹がへつたようじや【うき】今におめしが出ますべへマア酒でも呑つまやりませんか【嘉】わしは酒は根から呑やせんお前のみなさらんかい【うき】わしものみましねへ【嘉】そんなら是がよかろたべなさい【うき】是アはあ好だもしアゼ食つしやりませんか【嘉】わしはモウいやじやはいナくはんせ〜【うき】そんなら〜【嘉】ほんにお前はゑらう好なさうでうまさうなくひやうじやわいの【うき】げへに好だアもし【嘉】大概いくつほど給なさる【うき】何さお江戸衆なんだア信濃者として大喰のするやうにいはいつしやりませんか【さ】おまんまをヤヤもう八もくへば澤山だもし【さ】あいおまんまをヤヤもうお一人のお客わへ【うき】今湯サアいかつしやりまし【さ】そんならマアお隣出さうかね【うき】いんナア

さつきからげへにひだるいといはつしやるからマア爰へ出しなさる【嘉】ほんに先イ給いせう【さ】さ様ならさうなさりましお一人は又お跡でも【何もござりません【嘉】是はお世話〜【さ】お前頼んまうしますよ【うき】あい【さ】又おとなりへ出さねへけりやア成やせん【うき】お隣は誰だアもし【さ】田毎さんの彌五さんでござんす【うき】フウ彌五左衛門さんが来さつたか夫アハア田毎さんナアうれしかんべへ【さ】この頃じやア追分の松屋とやらイいきなさるとサ【うき】さうだアとよ何でもハア男といふ者アまづいもんだアよ【さ】夫ならお頼ん申やすと【行】それでもハアめしびつが【さ】おはちハ今によしやす【初】アイめしびつと持来り【うき】サア替さつまやりまし【嘉】アイそんならコレサかるく盛てくん【うき】アゼひだるいといはつまやりまし【さ】おさんねへか【嘉】まだ食やすがそんなに盛付ちやアくひにくいわいな【うき】どうでもお江戸衆だあナわし共が方なんどまやア絶食だアといふ病人が此位にもつたのヲ三盃計アくひますよサアお汁のウ進ませせう【嘉】そんなら憚ながら【うき】アニは〜かりあせハアなん

ぼかき立味喰だアとつて干葉計じやア悪かんべい上汁のヲも入ますべへ【嘉】おかしどうでもよいわいな所【伊】湯より上り来【うき】わしがお客がひたるいといはつ去やりますから先サはじめましたよ【伊】よし【うき】お前チの膳もさういふべへナ【伊】アイさう云てくん【か】手拭ひはどうさつ去やりました【伊】ほんに置てきた一寸と取て来てくん【か】ヤレはいくちもねへ事だア【伊】なんぞくへる物がござんすかね【嘉】いゝにやモウやつぱり夕の通りじやわいな【伊】そいつアいけねへネ【初】汁を持来【うき】サアお前もくはつしやりましアゼ刈もさんわへ【伊】イへ今一寸と手ぬぐひをとりに【か】是だんべへの【伊】ウ、それ【か】うきさん大にお世話よ【うき】何ハアせわな事もおさんねへあつちにもお客が在からお崎どんがいそがしかんべへと思つて【か】ほんに彌五さんもきさつたとの【うき】さうだアと【初】アイお食を替さつしやりまし【伊】ウ、さあ【か】アゼついで居すともゑへぞい【初】そんたらお頼ん申ますべへ【うき】めしびつウばこい打置たがゑへ【初】湯サ持てきますべへ【か】何ぞ替さつし

やりまし【伊】いゝにへモウ旦那んと木曾路はむごいね【嘉】とんと肴のない所じやのよう何所でも出すもんじやがアノうづわとやらもないかいな【か】アイうづわも少へげだで高遠の御殿様が此前も甘兩とやらで買つしやりまし【伊】ハテ高い物だ【うき】ほんにわしも一度鳴所を聞ましつけがきつくはい【か】と鳴ましたつけめし【さ】おくれたびれなさりましたらうお床にいたしませうサアお前がたも着けへてお出なせんし【か】そんたらサアうきさん【うき】あい二人とも【嘉】こなさんの物云計りはかわいらしいわいな【さ】ほんに初では嘘をかしようござりませうに【伊】イヤもうとんだ變よ【さ】さうでござりませう私共がき、馴て居てさへをかしい事がござりませ【伊】時に旅籠代は【さ】アイ明日でもようござりませ【伊】そんならあすの朝一所に勘定去やう【さ】取てあいだを仕切らずはわるうござりませう【嘉】ウ、まんさらではいなもんじやナ【さ】左様ならかういたしませうして仕切る【伊】屏風の氣取はどうでござんす【嘉】とんと佗た物じやナ【さ】ハイ御きげんよう【伊】そんならあすは七半立だよ【さ】アイかしこまり

ました【嘉】おさらば【伊】今夜アゑへ江戸みやげでござんすせへ【嘉】ほんにはなしの種じやナ【伊】うづわの間ちがひなんぞはきつい事ネ【嘉】イヤもうやう【こたえて笑はなんだわいノそしてマアあのわしが女郎がぼた餅を十七八くふといふたわいな【伊】ほんにかへハ、ハ、ハ、【か】サアお前がたそべらつしやりまし【嘉】サア寐よ【うき】夫だらわしは先サねますよ【か】おめへもそべらつしやりまし【伊】ア今に寐やすがあすの朝まごつかねへやうに何かをちつと取あつめて置てねやす【か】そんたらわしはその内お客の連衆がきてござるから一寸といつてきたくござりまするが夫ともハア悪くおもはつ去やるべへだらいきますめへ【伊】ナニサよし【か】いつてきな【か】そんたらいつて来ますよ【嘉】廻しといふ所かいの【伊】そんなこつたさうさ【うき】あしたア何の事だへ【嘉】廻しとは何さアノ何さ摺木の事【うき】その摺木がどうしたもし【嘉】いゝへナ土産に買った摺木をよう仕廻てくれといふ事いの【うき】アゼお江戸にやアおざんねへか【嘉】江戸にも有はあるけれど名物じやから

土産にするじやわいな【うき】何所サアの名物だアへ【嘉】アノ何さ東海道薩陀峠の名物さそれじやさかゑ碓井峠の孫杓子さつた峠の孫すりこ木といふわいの【うき】はてなもしアノ孫杓子ア抱瘡の咒ひに成げだの【嘉】ウ、孫摺木は麻疹のまじなひサほんに抱瘡といへばお前のつむりはとんと抱瘡疾のやうじやわいな【うき】あせへ【嘉】櫛もかうがいもみな赤いさかひに【うき】よくあんでもいろう【の事べへいはずしやる憎らしいの【か】これはいづく【嘉】ヲ、痛いわいの【伊】なんだかもてるといふもんぢやアねへネ【うき】聞つ去やりまし【さ】の事べへいつてなぶりやる事よ【嘉】ナニなぶるのじやないわい【伊】スはやう仕ようて寐やいの【伊】あいうふせりませうおらが女郎衆アどうしたか知らん【うき】今に來さりませう【伊】ねて待ふ【か】【か】來さうさん【カ】ヤレハヤ寐たさうだアわしがお客さん寝さつ去やりまし【伊】今まで起て待たがあんまりお前の來様が遅へからねやした【か】そりやアはあおきのどくだもしサアわしもねますべへ【伊】ほんにぬしやア幾つた【か】わしかへ今年取て二十五だもし【伊】夫に

やア若へようだ【かる】アニはあ若へ事アおざんねへ
 【伊】やつはりこつち生レカ【かる】よつほと阻て居
 申よ【伊】どこだ【かる】諏訪在郷でござりますよわし
 もハアこんなア所へ来る筈じやアござんねへがとつ
 さまがどうらくで江戸サいつて行衛が知れましねへ
 夫からハアかつさまとわしがすべへ事がねへからカ
 テこけへきました不便だと思つてくれさつしやり
 まし【伊】そして其おやぢ殿ア江戸に居るのか【かる】
 さうだといひますよどうぞハアお江戸サア下つて尋
 ね度思ひますけれどもすべへやうも御座りましねへ
 【伊】江戸は何所だの【かる】あんでもあま酒のヲ見る
 やうな名だつてもし【伊】どうもそれじやアまねねへ
 かうと醜なればア、何か麴町か【かる】ヤレそのかう
 じ町よ【伊】麴町といつても廣い事だからまねねへ
 【かる】そりやアはお仕方もおさんねへうきさんなん
 だアモウ夜中だアもし【伊】いゝにや今まで咄しごゑ
 がまたつて大かた例刻だらう【かる】例刻たア何の事
 だへ【伊】例こくとは例刻の事【かる】ウ、何たかへ
 惠比須様の兄弟ぶんの事だんべへ【伊】マアそんな事
 たさうさサアむだアやめて寐よう〜又あすがはや

いから【隣座敷客彌五左衛門】空色木綿紋付のたけみしか
 へてわからず裏は襦袢しと見へ茶色木綿に上の方は中形のこもくき
 へるな一ツ着て帯はといて有ゆへ何かしらす白もめん黒きぬのふ
 しも少し出しかけ床のうへに大あぐらかいて居ながら是さ〜
 こつちよウむきなさろ【相方田毎】是れまきすがたにて
 布子に黒めぬの如く光る色の丸くよさつまやりましたん
 けなしめ背中をむけてすはりある
 だアきげんじやアおざんねへ【彌五左】マアちよつと
 さは〜【田毎】ヤアはあよさつしやりましよ【彌】
 少しは立ウ、扱者おれがいやになつただアなぞんた
 こゑにて
 らどうすべへおつふられた所に居べへ筈もねへと立
 てる【田】その帯をエ、もう何の事だもし【彌】あん
 の事じやアねへこつちよウむきなさろといつてもや
 あだ〜といふじやアねへか【田】サア夫もわしが
 あまり小腹がつつ立たからの事だアもしアゼはあそ
 んだら追分の松屋サいかつまやりました【彌】そりや
 アはあおらが悪めでもあんべへがガラさそはたれア
 からの事だアよそれもはア友達ならば断もゆんべへ
 けれども名主殿の猶子の言れる事だからやあだとも
 いはれねへから二三度アいつたアけれ共何お身様に
 見替へへ【田】そんたらさつきの文さアあせ見せさつ
 しやりましねへ【彌】おらも見せべへと思つたアけれ

どもさつきやアはあ張合に成つたアからの事よ何も
 むづかしい事アねへけれどもでかく文者だアよ【田】
 どれ見せさつまやりました【彌】ソレ見なさろとこくら編
 より出【田】ひらきこりアはあわしがにやア讀つれへよ
 んできけさつまやりました【彌】そんたらおれがと取て
 ○こうびんにまかせ一筆申入〜過しよべは久
 く物かたりのふ申たあだはあ其のちはそれ様の事
 べい思ひ〜らし手のものもか〜らうちやるやうだつ
 ちうよんべもきやるべいと申事たゆへよふとへまち
 もふけのし申たゆへけさあはあさま山のふびん
 のみるやうにむねかがた〜つんもへ申こつたつち
 うたいはあはやくてへめんのまたくがんのふかけて
 まち申〜【田】成ほどハアおもしろく書たアな返
 す書のウ讀つしやりまし【彌】アニ是アはあ讀にやア
 及ばねエ言傳だアよ【田】ドレ名サ見せさつしやり
 まし【彌】名ア見すとよかんべエ【田】いんにや〜
 何でも見せなさろ【彌】そんたら見なアさろ【田】こ
 れであんだもし【強】千年だアよ【田】ヤレハア可愛
 らしい名だアな文さア上手なり惚さつまやる筈だモ
 シそれだアとつてもこな様とわしが中アきのふやけ

ふの事じやアござんねへハサたげへに根性骨ノウ打
 明て女房にすべへ成べへとつてやれバア御勿體無天
 照皇太神宮様のウはじめ神様連を證文にも書入た中
 亥やアおざんねへか今と成てこな様の氣が替ればわ
 しはハア何としますすべへ餘りと云アむごつちねへ人
 だアよ〜【彌】ヤレ何てもそんなに氣サもむ事アね
 へおれたアとつても申合のウまたもんだ物ヲ如何様
 の事があつたとつても替はるべへたア思はねへよヤ
 レはあ泣事アねへはよ【田】な〜そんたらどの様ナ
 ア事があんべへとも替つて呉ますなよ【彌】何ハア
 齒柄杓のウ手にとらねへ法もあれかわる事じやアね
 へよ【田】ほんだケかへそんたら私ア何も云べへ事
 アござんねへどうしたもんだアかハア此様にでくか
 可愛く成たと云も約束事だんべへよ夕もお江戸衆ウ
 お客に取たら床花だアとつて大錢のウ一本くれさつ
 しやつたから何でも今夜ア仕廻て居て呼にやるべへ
 と思つた所イ來さつたもしマアよく積つても見さつ
 まやりましたこな様と申かはしのウまてからアはあ
 どんな美人男でも目サ付筈アおざんねへ只ハア明
 ても暮てもこな様の心がかはるべへかとおもつて苦